



比較的近い関係にある一群ではあるが全て同一時期に存在したものではないことも又事実であろう。

次に、第一群土器の時期について若干の検討を加えることとする。東北地方の土師器の編年研究については、氏家<sup>(注1)</sup>和典氏をはじめ、草間<sup>(注2)</sup>俊一氏、桜井<sup>(注3)</sup>清彦氏らの業績がある。その後の調査資料の増加にともない氏家<sup>(注4)</sup>氏をはじめとして、桑原<sup>(注5)</sup>滋郎氏、阿部<sup>(注6)</sup>義平氏らによって新しい視点を導入した種々の検討がなされ進展してきている。岩手県内においても発掘調査の増大と資料の増加にともない土師器の編年についてはいろいろな角度から検討されてきている。

ここでは諸先学の成果をふまえ、その編年的な面について若干検討することとする。

第1群土器については、類似性の強い土器の一群であり、そこには極端な時間差の認められないことは既に述べた通りである。これらの土師器群の編年的位置は東南北半における栗圀式といわれるものに最も類似する一群であり年代的には(奈良時代前半)7世紀～8世紀初頭に比定されるものと考えられる。当遺跡出土のこれらに類似する土師器としては、今泉<sup>(注7)</sup>遺跡、膳性<sup>(注8)</sup>遺跡、猫谷地<sup>(注9)</sup>遺跡における出土資料の一部が該当する。

これらの土師器群は類似性の強い中でも遺構との関連において把えると次の2群に分けられる。

I-a群…第1、4、5、19号住居跡 I-b群…3、6～10、12～14号住居跡

前者は、坏A Ia1類が主体を占め、坏Ia2、A Ib1・2、A II a類がわずかに含まれるもので、c類はまったく含まれない。又、後者は坏A Ia類も含まれるものの、坏A Ia2、A Ib1・2、A Ic類が主体を占めるという相異が認められる。甕については、両者それぞれ類似の構成状況を示しているものの後者においては甕A II類が比較的少ないという特色がある。

概略的には以上のような相違点が認められるが形態、技法上の点を中心にみていくと前者においては形態的には口縁部が外反、あるいは直口気味の器高の深いものが存在し、口径も16cm以上のものが約8割を占め、内黒比率も約50%と低い。これらは栗圀式といわれるものより、より古い要素を有しているものとして把えることができる。又、後者においては、形態的には沈線化の傾向がみられ前者に比して新しい要素が認められるものである。

長胴の甕については、a、b両群ともに単純口縁を有し体部最大径が体部中心、あるいは、下半近くにあるものが主体を占め、技法的にも刷毛目が主で「ヘラケズリ」「軽いケズリ」の少ないのが特徴であり、底部が突き出しているものが多い。これらは栗圀式における甕の特徴に類似するとともにより古い時期に属する特徴をも合せもっているものといえる。以上のような結果からa群は栗圀式でも比較的古い方に、そして、b群は栗圀式の中でも新しい時期に位置するものと考えられる。なお膳性遺跡における知見によるとa群としたものが、あるいは新しい型式として独立させうる可能性もありうるであろう。



— 上餅田遺跡 —

- (注1) 氏家和典 東北土師器の型式分類とその編年 歴史14輯  
(注2) 草間俊一 盛岡市史先史期 盛岡市史第1分冊 1958年  
(注3) 桜井清彦 東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題 館址所収 1958年  
(注4) 氏家和典 陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって 一奈良・平安期の土師器の諸問題—  
(注5) 桑原滋郎 東北北部および所謂第1型式の土師器について 考古学雑誌第61巻4号  
(注6) 阿部義平 宮城県新田遺跡の土師器 考古学雑誌第54巻2号  
(注7) 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 第60集第XI分冊 岩手県教育委員会 昭55  
(注8) 岩手県埋文センター 高橋与エ門氏の教示による。  
(注9) 猫谷地遺跡現地説明会資料 1973. 1974 岩手県教育委員会

〔第2群土器とその年代〕

第2群土器については、各遺構における出土点数も少なく多少無理な点もあるが、およそ次のようなことがいえる。即ち、本土器群は、坏はヘラ切り無調整の須恵器を主体とし、わずかに回転糸切り無調整の須恵器や、赤焼き土器を含む。更には、ロクロ未使用およびロクロ使用の土師器を例外的に含むものである。坏以外では、器形の正確に判明するものが出土していないので明確なことはいえないが、傾向としては、ロクロ未使用の土師器の甕、須恵器の甕が共伴し、場合によっては、須恵器の高台付坏や壺形土器等も共伴するものようである。

以上のような土器組成からみて須恵器が主体的な存り方を示しているものとみることができる。このような土器組成は、大きくみた場合には、除々にロクロ未使用土器が姿を消し、ロクロ使用土師器や須恵器が共伴しながらロクロ使用土師器へ移行する過渡期としての一様相と把握ことができよう。このような土器組成をもつ類似の遺跡としては江釣子村猫谷地遺跡<sup>(注1)</sup>、江刺市宮地遺跡<sup>(注2)</sup>、北上市尻引遺跡<sup>(注3)</sup>があげられる。即ち、ロクロ未使用土師器、およびロクロ使用土師器、須恵器、須恵系土器等の共伴関係から、過渡期に当る1群があることが知られている。しかし、ロクロ使用土師器や須恵系土器が極端に少ないという点を考慮に入れ、しかも、ヘラ切りの須恵器が主体的な有り方を示しているという点からみると、それらの遺跡における土器様相とは多少異なる点が認められるのも又事実である。従って、このような特徴を考慮に入れてみた場合、同じような土器様相を呈する1群の存在する遺跡として水沢市石田遺跡、盛岡市太田方八丁遺跡<sup>(注4)</sup>をあげることができる。即ち、石田遺跡におけるDa56住、Bj56住、太田方八丁遺跡<sup>(注5)</sup>におけるCb06住、Lj21住等がそれである。これらの住居跡における土器様相は、ヘラ切り須恵器が主体を占め、回転糸切り須恵器、ロクロ使用土師器、赤焼き土器といわれるものが数点混在しているものであり、太田方八丁遺跡においてはヘラ切りの須恵器のみが存在している住居跡もある。後者の例は別としてこれらの土器様相は、上餅田遺跡におけるそれとよく類似しているといえるであろう。このようなヘラ切り須恵器が主体を占める有り方を示す様相は、その遺跡のもつ性格（集落址、官衙遺跡等）によるところも多いとは思われるが、単なる偶発的なものとしてあるものではなく、その遺跡における一時期を構成しているものとして把握

ことができそうである。従って、このような土器様相を呈するものをロクロ技術の出現と定着化という技術変化の流れの中で考えることもできると思われる。

岩手県内、特に北上川中流域においては、この問題に関連した種々の研究や報告書が公表されている。<sup>(注6)</sup> これらの研究や報告をもとにしてみると遺構、遺跡の性格や地域差を考慮しなければならないが、ロクロ未使用土器（この場合特に土師器坏）、ロクロ使用土器、須恵器の共伴関係と出土比率等から土器組成の変化を時間的流れの中でおおよそ次のように把握することができる。

- (1) ロクロ未使用の土師器が主体で、ロクロ使用土師器、須恵器が共伴する時期
- (2) ロクロ土師器、須恵器が主体で、須恵系土器が共伴する時期
- (3) 須恵系土器(赤焼き土器)が主体を占め、須恵器が漸滅する時期

(1)は、ロクロ未使用からロクロ使用の過渡期、(2)(3)はロクロ使用の本格化から定着化の時期とみることができる。そして、(1)～(3)に至る時期は9世紀～11世紀という年代が与えられている。

以上のような結果をもとに上餅田における第2群土器を考えると少し微視的にはなるが、ロクロ未使用がほぼ完全に姿を消し含まれなくなるという時期差を考慮し、しかも、回転糸切りの須恵器、ロクロ使用の土師器の共伴が少ないこと等からみて、ロクロ技術導入の過渡期から本格化へ移行する初期的段階における土器様相の一つの有り方を示しているものと考えられる。従って、この時期は、推定の域を出ないが9世紀前半～中半にかけてのものとしておく。しかし、この場合でも、県内における須恵器の在地生産開始時期と、出土したヘラ切りの須恵器が在地のものかどうかという大きな問題として残る。ただ胎土分析の結果によると、これらの須恵器は、北上川河東、北上山地かその採取地になっている可能性が強いという結果が出ており、窯跡とともに新たな問題ともなるがここでは深くはふれない。

(注1) 猫谷地遺跡現地説明会資料 1972. 1973年 岩手県教育委員会  
奈良平安期の型式学的分析 佐々間豊 「考古学研究98」25巻2号

(注2) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 昭和55年3月 岩手県教育委員会  
日本国有鉄道盛岡工務局

(注3) 尻引遺跡調査報告書 昭52 北上市教育委員会

(注4) 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書第61集 昭和56年3月 岩手県教育委員会  
日本道路公団

(注5) 太田八方丁現地説明会資料(Ⅰ～Ⅲ) 岩手県教育委員会

(注6) (前掲注3)(前掲注4)岩手県埋蔵文化財センター 文化財調査報告書第8集  
主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋蔵文化財センター等

## 5 遺構の年代

前項においては土器の特徴から分類し群別に遺構の関連をも加味して、土器の年代について検討を加えた。その結果をもとに竪穴住居跡における年代について検討すると次のようになる。

— 上餅田遺跡 —

第1群土器においては、カマド方向を主体とした1期3小期の竪穴住居群に対して、その共伴関係からI期a期は土器群におけるI-a群に該当し、I期c、b期はI期-b群にそのままスライドさせて考えることができる。従って、a期に当る住居跡は奈良時代前半に属するものであり、I期b、c期はそれより、より新しい平安時代初頭頃までのものに位置づけられる。又、b、c期の間には出土関係から推察する限りにおいては、明確な区分が認められないが、占地、規模等から推察するとb期とは別個に独立する可能性の方が強いものと思われ、そこに幾分かの時期差も考えられる。

次に、2群土器を伴出する住居跡については、その伴出土器から平安時代（9世紀～10世紀）といえるものであり前者の住居群とは明かに相当期間空白状態が存在し集落間に断絶が認められる。

次に焼土遺構については出土遺物からは2群土器に関連する時期のものと考えられるが明確な時期は不明である。又、溝については、第1号溝は第1群土器を出土している住居跡を切っていることからその時期よりは新しいということはいえても出土土器等を加味しても正確な時期は不明である。又、第2、3、4号溝についても時期は不明である。

## V まとめ

1 今回の調査で発見された遺構は住居跡25、焼土遺構2、溝4 その他多数の小ピット群で、住居跡は奈良時代及び平安時代に属するものであり、前者は21棟とその大伴を占めている。

2 出土遺物はロクロ未使用土師器、ロクロ使用土師器、須恵器、縄文土器、石器等が出土しており、ロクロ未使用土器（栗圀式と類似）のものが主体を占める。縄文土器は晩期に属するものであり集落形成以前においてそれらに関連した遺構の存在した可能性が考えられる。

3 土器底部に「モミ痕」のあるものがあり、当時における農業生産を考える上における一資料として貴重な資料となり得る。

4 「官」という墨書が何を意味するものか、興味深い問題である。

5 今回の調査は道路建設にかかわり、路線内約50mの範囲について行われたが、調査により判明した遺構の分布状況や周辺の表採遺物等から集落は段丘崖沿いに東西に広く続くことが推定される。

参考文献

- 小井川 和 夫 (1978) 「糠塚遺跡」 宮城県文化財調査報告書 第53集  
手 塚 均
- 小野寺 祥一郎 (1979) 「五輪遺跡」 宮城県文化財調査報告書 第61集
- 藤 沼 邦 彦 (1971) 「塩沢北遺跡」 宮城県文化財調査報告書 第24集
- 宮城県教育委員会 (1980) 「塩沢北遺跡」 宮城県文化財調査報告書 第69集  
日本道路公団
- 岩手県教育委員会 (1980) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書 第49集  
日本道路公団
- 阿 部 義 平 (1968) 「東国の土師器と須恵器—多賀城外の出土土器をめぐって—」  
帝塚考古学No. 1
- 岡 田 茂 弘 (1974) 「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」 宮城県多賀城研究紀要  
桑 原 滋 郎
- 伊 藤 博 幸 (1980) 「胆沢城と古代村落—自然村落と計画村落—」 日本史研究 215
- 岩手県教育委員会 (1979) 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 第32集  
日本道路公団







# 西 根 遺 跡

遺 跡 名：西根遺跡(略号 N N75)

所 在 地：胆沢郡金ヶ崎町大字西根原添下

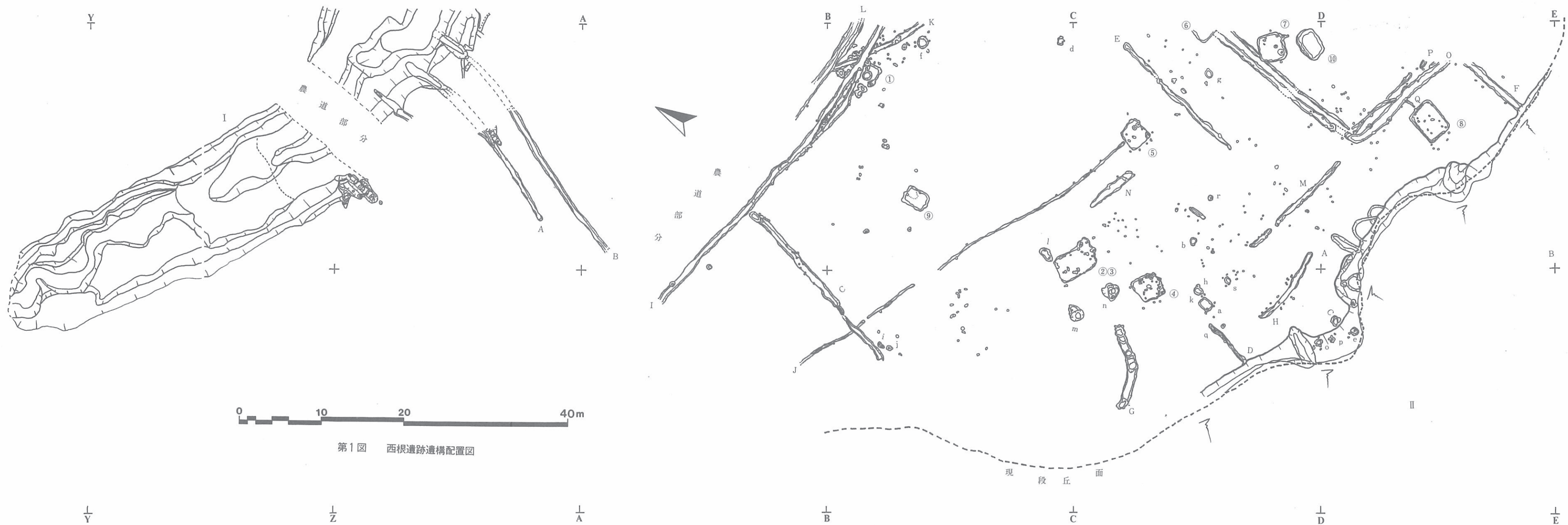
調 査 期 間：昭和50年9月1日～12月13日

調査対象面積：7,500m<sup>2</sup>

発掘調査面積：7,500m<sup>2</sup>







第1図 西根遺跡遺構配置図

1~10 竪穴住居跡・竪穴状遺構

- 1. 第1号住居跡(Ba71住)
- 2. 第2号住居跡(Bj03住)
- 3. 第3号住居跡(Ca50住)
- 4. 第4号住居跡(Cc06住)
- 5. 第5号住居跡(Cc65住)
- 6. 第6号住居跡(Cf77住)
- 7. 第7号住居跡(Ch74住)
- 8. 第8号住居跡(Dd68住)
- 9. Bd56竪穴状遺構
- 10. Cj74竪穴状遺構

a~s ピット遺構

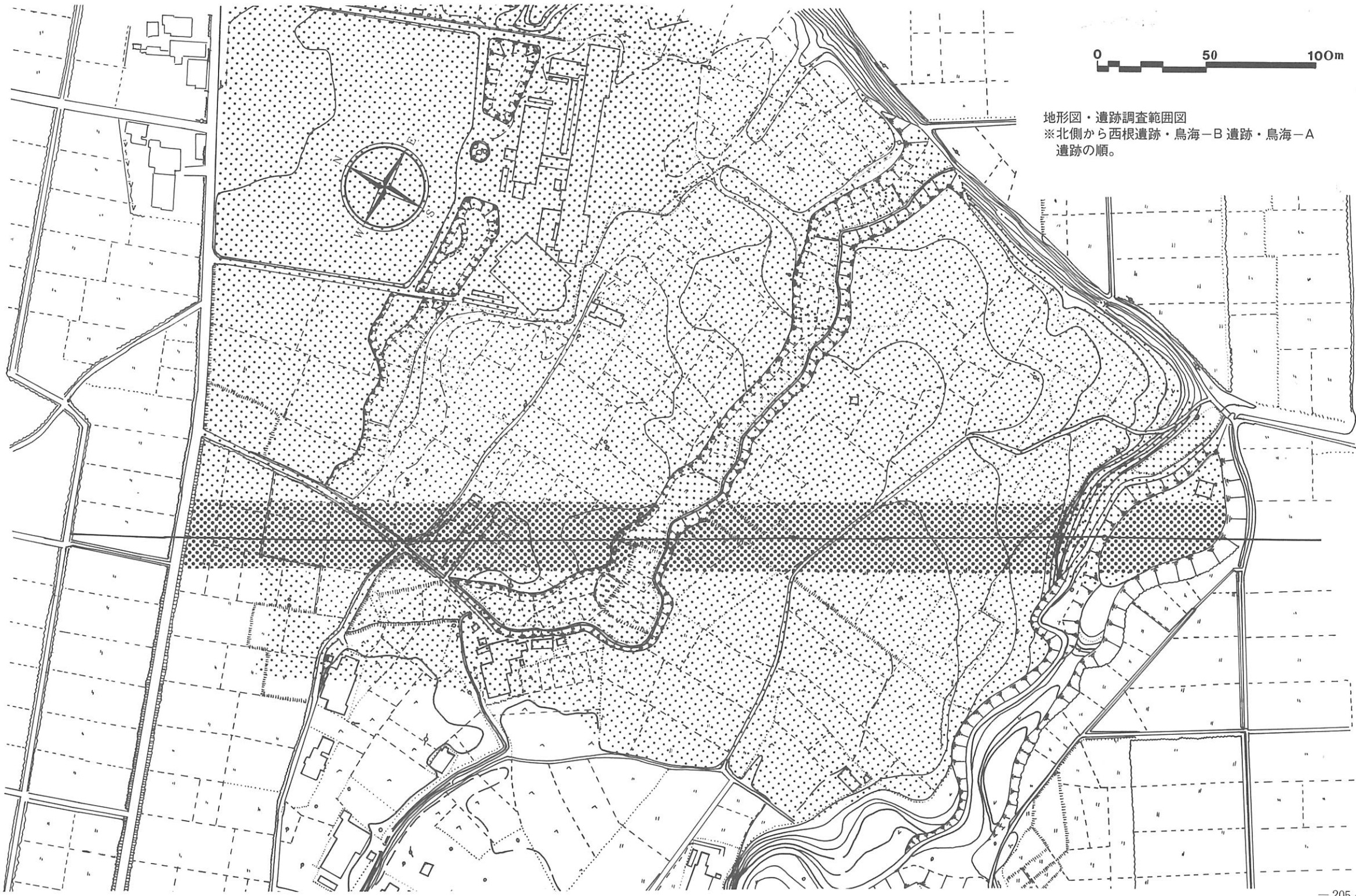
- a<sub>1</sub>. Cf06焼土ピット
- a<sub>2</sub>. Cf06方形ピット
- b. Ce53ピット
- c. Da09No1ピット
- d. Bj77ピット
- e. Db09ピット
- f. Bd77ピット
- g. Cf71ピット
- h. Cf03No1ピット
- i. Bc12No1ピット
- j. Bc12No2ピット
- k. Cf03No2ピット
- l. Bi50ピット
- m. Ca06ピット
- n. Cb03ピット
- o. Cj12ピット
- p. Da09No2ピット
- q. Cf09ピット
- r. Cf56ピット
- s. Cg03ピット

A~Q 溝状遺構

- A. Z-a溝
- B. Z-b溝
- C. A-a溝
- D. C-c溝
- E. C-d溝
- F. D-a溝
- G. C-No1溝
- H. C-No2溝
- I. A-No1溝
- J. A-No2溝
- K. A-No3溝
- L. A-No4溝
- M. C-No3溝
- N. C-No4溝
- O. C-a溝
- P, C-b溝
- Q. D-No1溝

I~II 濠

- I 第1濠
- II 第2濠



地形図・遺跡調査範囲図  
※北側から西根遺跡・鳥海-B遺跡・鳥海-A遺跡の順。

## I 遺跡の位置と立地

本遺跡は、東北本線金ヶ崎駅より南方約1.3 kmの胆沢郡金ヶ崎町大字西根<sup>注1</sup>字原添下に所在し、和賀川（北上川支流）に注ぐ夏油川によって形成された六原扇状地の金ヶ崎段丘南縁にあり、胆沢川の浸食によって形成された東西に延びる段丘崖上の平坦部に位置する。標高約60 m程で、現河床との比高差は約8～10 m程度である。調査地は、現在畑地および水田として利用されているが、かつては畑地が大半を占めていたらしく、後の開田事業によって整地され現在に至っている。この整地によって表土（耕作土）が極端に薄く、耕作時の影響、また、ブルドーザーによる整地の影響が各遺構に及ぼす度合は激しく、地形においても旧地形とはかなり異なっている。また、一部に宅地・高圧線・電柱・墓地等があることから、それらが遺構に及ぼす影響も見られた。

なお、同段丘平坦面上には、各種“遺跡”<sup>注2</sup>が分布する。本遺跡の東端には西根遺跡、縦街道古墳群があり、南方には鳥海A・B遺跡がある。また、西方には桑木田小丸塚等が位置する。鳥海A・B両遺跡は各々沢を隔てて隣接する遺跡であり、本遺跡とともに安倍氏時代の鳥海柵擬定地として重要視される遺跡である。縦街道古墳群・桑木田小丸塚等の各遺跡は、時期的に本遺跡をはじめとする前述遺跡より古い年代観を持つ遺跡である。

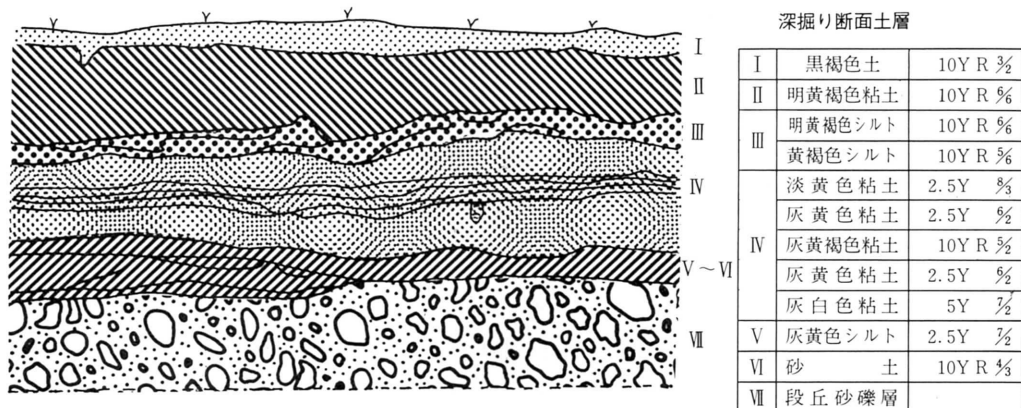
注1 本遺跡は、原添下の他縦街道南・二ノ宮地区の各一部をも含む。

注2 同平坦面上に位置する2遺跡を指す。

（昭和54年(財)岩手県埋蔵文化財センター調査・昭和33～36年 金ヶ崎町教育委員会調査）

## II 遺跡の層序

本遺跡の基本層序は、深掘り断面によると下図の様であるが、当調査地はブルドーザーによって整地され、旧地表土がいずれからも確認されず、現在の耕作面から数十センチで粘土層（検出面）に達する。



第2図 西根遺跡深掘り断面図



－ 西根遺跡 －

I層： 本遺跡の全区域を被覆する土壌であるが、旧地表土ではなく、後世における大規模な開田事業に伴って運搬され、整地された移動土壌である。なお、多数の遺物を含むが、下層および各遺構からの浮上遺物と考えられる。厚さ約20cm前後。粘土ブロック・植物根が混入する現畑地耕作土であり、幾分粘性をもつ。北側水田部も同土色土であるが、畑地のそれより粘性が強い。

II層： 調査時における各遺構の検出面である。粘土質土であるが、幾分ザラザラした感じが手に残る。また、にぶい黄褐色粘土が不定形に混じる。植物根が多く混入。厚さは30～50cm程で北から南に向かって厚く堆積している。粘性は強い。

本調査地から発見された各遺構は、当層を床面また基底部として掘り込み形成しており、住居跡・ピット・溝跡等の大部分がこの層で構築されている。但し、溝跡の一部、ピットの一部・濠等の遺構は更に深く掘り込んで形成されており、各々III層もしくはVII層にその基底部を持つ。

III層： 明黄褐色シルト質土と黄褐色砂質シルトとの混土である。前者は粘土まじりで粘性が強く植物根等を含む。後者は、砂状の粗い粒が目立ち、粘性が弱くあまり粘土を含まない。厚さは10～20cm前後である。

IV層： 粘土質土を主体とする層であるが、土色の観点から5層に細分される。上部に淡黄色粘土が幾分厚く堆積し、灰黄色・灰黄褐色・灰黄色・灰白色の順で続き、下層に進むにつれて灰白化する。なお、灰白色粘土層には、明黄褐色粘土が縦縞状に混入している。厚さは25～45cm前後である。全体的に若干砂粒が混入している。

V層： 灰黄色を呈するシルト質土であるが、明黄褐色粘土が縦縞状にまじり、全体的に幾分黄色的に明るく感じられる。粘性が幾分強く、粘土以外の不純物を全く含まない。厚さは、10～15cm前後で不規則的に堆積している。

VI層： 段丘礫層上部に堆積する砂土である。粒子が細かく幾分サラサラしている。また、シルト層同様に粘土がまじることから弱粘性を示す。にぶい黄褐色砂土と黄褐色砂土の混土であり、その厚さは約10～15cm前後である。

VII層： 黄褐色砂土（10 Y R  $5/8$ ）に円礫のまじった層であるが、上部に小円礫、下部に進むにつれて拳大の円礫が多くなり、やがて砂状土は消滅して礫だけの層になる。

同層は上部VI層とともに金ヶ崎段丘を構成する最深層であり、表土I層から約1.5～2.0m下層に位置するものである。

なお、当層は本遺跡の北側に発見された濠跡の基底部を形成する層であるが、濠の最深基底部はそれをさらに幾分掘り込んで確認された。

### Ⅲ 検出した遺構と遺物

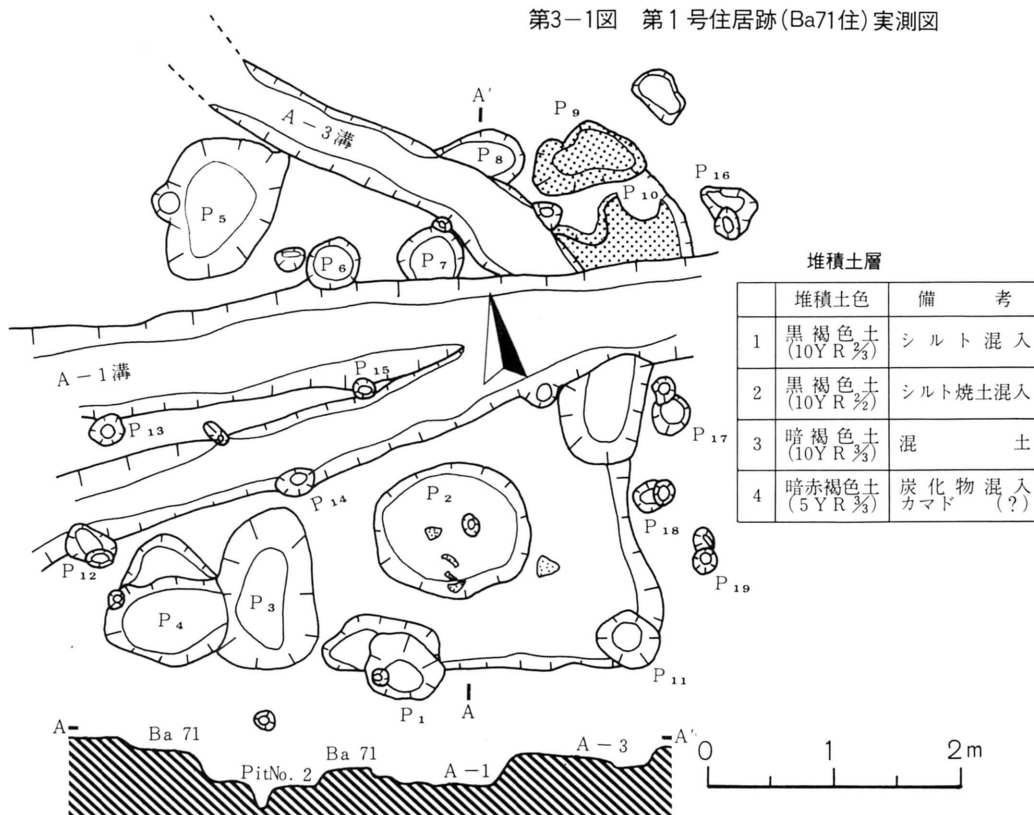
調査の結果次の各遺構を検出した。(1)平安時代と見られる竪穴住居跡8・竪穴状遺構2、(2)大型ピット20・柱穴状ピット群、(3)溝状遺構17、(4)濠2。また、これら遺構の他に歴史時代の遺物を多数検出した。

以下これら検出した各遺構また遺物について順次に説明する。なお、規模等は別表を参照。

#### 1 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡 (Ba 71) 第3図 第1表

第3-1図 第1号住居跡(Ba71住)実測図



〔重複〕 A-1号・A-3号溝・各種大小ピットと重複する。A-1号溝は、東南東から西北西に延びる遺構であり、当住居跡のほぼ中央部を切る。A-3号溝は、A-1号同様住居跡の北東隅を切る。いずれも新しい時期のものと考えられる。なお、ピットとの関係は明らかでない。

〔平面形〕 極度な削平と溝跡によって壊されたために全容は明らかでない。確認される壁の残存長は南東壁約4.45m、南西壁約1.7m程であり、これらの両壁から推察する平面形は隅丸方形を示すものと思われる。

〔断面形〕 残存する壁の立ち上がりは、比較的急な傾斜を持つ。壁高は8~10cmを測る。

— 西根遺跡 —

〔堆積土〕 シルト粒を含む黒褐色土の単層で構成されている。

〔床 面〕 明黄褐色粘土層を掘り込み床面として形成している。起伏に富む。

〔カマド施設〕 南東壁北寄りに焼成痕を検出したが、A-1・A-3号溝によってほとんど壊されているため、カマドか否かは明らかでない。袖・煙道・煙出し等についても同様である。

〔その他の施設〕 壁内外から大小ピット18個が確認されている。

第1表 第1号竪穴住居跡（Ba 71）ピット計測値他一覧表

No.		径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土	No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土
1	貯	65 × 65	31	円形	黒褐色土	11	45 × 40	18	楕円形	黒褐色土
2	貯	125 × 110	30	楕円形	黒褐色土	12	34 × 28	29	楕円形	黒褐色土
3		75 × 125	15	卵型形	黒褐色土	13	25 × 22	17	楕円形	黒褐色土
4		95 × 70	13	楕円形	黒褐色土	14	30 × 20	23	楕円形	黒褐色土
5		95 × 118	20	楕円形	黒褐色土	15	20 × 16	9	楕円形	黒褐色土
6		40 × 40	22	円形	黒褐色土	16	35 × 40	32	不整形	黒褐色土
7		55 × 50(推)	5	楕円形	黒褐色土	17	33 × 30	9	楕円形	黒褐色土
8		60(推) × 50(推)	17	楕円形	黒褐色土	18	32 × 20	49	楕円形	黒褐色土
9		70 × 40	11	不整形	暗赤褐色土(シルト質)	19	20 × 20	27	円形	黒褐色土
10		30 × 35	12	楕円形	黒褐色土	20	25 × 45	8	不整形	黒褐色土

◆貯一貯蔵穴

Ba 71 竪穴住居跡出土遺物

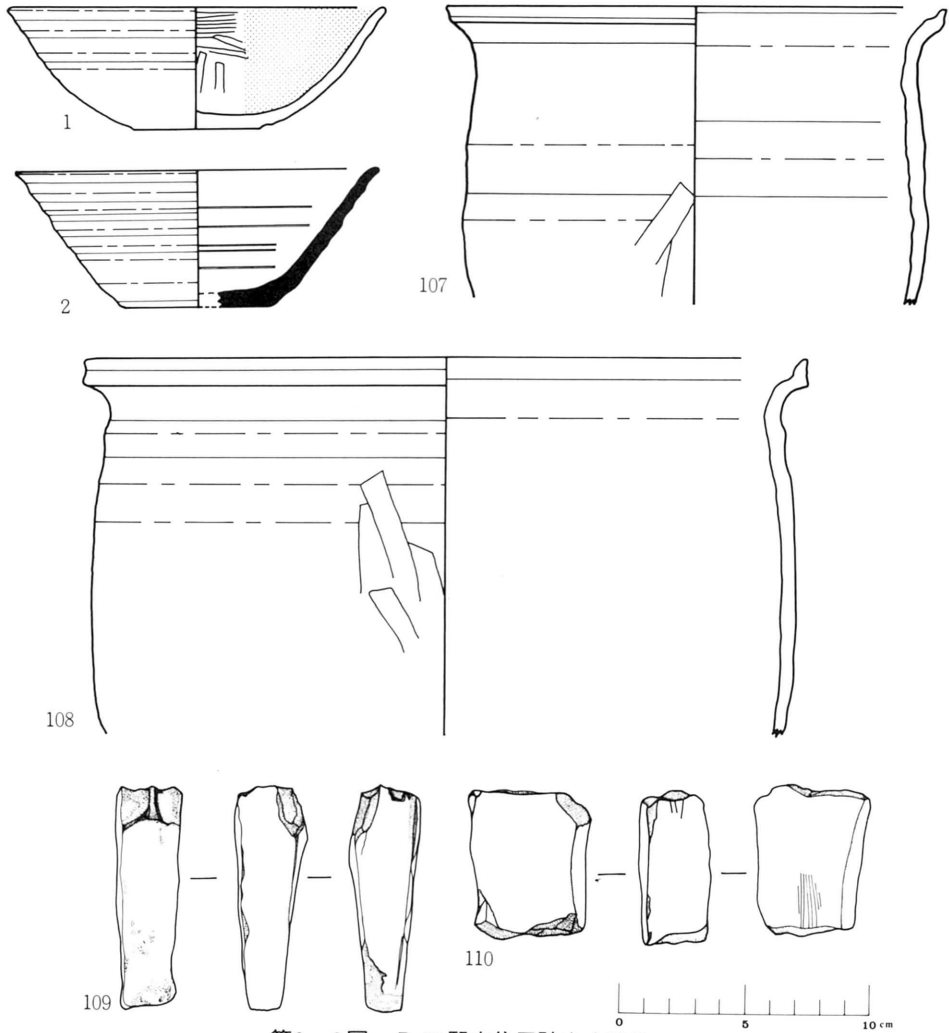
坏類は、No. 1、2の2点、甕類はNo. 107、108の2点、他に砥石がある。

No. 1はC類の坏である。回転糸切無調整で体部に若干のふくらみを有す。底径が比較的小さ目、口径との差比は他の坏より大きい。石英細粒、細砂等を混入しているが胎土、焼成とも良好である。No. 2は、本遺跡内で実測された唯一点のA類坏である。回転糸切無調整で、体部に凹凸を有しながらも直線的にたちあがる。器高は5.5cmと高目であり、内面にみられる沈線状痕は、外面の稜線に対応する部分に残る。胎土、焼成とも良好。

この他に坏類の破片としてはB類のものが多くみられ、No. 1、2の類は点数からみれば圧倒的に少ない。B類の底部片はすべて回転糸切による切離しである。

甕は、No. 107、108の2点、何れもロクロ成形による土師器で、体部に篋削りを有す。他に破片としては底部に糸切痕を残す小型のものがある。体部片としては、外面に削りを持つ例が多くみられる。須恵器は、外面に平行叩目のある体部細片が一点出土しているだけである。

No. 109、110は砥石である。何れも粒子の細かい砂岩で作られており、四面が使用されている。No. 109の2面には図のような削痕が観察される。No. 110は小型のもので、携帯用の砥石として使用されたものと思われる。



第3-2図 Ba71竪穴住居跡出土遺物

第2号竪穴住居跡 (Bj03) 第4図

〔重複〕 調査以後に断面等から、3号住 (Ca 50) との重複関係が認められたものである。また、Bi50柱穴列跡とも重複関係を持つ遺構である。3号住居より新しく、柱穴列跡より古い時期と考えられる。

〔平面形〕 北西から南東に長軸を持つ長方形プランを呈す。

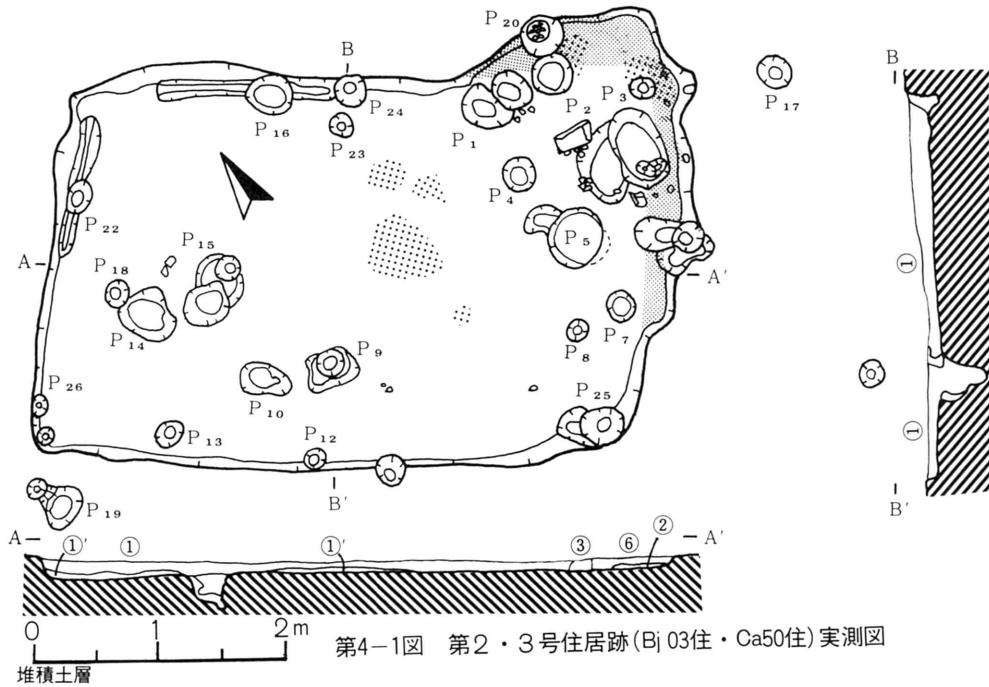
〔断面形〕 東壁を除く各壁の立ち上がりは比較的垂直に掘り込まれ形成されている。

〔堆積土〕 黒褐色土を主体とする土層である。混入物等の違いから細分される。なお、東方部には、3号住居の堆積土と考えられる黒褐色土と焼土の混土層が見られる。

〔床面〕 明黄褐色粘土層を掘り込み、ほぼ平坦に形成しているが、東方部分で若干段を持って窪む。床面中央部付近から焼成痕が確認されている。



— 西根遺跡 —



第4-1図 第2・3号住居跡(Bj 03住・Ca50住)実測図

	堆積土色		備 考		堆積土色		備 考
1	黒褐色土	10Y R ½	新 期 住 居	5	黒褐色土	10Y R ½	旧 期 住 居
2	黒 色 土	10Y R ¾	旧 期 住 居	6	黒褐色土	10Y R ½	粘土との混土・貼床部
3	黒褐色土	10Y R ¾	粘土との混土・貼面	7	暗赤褐色焼土	5 Y R ½	旧 期 住 居
4	黄褐色粘土	10Y R ¾	旧期住居カマド天井か?	①	黒褐色土	10Y R ¾	混 土

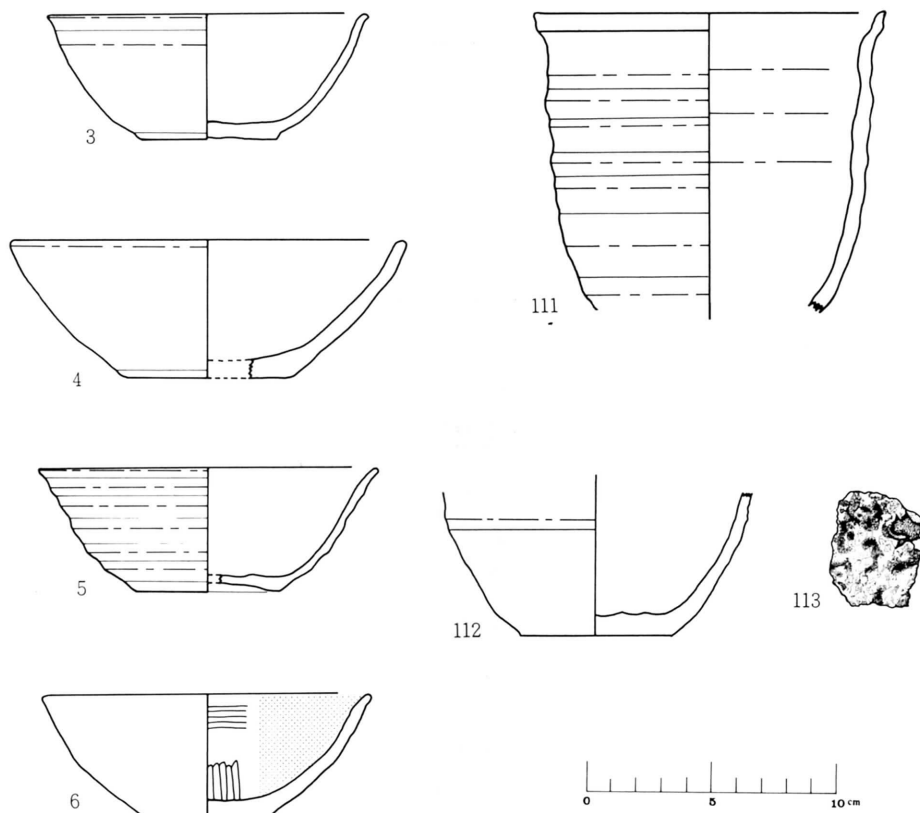
〔その他の施設〕 壁内外から総計26個の大小ピットが確認された。これらピットのうち明らかに柱穴と断定できるものはない。柱穴様ピットは周壁に沿って数個見られるが、いずれも深さなど一定しない。周溝は、周壁直下に確認されたが部分的なもので、その規模は上幅15×下幅5cm×深さ約5cm前後を測る小規模のものであった。

**Bj 03 竪穴住居跡出土遺物**

坏類4点、甕類2点の実測である。

No. 3、4、5は何れもB類、回転糸切無調整、器形は各々異なるもので、No. 5は器肉が薄く、形態も須恵器的である。No. 3は、体部の立ち上がりが土師器的である。残るNo. 4は器肉が厚目であり、胎土が悪く焼成も良くない。この種の坏は、本遺跡にあって最も多くみられる類の坏である。No. 6はC類の坏。形態的にはNo. 4にも近く、回転糸切無調整。他に破片として、C類の糸切底部片2点、多量のB類片がみられるが、A類は一点も出土しない。B類の破片は、遺存状態が悪く、ほとんどが軟質な細片や磨滅したもので占められる。例外的には、硬質な底部片が僅か一点ある程度である。

甕型土器は、No. 111、112の2点であるが完形品ではない。何れもロクロ使用の小型器種と思



第4—2図 Bj03竪穴住居跡出土遺物

われる。破片としては比較的大型の器種を連想させる例も若干ある。回転糸切痕を残す底部片も2点出土している。出土する破片の多くはロクロ成形による口縁、体部片であるが、これで見るとは小型、大型の両様があったものと推される。須恵器は体部片が2点確認された。一点は、外面を削り、内面にカキ目を施す。他は薄手のもので同様の仕上げを有するものである。その他、炭化物、鉄滓等が出土している。

第3号竪穴住居跡（Ca 50） 第4図 第2表

〔重複〕 2号住居と重複するもので、2号住居を構築する際に壁部と一部床面を粘土で埋め固めている。

〔平面形〕 ほとんどが壊されており全容は把握しがたいが、残存する壁長は（NW～SE2.85）×（NE～SW-2.43）mである。これらから推察すると幾分小規模な住居であったと思われる。

〔断面形〕 確認された壁は、緩い傾斜で立ち上がり、その壁高は7～9cm前後を測る。

〔堆積土〕 上部堆積土層は2号住居構築段階に削平され不明であるが、下部に堆積する残土は黒褐色土に焼土粒が多量に混入する土層で占められていた。

— 西根遺跡 —

〔床 面〕 明黄褐色粘土を掘り込み形成している。ピットが集中しており起伏が激しい。また、床面に焼成痕が（厚さ約 1 cm）散らばって確認され、炭化物粒も床面全域に散在して確認された。

〔カマド施設〕 南東壁北寄りから焼土ブロックが検出され、また、P<sub>21</sub>付近から細長い天上石様の礫が焼けた状態で出土していることから、ほぼ当位置に構築されていたものと考えられるが煙道が確認されずはっきりしない。

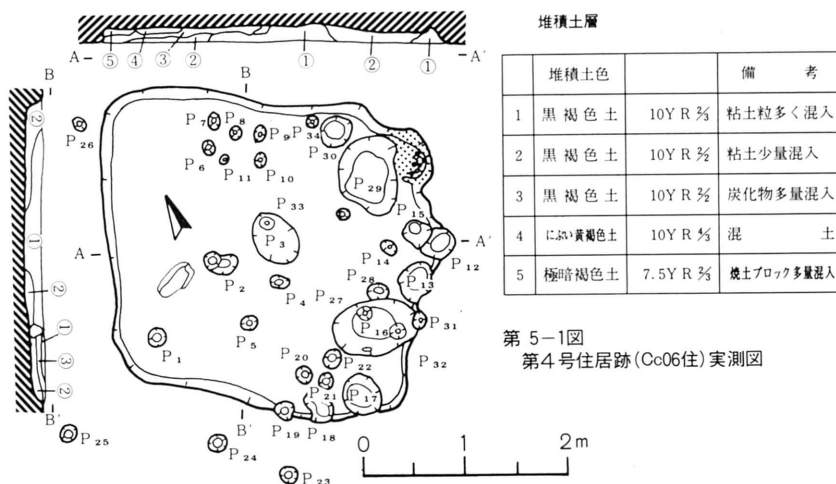
〔その他の施設〕 壁内外から検出された数個のピットのうち、規模・位置等からP<sub>5</sub>、P<sub>8</sub>が柱穴として考えられる。貯蔵穴様ピットは、遺物等の出土状態から4個（P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>20</sub>、P<sub>21</sub>）が推察されるが、位置・規模等からP<sub>5</sub>、P<sub>20</sub>、P<sub>21</sub>の3個が妥当と思われる。

第 2 表 第 3 号堅穴住居跡ピット計測値一覧表

No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土	No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土
1	30 × 45	11	橢円形	暗赤褐色土	14	40 × 44	5	橢円形	黒褐色土
2	37 × 33	15	橢円形	暗赤褐色土	15	40 × 34	39	橢円形	黒褐色土
3	20 × 23	22	橢円形	黒褐色土	16	32 × 34	6	橢円形	黒褐色土
4	30 × 32	35	橢円形	黒褐色土	17	25 × 30	14	橢円形	黒褐色土
5	45 × 40	27	橢円形	黒褐色土	18	22 × 22	46	円形	黒褐色土
6(1)	23 × 22	52	橢円形	黒褐色土	19	40 × 30	17	橢円形	黒褐色土
6(2)	28 × 30	26	橢円形	黒褐色土	20	40 × 35	52	橢円形	黒褐色土
7	25 × 25	11	円形	黒褐色土	21	40 × 65	31	橢円形	黒褐色土
8	15 × 17	16	橢円形	黒褐色土	22	30 × 21	5	橢円形	黒褐色土
9	30 × 30	36	円形	黒褐色土	23	20 × 22	5	橢円形	黒褐色土
10	28 × 33	9	不整橢円形	黒褐色土	24	25 × 25	29	円形	黒褐色土
11	23 × 28	22	橢円形	黒褐色土	25	27 × 25	2	橢円形	黒褐色土
12	14 × 15	17	円形	黒褐色土	26	12 × 14	33	橢円形	黒褐色土
13	24 × 20	39	橢円形	黒褐色土					

第 4 号堅穴住居跡 (Cc 06) 第 5 図 第 3 表

※貯一貯蔵穴、柱一柱穴



第 5-1 図  
第 4 号住居跡 (Cc06住) 実測図

〔平面形〕 一辺が約 3 m 程の隅丸方形プランを呈する小型住居跡である。

〔断面形〕 各壁の立ち上がりは緩い傾斜で検出面に続く。壁高は北西壁で約 20 cm を測る。

〔堆積土〕 粘土粒まじりの黒褐色土を主体として、さらに混入物の違いから細分される。

また、北東壁北寄りに極暗褐色土が堆積する。

〔床 面〕 明黄褐色粘土層を掘り込み形成しているが起伏に富む。南東壁北寄りには焼成痕が確認されている。(厚さ約 2 cm 前後)

〔カマド施設〕 南東壁北寄り部分に焼成痕があり、壁にまで及ぶことから、ほぼカマド部と推察されるが、他の施設が検出されていないことから断定しかねる。

〔その他の施設〕 壁内外から大小総計34個のピットを検出した。いずれも深さが一定せずそのほとんどが極端に浅く柱穴様ピットは考えられない。しかしその中でも規模・位置等から柱穴として考えられるピットが3個 (P<sub>1</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>20</sub>) 推察される。

第3表 第4号竪穴住居跡 (Cc 06) ピット計測値他一覧表

No.		径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆 積 土	No.		径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆 積 土
1	柱	17 × 18	11	円 形	黒褐色腐植土	18		25 × 35	10	不整楕円形	黒褐色腐植土
2		27 × 20	10	楕円形	黒褐色腐植土	19		15 × 18	9	楕 円 形	黒褐色腐植土
3		45 × 57	6	楕円形	黒褐色腐植土	20	柱	15 × 20	29	楕 円 形	黒褐色腐植土
4	柱	17 × 15	59	楕円形	黒褐色腐植土	21		17 × 17	17	円 形	黒褐色腐植土
5		17 × 14	5	楕円形	黒褐色腐植土	22		20 × 18	8	楕 円 形	黒褐色腐植土
6		12 × 20	3	楕円形	黒褐色腐植土	23		17 × 18	13	円 形	黒 色 土
7		10 × 18	3	楕円形	黒褐色腐植土	24		17 × 17	40	円 形	黒 色 土
8		12 × 14	4	楕円形	黒褐色腐植土	25		15 × 17	30	楕 円 形	黒 色 土
9		10 × 15	6	楕円形	黒褐色腐植土	26		14 × 15	16	円 形	黒 色 土
10		11 × 17	5	楕円形	黒褐色腐植土	27		15 × 14	10	円 形	黒褐色腐植土
11		10 × 12	6	楕円形	黒褐色腐植土	28		18 × 16	6	楕 円 形	黒褐色腐植土
12		38 × 30	11	楕円形	黒褐色腐植土	29	貯	58 × 80	21	不整楕円形	黒褐色腐植土
13	貯	30 × 40	10	楕円形	黒褐色腐植土	30	〃	28 × 30	19	楕 円 形	黒褐色腐植土
14		18 × 15	3	楕円形	黒褐色腐植土	31		15 × 17	45	楕 円 形	黒 色 土
15		28 × 29	12	楕円形	黒褐色腐植土	32		20 × 15	6	楕 円 形	黒褐色腐植土
16	貯	85 × 56	10	楕円形	黒褐色腐植土	33		12 × 14	6	楕 円 形	黒褐色腐植土
17		37 × 42	8	楕円形	黒褐色腐植土	34		14 × 15	10	円 形	黒褐色腐植土

Cc 06 竪穴住居跡出土遺物

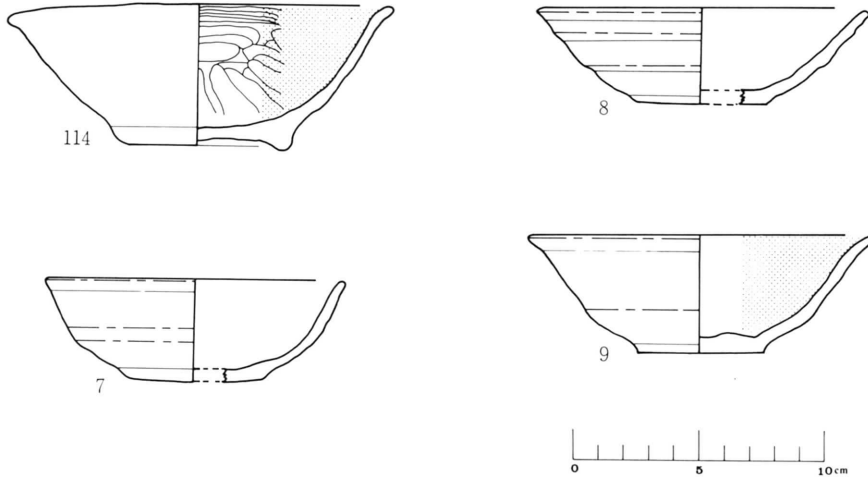
坏型土器は4点の実測。B・C類だけでA類はみられない。他に台付坏、甕片が出土している。

坏類は何れも回転糸切による切離しである。No. 7、8は反転復元によるB類坏、両者とも口縁部外面の一部が黒色変化している。No. 9はC類の坏。表面に細かいひび割れが無数に入っており、剥離し易い状態になっている。No. 114は内黒の台付坏。糸切後に台部を取付けているが雑な仕上げである。

この他に坏類は、C類の体部片2点、B類が若干の破片を出土している程度である。B類としたものの中には比較的硬質な破片例も散見される。また、B類の範疇とともれる台付坏 (D-1b) の破片がある。この場合も糸切後に1.5cm高の台部を取り付けたものであるが、No. 114よりは丁寧な作りである。

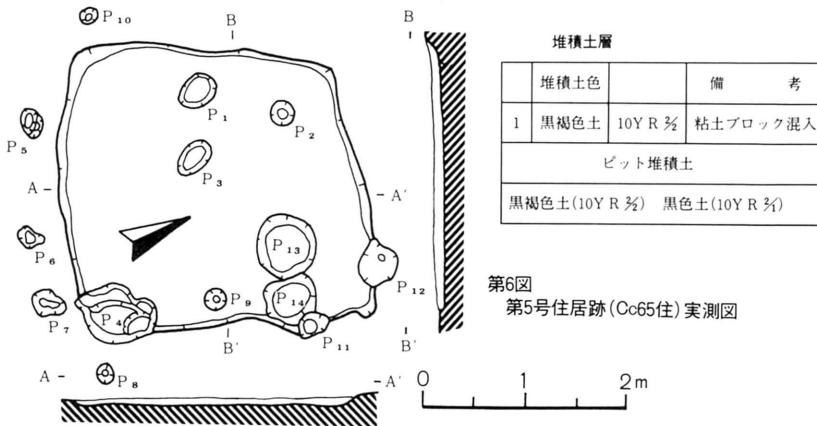
甕型土器はすべて破片である。土師器ではロクロ成形の口縁部が2片、他は体部片である。体部には篋削りを有す破片が多い。須恵器は外面に削り、内面にカキ目を施す体部片一点だけの出土。

— 西根遺跡 —



第5-2図 Cc06竪穴住居跡出土遺物

第5号竪穴住居跡 (Cc 65) 第6図 第4表



第6図 第5号住居跡 (Cc65住) 実測図

〔平面形〕 一辺が約 3 m 前後のほぼ正方形に近いプランを呈する小型住居跡である。

〔断面形〕 各壁の構築状態は、床面から緩い傾斜で立ち上がる。壁高は、残存状態の最も良い北西壁で約 12cm 前後である。

〔堆積土〕 上部が極度な削平を受けているため堆積土も薄く、粘土ブロックが多量に混入した黒褐色土で構成されている。

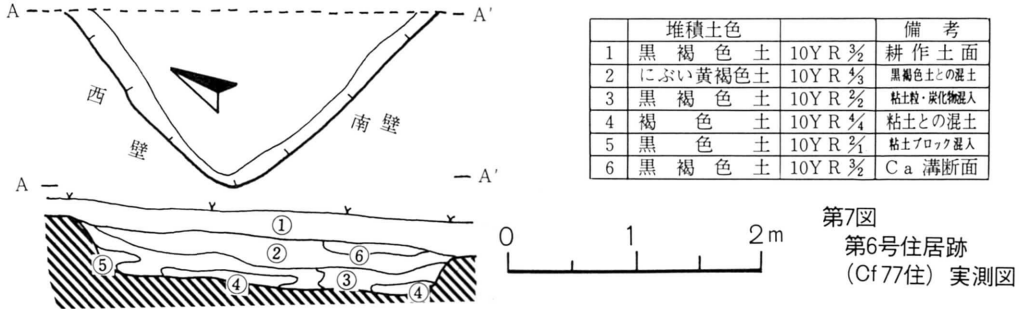
第4表 第5号竪穴住居跡 (Cc 65) ピット計測値他一覧表

No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土	No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土
1	32 × 40	7	楕円形	黒褐色腐植土	8	20 × 18	24	楕円形	暗褐色土
2	27 × 25	5	楕円形	黒褐色腐植土	9	22 × 24	20	楕円形	黒褐色腐植土
3	25 × 40	15	楕円形	黒褐色腐植土	10	15 × 20	16	楕円形	黒色腐植土
4	攪乱	60 × 80	不整形	暗褐色土	11	23 × 28	9	楕円形	黒色腐植土
5	30 × 15	38	楕円形	黒色腐植土	12	45 × 35	15	楕円形	黒色腐植土
6	20 × 25	5	不整楕円形	黒色腐植土	13	62 × 57	7	楕円形	黒褐色腐植土
7	32 × 25	22	不整楕円形	黒色腐植土	14	47 × 54	4	楕円形	黒褐色腐植土

〔床 面〕 明黄褐色粘土層を掘り込み、ほぼ平坦に形成している。

〔その他の施設〕 壁内外から14個のピットを検出した。

第6号竪穴住居跡 (Cf 77) 第7図



〔重 複〕 C-a 溝跡と重複する様相を呈する。溝によって壁の一部を切られている。

〔平面形〕 遺構の約3分の2が区域外に延びるため未調査部分が多く全容が明らかでない。壁の検出長は、南西壁1.8m、北西壁2.1m程であった。

〔断面形〕 確認された壁の構築形態は床面からの立ち上がりが急であり、垂直気味に掘り込まれている。その壁高は約30cmを測る。

〔堆積土〕 にぶい黄褐色土・黒褐色土・褐色土の3層で構成されるが、上部堆積土である黄褐色土は黒褐色土との混土であることから耕作の攪乱が及んだ部分と考えられ、また、ブロック状に混入する褐色土は、黒褐色土と粘土の混土であることから当住居堆積土は黒褐色土を主体とする単層で構成されるものと思われる。

〔床 面〕 確認された部分のそれは明黄褐色粘土層を掘り込み平坦に形成してある。

第7号竪穴住居跡 (Ch 74) 第8図 第5表

〔重 複〕 C-b 溝跡と北西壁コーナー部分で重複する。溝跡によって切られているが、溝が浅いことから住居跡の壁と床面が落ち込んで確認される。

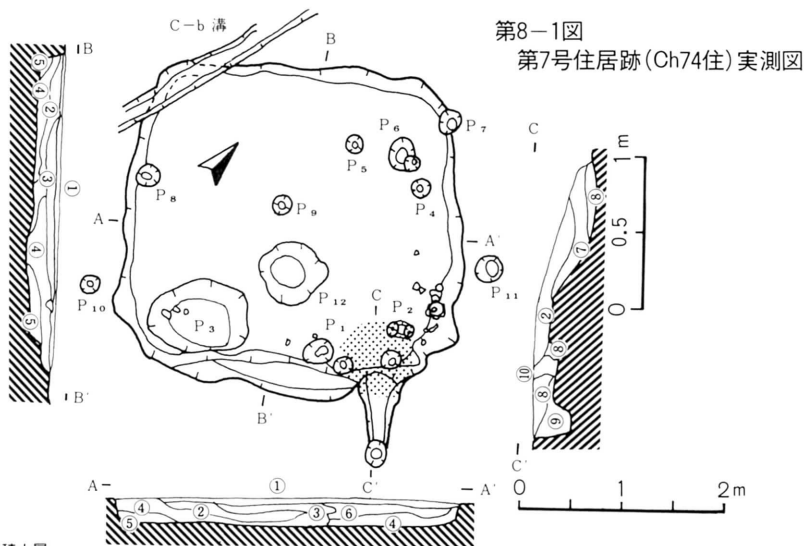
〔平面形〕 一辺が約3.3m前後の方形プランを呈する小型住居跡である。

〔断面形〕 残存状態が幾分良く各壁高も一定し、約20cmを測る。壁は床面から急な角度で立ち上がり検出面に続く。

〔堆積土〕 黒褐色土と黒色土で構成されるが、各層への混入物の違いから6層に細分される。炭化物・粘土・焼土等が混入している。

〔床 面〕 明黄褐色粘土層を掘り込み、平坦に形成している。

〔カマド施設〕 カマドは南壁東コーナー付近に位置する。燃烧部分は約50cm前後の径を持ち、床面を幾分掘り窪めた状態で確認され、焼土は固く焼け締まっていた。焼土の厚さは約5cm程であった。煙道は燃烧部分から壁を利用した幾分急な角度で立ち上がり、床面と同質の粘



第8-1図  
第7号住居跡(Ch74住)実測図

堆積土層					
堆積土色		備 考			
1 黒褐色土	10Y R 2/6	粘土粒・炭化物混入	6 黒褐色土	10Y R 2/6	②に類似
2 黒色土	10Y R 2/6	粘土1cm大で混入	7 赤褐色焼土	2.5Y R 3/6	カマド燃焼部
3 黒褐色土	10Y R 2/6	焼土・粘土ブロック混入	8 暗赤褐色土	5Y R 3/6	焼分焼けている
4 にぶい黄褐色土	10Y R 2/6	黒褐色土との混入	9 黒褐色土	10Y R 2/6	焼土粒混入
5 黒褐色土	10Y R 2/6	シルトとの混入	10 黒褐色土	10Y R 2/6	攪乱部

土層を約14～15cm程掘り込んで構築しており、その基底には薄く焼成の痕跡が認められた。煙道部の長さは約68cm程で、その中は立ち上がり部分で約40cm、煙出し付近で約20cm前後となり先細の形状を示す。磁北からN-140°-E傾き南南東を指す。煙出し部分は径22×24cm内外の円形に近い楕円形を呈し、深さは煙道基底をさらに10cm程掘り下げ、その周壁は垂直に掘り込まれている。袖部は確認されなかった。

〔その他の施設〕 検出したピットは壁内外から12個を確認した。柱穴状ピットは壁内から6個、壁外から2個検出されているが、位置・規模等から推察してP<sub>9</sub>を支柱穴と考え、P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>を補助的な柱穴と考えたい。

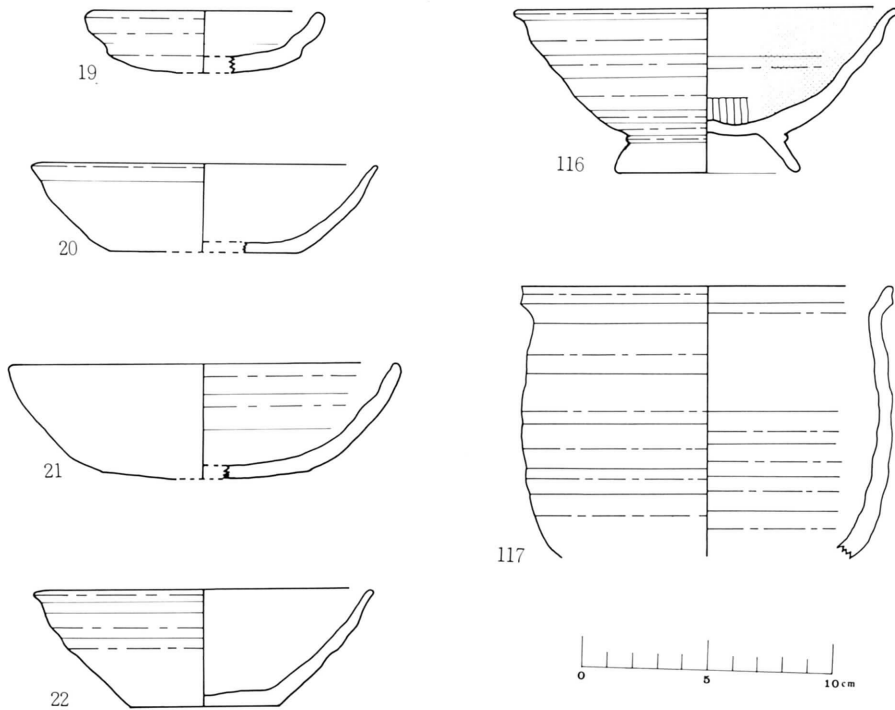
第5表 第7号住居跡(Ch74)ピット計測値他一覧表

No.	径 (cm)	深さ(cm)	平面形	堆 積 土	No.	径 (cm)	深さ(cm)	平面形	堆 積 土
1 柱	17 × 17	28	円 形	黒褐色腐植土	7	20 × 27	36	楕円形	黒褐色土
2	20 × 28	7	楕円形	黒褐色土	8	23 × 23	9	円 形	黒褐色土
3 貯	75 × 100	33	楕円形	黒 色 土	9 柱	17 × 21	46	楕円形	黒褐色土
4	18 × 20	11	楕円形	黒褐色土	10	14 × 18	33	楕円形	黒褐色土
5 柱	20 × 21	18	円 形	黒褐色土	11	18 × 20	30	楕円形	黒褐色土
6	38 × 28	10	楕円形	褐色土(シルト質)	12 貯	60 × 53	22	楕円形	黒褐色腐植土

Ch 74竪穴住居跡出土遺物

器種としてはB類の坏、内黒台付坏(D-c類)、小型甕がみられる。

No.19～22の4点はB類である。No.19は体部に段を有し、底部も丸味を帯びており、B類の中では例外的な器形を呈す。底部には糸切の痕跡を残している。No.20は磨滅しており、残りが悪



第8—2図 Ch74竪穴住居跡出土遺物

く、軟質で粗砂を多く混入する胎土である。No.21は、外面に比して内面の凹凸が激しく、磨滅、黒色変化部分が多い。No.22は、体部が口縁近くまで直線的にのびる。若干外反するがその部分の器肉は薄くなっている。この他に破片としてB・C類がみられるが、A類は皆無である。

No. 116は台付坏である。糸切による切離し後に台の部分を取り付けている。比較的大型で口縁が強く外反するのが特徴。

甕型土器はNo.117の一点である。推定口径15cm位の小型のものと思われる。短頸で体部の凹凸が目立つ。粗砂を多く混入するが全体としての胎土は悪くない。他に外面を篋削りする土師器が若干ある。多くが黒色変化を受けており、相当量の煤も付着している。尚、須恵器甕片は出土していない。

第8号竪穴住居跡（Dd 68） 第9図 第6表

〔重複〕 D—1溝跡と北東壁隅で重複する。壁を壊して形成していることから新期溝跡と考えられる。なお、断面等から把握される。

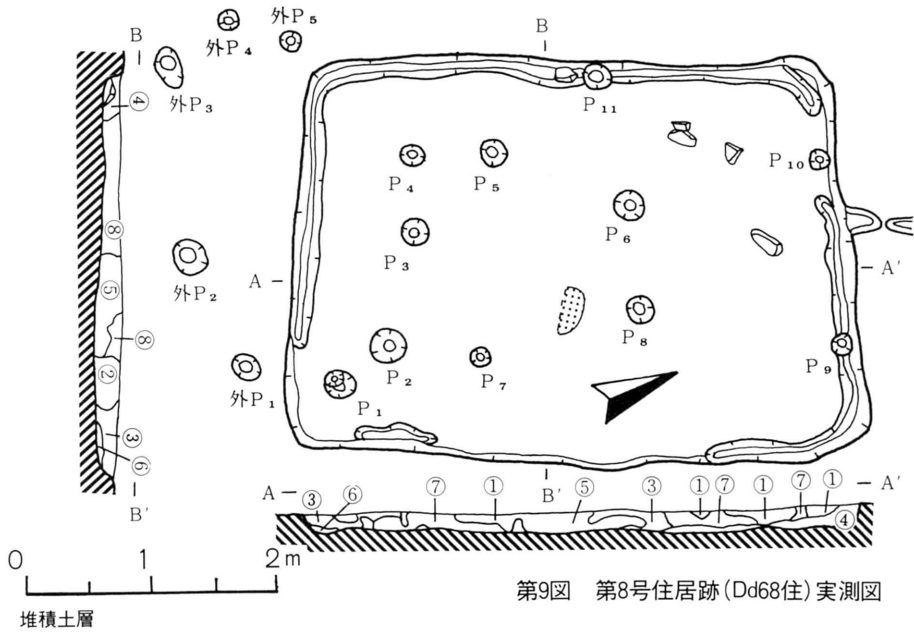
〔平面形〕 南北に長軸をもつ長方形プランを成す。

〔堆積土〕 黒褐色土・黒色土で構成されるが、混入物の違いからさらに細分される。また、遺構中央付近の堆積土は後の攪乱層であり、粘土ブロックが多く混入する。

〔断面形〕 壁の残存状態が良く、その立ち上がりは垂直に形成され、直下には約5cm程の



— 西根遺跡 —



	堆積土色		備 考		堆積土色		備 考
1	黒褐色土	10Y R 3/2	新期攪乱層	5	明黄褐色粘土	10Y R 6/8	新期攪乱層
2	黒褐色土	10Y R 3/2	新期攪乱層	6	黒色土	10Y R 3/1	住居堆積層
3	黒色土	7.5Y R 3/1	住居堆積土	7	明黄褐色粘土	10Y R 7/6	粘土ブロック
4	黒色土	10Y R 3/1	住居堆積土	8	黒褐色土	10Y R 3/2	新期攪乱層

窪みを持つ。壁高は約20cmを測る。

〔床 面〕 明黄褐色粘土層を掘り込んで形成しており、平坦である。また、中央部付近から炉址的な焼成痕が確認されたが、後の攪乱によって一部を残すだけである。

〔その他の施設〕 壁内外から16個の柱穴状ピットを検出した。柱穴は、遺構中央付近に寄って一列に4個の状態で2列が確認された。

第6表 第8号竪穴住居跡(Dd68)ピット計測値一覧表

No.	径 (cm)	深さ(cm)	平面形	堆 積 土	No.	径 (cm)	深さ(cm)	平面形	堆 積 土
1	25 × 26	15	円形	黒褐色腐植土	9	柱 20 × 18	62	楕円形	黒褐色腐植土
2	28 × 33	7	楕円形	黒褐色腐植土	10	柱 20 × 15	58	楕円形	黒褐色腐植土
3	20 × 21	16	円形	黒褐色腐植土	11	17 × 22	16	楕円形	黒褐色腐植土
4	柱 20 × 20	24	円形	黒褐色腐植土	外1	20 × 22	15	楕円形	黒褐色土
5	柱 22 × 23	30	円形	黒褐色腐植土	2	27 × 25	18	楕円形	黒褐色土
6	柱 25 × 20	28	楕円形	黒褐色腐植土	3	37 × 22	22	楕円形	黒褐色土
7	柱 16 × 17	44	円形	黒褐色腐植土	4	18 × 18	14	円形	黒褐色土
8	柱 24 × 22	26	楕円形	黒褐色腐植土	5	16 × 17	13	円形	黒褐色土

Dd 68竪穴住居跡出土遺物

遺物量が少なく、何れも破片だけの出土である。B類・C類坏、土師器・須恵器甕片等がみられるが、C類坏と須恵器甕は小細片が一片ずつだけである。B類の底部片は2点あり、何れも糸切痕を残している。須恵器甕は外面に叩目、内面に布目痕が観察される。また、住居跡内

のピットからは、12C前半代の年代観を有す袈裟襷文壺の破片と思われる陶器が出土している。ピットはその配置からして柱穴と思われるが、埋土中での遺物のあり方は、同遺構の上限にも関わるものであろう。なお、陶器については、別項でまとめて記す。

第7表 西根遺跡竪穴住居跡一覧表

遺構名	辺長(m)		床面積 (㎡)	壁高 (cm)	磁北からの 振れ	柱 穴 (個)	貯 蔵 穴 (個)	周 溝 (有無)	カマド			袖 (有無)	煙道部		煙出し部 形状
	東西×南北								有無	位置	方向		有無	長さ×幅×深さ	
第1号住居跡 (Ba 71)	1×4.45		1	8-10	E-12-S	1	2	無	1	東壁北寄りに 焼痕有り	東南東	無	無		
第2号住居跡 (Bj 03)	5.1×3.1		14.7	20	N-35-E	1	1	有	無			無	無		
第3号住居跡 (Ca 50)	1×2.43		1	9	E-12-S	2	3	無	1	南東壁北寄りに 焼土ブロック有り	東南東	無	無		楕円形 (?) P17
第4号住居跡 (Cc 06)	3.0×3.0		7.54	20	E-31-S	3	4	無	1	南東壁北寄りに 焼成痕有り	東南東	無	無		
第5号住居跡 (Cc 65)	2.7×3.0		7.41	12	E-22-S	1	1	無	無			無	無		
第6号住居跡 (Cf 77)	確認長 1.8×2.1			30	( - )	1	1	1	1	1	1	1	1		
第7号住居跡 (Ch 74)	3.3×3.2		9.48	20	E-50-S	1	2	無	有	南壁東寄り	南南東	無	有	68×30×15	円形 と 楕円形
第8号住居跡 (Dd 68)	3.2×4.6		13.06	20	E-23-S	8	1	有	無			無			

## 2 竪穴状遺構

### 第1号竪穴状遺構 (Bd 56) 第10図 第8表

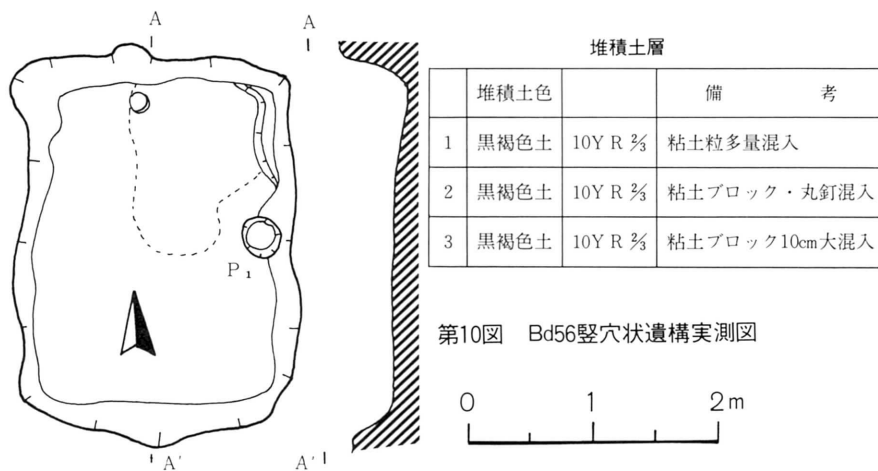
〔平面形〕 南北に長軸を持つ方形プランを呈す。方位はN-92°-Eの傾きを示す。

〔断面形〕 壁は基底部から緩い傾斜で立ち上がる様相を呈す。壁高は約30cmを測る。

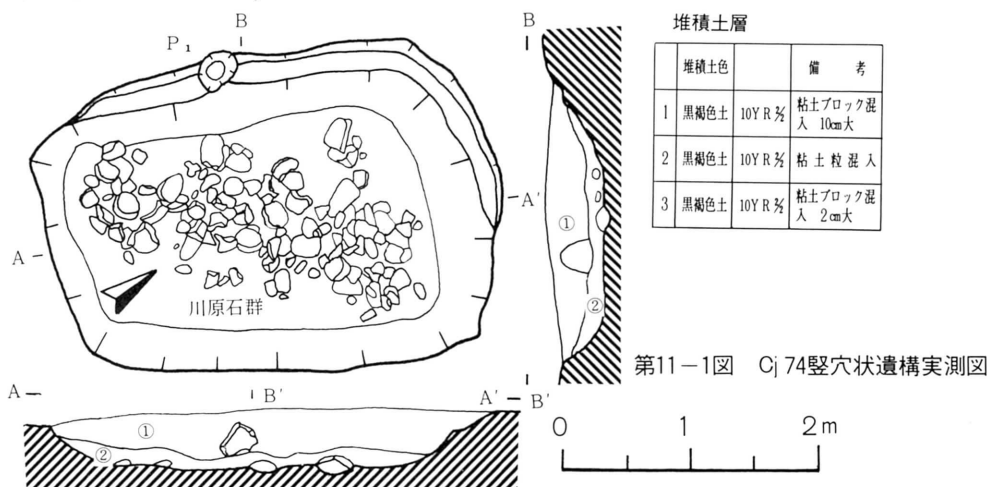
〔堆積土〕 黒褐色土を主体とする粘土粒および粘土ブロックが混入する各層に細分される。粘土粒の混入する層は自然堆積状態を示すが、粘土ブロックの混入する層はその堆積状態に人為的な面がみられることから攪乱層とも考えられる。

〔基底部〕 明黄褐色粘土層を掘り込み平坦に形成されているが、中央付近から北壁にかけて攪乱部分がみられる。

〔その他〕 覆土中から多数の丸釘が出土するが、他の遺物は全く検出されなかった。



第2号竪穴状遺構 (Cj 74) 第11図 第8表



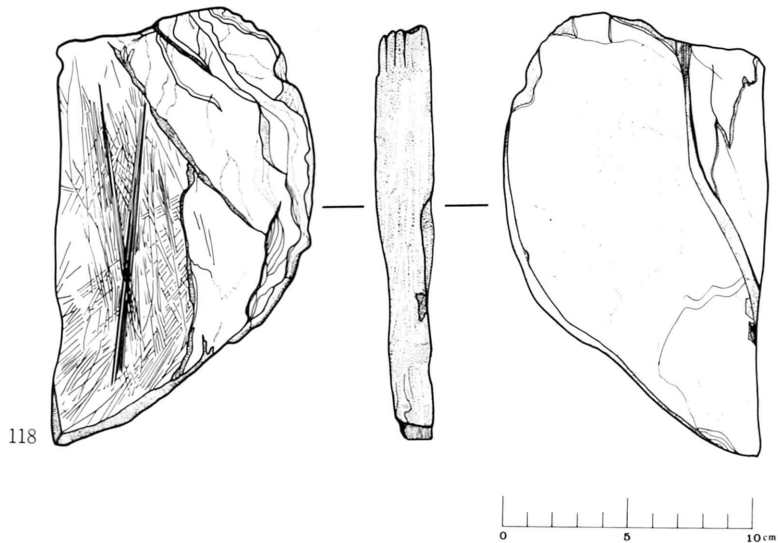
- 〔平面形〕 長軸を南北に持つ方形プランを呈す。方位はN-112°-E傾き東南東を指す。
- 〔断面形〕 各壁とも基底部から緩い傾斜をもって立ち上がり検出面に続く。壁高は45cm。
- 〔堆積土〕 黒褐色土の単層で構成されるが、粘土ブロック等の混入状態によって3層に細分される。何れもその状態から推察して一度に埋め戻されたものと考えられる。
- 〔基底部〕 明黄褐色粘土層を掘り込み舟底状に形成されている。また、幾分起伏に富む。
- 〔その他〕 基底部から多数の川石が2重3重に積み重なって検出されており、それが南西隅から北東隅に向けて対角線状に配列されていることなどから墓址的な使用目的をもつものとも考えられるが、上屋構造および付随施設が壁内外何れからも確認されず明らかなものでない。なお、川石中から線刻を施す粘板岩が一枚出土している。当遺構は、鳥海B遺跡のDg 65竪穴

状遺構に幾分類似する遺構である。

**Cj 74 竪穴状遺構出土遺物**

土器類は破片だけの出土。B・C類坏、土師・須恵器甕の体部片が若干であるが、埋土中からのものが多く、床面からはB類の底部片だけがみられる。切離しは不明である。

他にNo.118の遺物がある。研磨器と思われ、鋭い削痕が縦横に走る。時に深い部分は2～3mmほど窪んでおり、X字型に交錯している。研磨を目的として使用した部分は図示した部分の一面だけであり、他の部分は自然面や剝離面そのままである。材質は粘板岩であり、数ヶ所に剝離を意図した凹部の打瘤痕が観察される。スレート特有の性質を利用して、偏平な研磨石を作るための痕跡なのであろう。



第11-2図 Cj74 竪穴住居跡出土遺物

第8表 竪穴状遺構一覧表

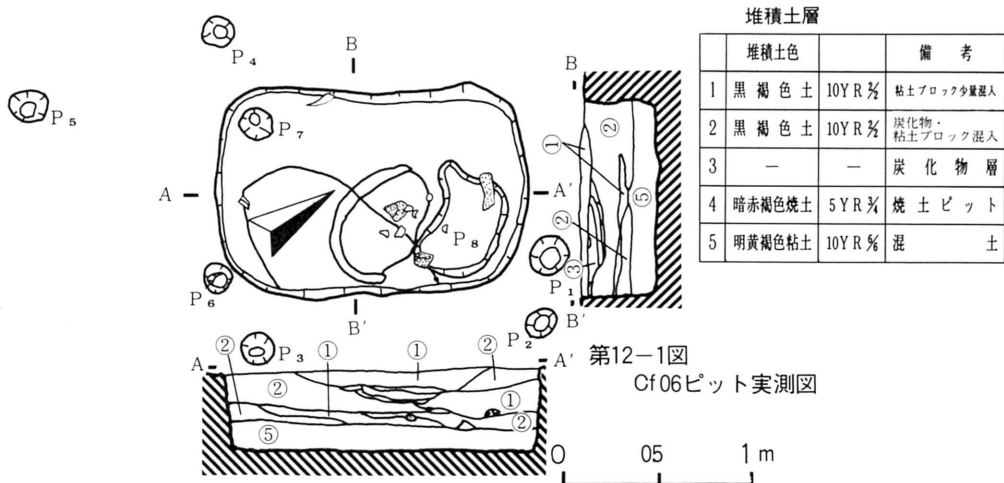
遺構名	登録番号	辺長		床面積	平面形	壁高	中軸線	方位	焼成有無	位置	備考
		東西×南北	東西×南北				磁北からの振れ				
Bd 56 竪穴状	1-8	2.2×3.2 (m)	1.95×2.53 (m)	4.93 m <sup>2</sup>	方形	30 cm	N-92°-E (E-2°-S)	東南東	無	無	北方床面に新期攪乱有り。粘板岩1枚(縁刻文有り)埋土中から多数の丸釘確認。
Cj 74 竪穴状	1-2	2.6×3.55 (m)	1.7×2.84 (m)	4.82 m <sup>2</sup>	方形	45 cm	N-112°-E (E-22°-S)	東南東	無	無	基底面に川原石が北東方向にむけて2重～3重にかさなり検出

**3 ピット遺構**

本遺跡から発見したピットは、大別して大型ピット(径50cm以上)・柱穴状ピット(径50cm以下)の2様である。前者は20基・後者においては数百個を検出した。数多く検出した柱穴状ピット群からは、建物跡1棟・柱列跡等を確認している。これら各遺構の概要は次の通りである。なお分類は、本項最後の「まとめ」で記す。

(1) **Cf 06 焼土ピット** (第20図・第9表)

〔検出地点〕 調査地南端寄りで、基準C点から南へ約16m、西方約4m付近に位置する。



〔検出面〕 耕作土たる1層除去後のII層上に検出した。

〔断面形〕 各壁の立ち上がりは、基底部から垂直に形成されている。

〔基底部〕 明黄褐色粘土層を掘り込み、平坦に構築してある。

〔施設〕 柱穴様ピットが壁内から1個・壁外から5個検出された。堆積土は黒褐色土(①層)であり、現地性焼土上部に堆積する土層に一致する。

〔その他〕 鉄器・土師器片・拳大の礫等の出土は、堆積土①・②層にみられる。

〔性格〕 当遺構は墓塚的性格をもつ遺構(A)と現地性焼土をもつ遺構(B)とに区別される。

**A遺構：** 規模その他は一覧表参照。(第9表)

堆積土は大別して2層から構成されるが、混入土の違いから3層に細分される。いずれの堆積土も黒褐色土を主体として径2~6cm程の粘土ブロックを多量に含む各層で構成される。最下部に占められる層は、上部層と異なり粘土を主体とする黒褐色土のブロックが混入し、特に突き固められた土性を示す。これら堆積土は一度に埋め戻された土質と考えられる。また少量ながら出土する遺物・規模等を考慮して土墳墓的な性格をもつ遺構と推察される。なお正確な年代観は資料不足のため明らかでないが、B遺構より古い時期の遺構である。

**B遺構：** A遺構のほぼ中半に位置し、その堆積土を約17cm程掘り窪めて形成している。規模は①層堆積状況から推察して東西1.0×南北1.07m×深さ約0.17m内外と考えられる。断面形態は皿状を示し基底部から緩かに立ち上がる。現地性焼土は、その基底面に形成され焼土を中間層として上下層に厚さ2cm程の炭化層を形成する。なおそれは、焼土の周囲を取囲んで検出された。現地性焼土の規模は東西0.65×南北0.50m×深さ0.1m程で、その形状は不整楕円形を呈す。

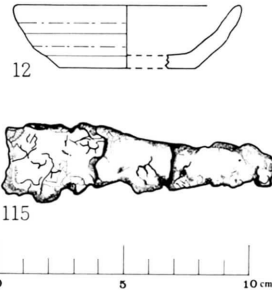
堆積土は黒褐色土の単層で構成され焼成痕を被覆する。また同層は、周辺ピット堆積土と一致することから当遺構に付随する柱穴状ピットと考えられるが明らかでない。なお遺構の性格は、明らかに火気の使用は物語るが、現状での実質的な性格は不明なことが多い。

#### C f 06 ピット出土遺物

全体として出土遺物は少ない。実測されたのはNo.12の小型B類坏とNo.115の鉄製品のみである。

No.12は口径が10cm以下の所謂灯明皿タイプのものであり、他に同類の破片も散見される。破片の中には、外面口縁部と内面の一部に煤状の炭化物が付着している例もある。この他に台付坏の破片もみられるが、詳細については省略する。尚、C類は細片が僅かに埋土中に含まれる程度であり、A類は全くみられない。

No.115は鉄器である。長さ10.6cm、厚さ5～10mm内、錆部を除く断面の厚さは約3mm位となっている刀子状の製品と思われる。



第12-2 Cf06 Pit出土遺物実測図

#### (2) C e 53 焼土ピット (第15図・第9表)

〔検出地点〕 本遺跡の基準C点から南方約14.5m・東方約3.5m付近に位置する。

〔検出面〕 耕作土・I層除去後のII層上部に検出した。

〔断面形〕 形態は皿状を示し、その各壁の立ち上がりはさまざまである。南東方向は緩い傾斜を示すが、北西方向は若干急な傾斜をもって立ち上がる。

〔基底面〕 堆積土中に炭化物・焼土粒を含み、基底面西寄りから現地性焼土が検出された。この規模は、東西0.16×南北0.2m×厚さ2cm程で不整形のプランを呈す。なお周壁は焼けておらず部分的な焼痕であることが確認された。

〔性格〕 遺物などの出土がなく、資料不足のため不明とする。

#### (3) D a 09 焼土ピット (第13図・第9表)

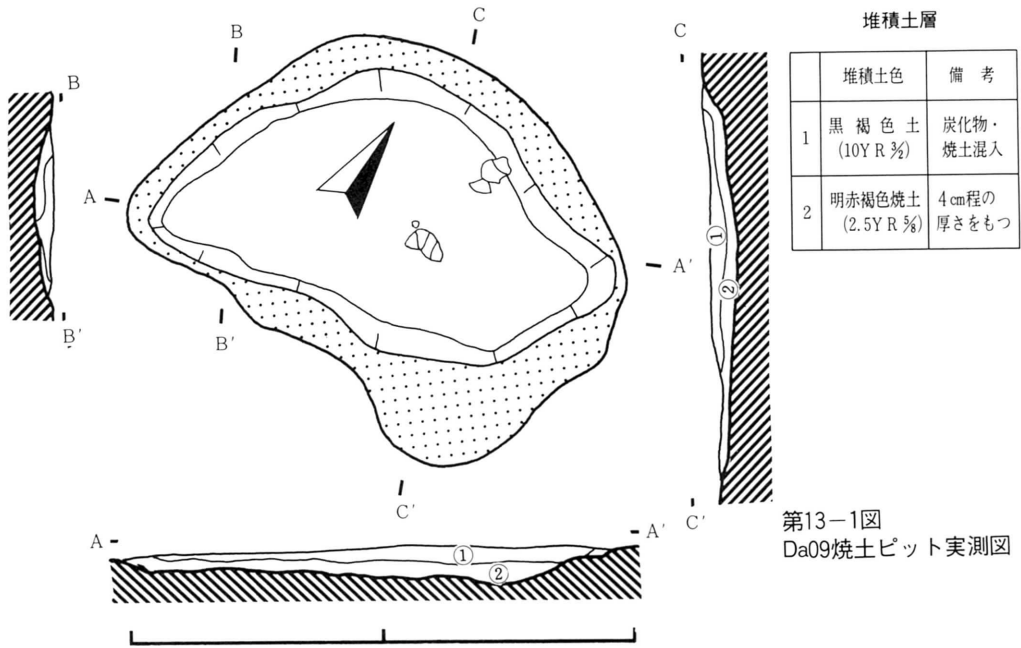
〔検出地点〕 基準C点から南方約32m、西方約7mの南段丘張り出し部分に位置する。

〔検出面〕 耕作土・I層除去後のII層上部に検出した。

〔断面形〕 基底面は、中央東寄り部分でレンズ状の窪みをもち後に緩い傾斜で立ち上がる。但しこの形態は、遺存状態に由来する特殊形である可能性が強い。調査地が削平されているため、その上半部を欠失していると考えられるからである。

〔堆積土〕 上部に焼土ブロック等を含む黒褐色土が堆積し、下層に基底面から続く明赤褐色焼土が堆積する。当遺構は、この2層から構成される。なお、下層焼土が黒褐色土を中心として、その周囲を取り囲んで、むきだし状態で検出された。

— 西根遺跡 —

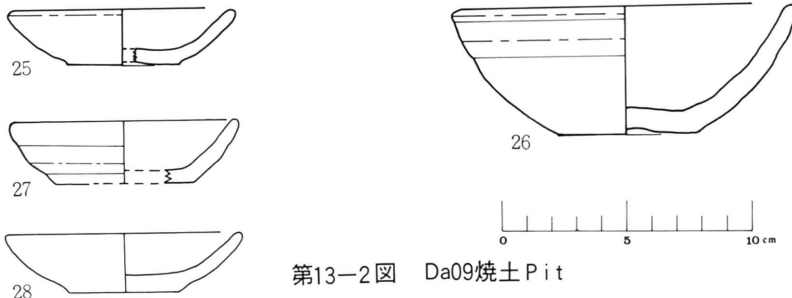


〔基底面〕 II層面を掘り込んで形成している。焼成痕は、基底部分に止まらず周壁にもおよび平均的な火熱の浸透状態を示す。焼土の厚さは壁付近で約5cm、中心部分で約10cm程で固く焼け縮まって確認された。

〔その他〕 遺物は、①、②層から多数の碎片が出土している。いずれもロクロ使用である。

〔性格〕 焼土の広がり状態などから規模的に大きな範囲で火気を使用した遺構と考えられる。しかし上部構造ならびに周囲の状況が削平によってはっきりせず正確な用途は不明であるが、平面図・断面形態から推察する限りにおいては、東方に最深部を形成し、その立ち上がりは、周壁と異なり若干急な傾斜を示し、2段に形成される。一方西方は、最深部分から緩い傾斜で立ち上がり、平坦と化しながら壁で、やや急に立ち上がる。これらは同一層内で見られ、また遺物等も出土することから野窯的な土器焼成の遺構と考えられる。なお年代観については出土する遺物から平安中半頃と推察される。

Da 09 焼土ピット出土遺物



B類のみの出土である。No.25、27は推定口径が10cm以下の所謂燈明皿タイプの坏であるが、煤等の痕跡はない。No.25は、色調がにぶい橙色を呈しているが、硬質な焼き上がりを呈す。No.26は器肉の厚い軟質な坏である。磨滅が多く、全体にひび割れが入っている。この他に、B類の破片が多数出土しており、10点の底部片が確認される。磨滅の激しい一点を除き、他は糸切痕を残している。No.26のような器肉の厚い軟質のものが大半であるが、体部片の中には凹凸の激しい薄手のものや、かなり硬質のものもあり、須恵器の焼成に近い例も散見する。

他に、台付坏(D類)と思われる破片があるが、付高台ではないと思われる。また、内側の器面の磨滅が激しいため、内黒のもの(D-c類)か、そうでないもの(D-b類)かは不明である。

(4) B<sub>j</sub> 77焼土ピット (第18図・第9表)

〔検出地点〕 基準C点から北方約1m・東方約28m付近に位置する。

〔検出面〕 耕作土・I層除去後のII層上部に検出した。

〔断面形〕 各周壁は緩い傾斜で立ち上がる。形状は皿状を呈す。

〔基底部〕 基底部中央から径0.3×0.3m×厚さ1cm程の円形を示す焼成痕が検出されている。焼成は、周壁に及ばず基底部を一部掘り窪めた状態で確認されたもので、時期の異なるピットによって壊されている。

〔性 格〕 堆積土状況・出土遺物の比較等から他の遺構と時間的な隔たりは、あまりないものと思われる。なお用途については、火気の一部使用の他明らかではない。

B<sub>j</sub> 77ピット出土遺物

土師器の甕だけの破片出土。ロクロ使用の口縁部1、他は外面に刷毛目を有すものである。内面にあっては刷毛目、ナデの両様もあるが、不明なものもある。また、1点だけであるが口縁部の内外面に刷毛目を施す例もある。

(5) D<sub>b</sub> 09 焼土ピット (第15図・第9表)

〔検出地点〕 基準C点から南方約34m・西方約8mの南端段丘中段部に位置する。

〔検出面〕 客土・I層除去後のII層(明黄褐色粘土)上部に検出した。

〔断面形〕 各壁は比較的急勾配を示しながら立ち上がる。形状は皿状を呈す。

〔基底部〕 北側張り出し部分の基底面から北壁一部にかけて焼土ブロックが確認される。基底面は起伏に富み一定しない。

出土遺物は少なく、B類の口縁～体部の細片が若干あるだけで、詳細は不明である。

(6) B<sub>d</sub> 77ピット (第14図 第9表)

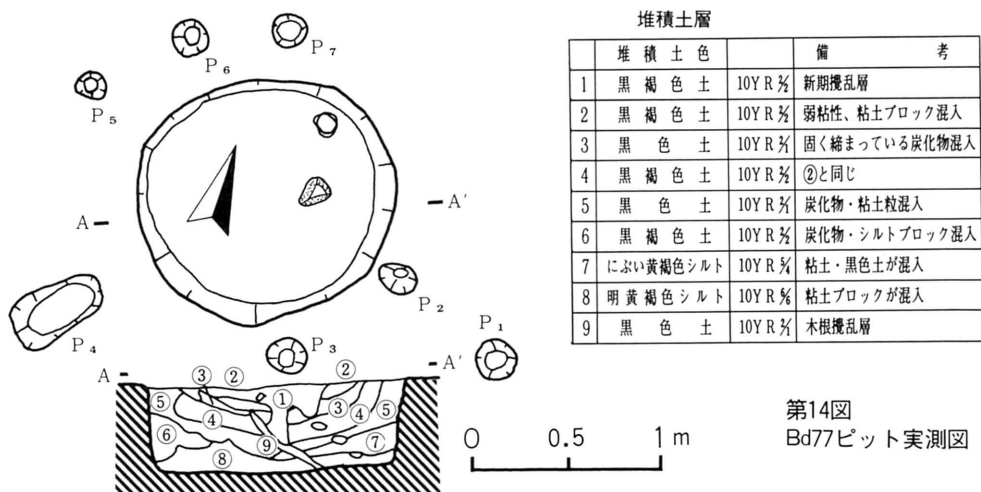
〔検出地点〕 基準C点から北方約19m・東方約28m付近に位置する。

〔検出面〕 耕作土・I層除去後のII層上部に検出した。

〔断面形〕 各壁は垂直に掘り込まれて形成され、基底部は、にぶい黄褐色シルトを基盤と



— 西根遺跡 —



第14図  
Bd77ピット実測図

して平坦に構築されていた。なお壁は粘土層であり、その深さは約50cmを測る。

〔堆積土〕 黒褐色土・黒色土が上部に堆積し、下部には暗褐色土（混土）が堆積する。なお遺構中心部には木根による攪乱がみられる。

〔性格〕 堆積土状況・規模等から墓塚としての可能性も考えられるが、明らかでない。遺物は、全て覆土中からの出土であり、年代観は不明とするところが多い。

**Bd77ピット出土遺物**

B・C類の破片のみの出土。各々底部片が1点ずつあるが何れも糸切痕を呈す。但し、C類とした破片は、台付部分が剥離したD-c類のものであるかもしれない。

(7) Cf 03 Na 1 ピット (第15・16図・第9表)

〔検出地点〕 基準C点から南方約15m・西方約2m付近に位置する。

〔重複〕 Cf 03 Na 2 ピットと重複し、切断される。以下第9表を参照されたい。

**Cf 03 ピット出土遺物**

B類は、Na.10、11の2点。Na.10は反転復元によるものである。体部の凹凸が目立つ器肉の厚い坏で軟質のため磨滅が激しい。Na.11は完型品である。色調が赤味を帯びており、内外面にはロクロナデの痕跡が残る。この種のタイプの坏としては比較的硬質であり、歪みの少ない器形を呈している。他に同類の体・底部片が若干出土している。底部片は何れも糸切痕が観察される。

(8) Cf 03 Na 2 ピット (第15図・第9表)

〔検出地点〕 Bc 12 Na 2 ピットは、Na 1 ピットの北西約50cmに位置する。なお性格等は、Na 1 ピットに類似する。Cf 03 Na 2 ピットは、基準C点から南方約15m・西方約5mに位置し、

No.1ピットと重複する。性格は不明である。規模等は、一覧表を参照されたい。

(9) Bi 50ピット (第15図・第9表)

〔検出地点〕 基準C点から南方約4m・東方約2m付近に位置する。

〔検出面〕 耕作土・I層除去後のII層(明黄褐色粘土)上部に検出した。

〔断面形〕 基底面から周壁にかけての構築形態は、緩やかな立ち上がりを示し、その断面は浅い皿状の落ち込みで形成される。検出面からの深さは約11cmを測る。

〔施設〕 基底面に2個の柱穴状ピットが認められた。P<sub>1</sub>は17×18cmの円形を示し、その深さは約8cm程である。P<sub>2</sub>は22×21cm程で、深さは約9cmを測る。いずれの堆積土も黒褐色土の単層で、当遺構の堆積土と一致するが、上部削平のために、その性格は不明とする。

〔性格〕 上部構造および出土遺物等がみられないことから、明らかでない。

(10) Ca 06ピット (第15図・第9表)

〔断面形〕 基底面は南側部分で若干窪みをもつが、ほとんど平坦に形成され、その周壁は緩い傾斜で立ち上がる。なお断面は、皿状落ち込みの様相をもつ。

〔施設〕 基底面および壁内傾斜地から2個の小ピットが認められた。P<sub>1</sub>は、16×17cm×深さ約11cmを測り、円形を呈す。P<sub>2</sub>は楕円状のプランをもち基底が若干西方に片寄って検出されたピットである。その径は、17×21cm×深さ約18cm程であった。堆積土は、黒褐色土の単層で占められ、当遺構のそれとは一致しない。性格は不明である。

〔性格〕 Bi 50・Cb 03各ピットと同様に壁内に小ピットが確認される遺構であるが、極度な削平によって上部構造が削り取られたために性格等は不明とするところが多い。

(11) Cb 03ピット (第15図・第9表)

〔断面形〕 基底面から周壁にかけて緩い傾斜で立ち上がり、壁際でそれより幾分急な立ち上がりを示す。基底面は、若干起伏するが、ほぼ皿状落ち込みを示す。

〔施設〕 周壁内から8個の柱穴状ピットが確認された。P<sub>2</sub>、P<sub>5</sub>は、覆土状態から現代の杭穴と考えられ、P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>は調査の不手際による掘りすぎ部分である。なおP<sub>1</sub>はP<sub>2</sub>によって壊されているが、その深さは約25cmを測り、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>と共に当遺構に関連するピットと思われるが、その性格は明らかでない。平均規模は、約15×19cm×深さ約17cm程の小規模ピットである。

(12) Cf 09ピット (第15・16図・第9表)

〔検出地点〕 基準C点から南方約18m・西方約8m付近に位置する。

〔検出面〕 耕作土・I層除去後のII層上部に、南北に長い帯状をなして検出した。

〔重複〕 C-c溝跡と切り合う。断面に溝跡の痕跡がみられることから古い時期に形成されたものと考えられる。なお溝跡は、検出面から約3m程度の深さをもつ遺構である。

〔断面形〕 中央部分に最深基底面を形成して、壁に向かって幾分急な傾斜で立ち上がり、中

第9表 各ピット規模・他一覧表

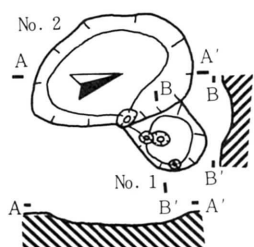
遺構名	群別	規模		平面形	堆積土	混入物	出土遺物	備考
		東西×南北(cm)	深さ(cm)					
Cf 06 焼土ピット	I	1.0 × 1.07	0.17	楕円形	黒褐色土 炭化層	焼土粒・炭 化物	鉄器・B坏片・ C坏片	Cf 06方形ピット と重複
Da 09 Na 1 ピット		1.25 × 0.88	0.08	不整形 楕円形	黒褐色土 焼土層	炭化物	B坏片・土師器 甕片	厚手の土器が出土 する
Ce 53 ピット		0.85 × 0.87	0.05	円形	黒褐色土	炭化粒・粘 土ブロック	無	部分的な焼成痕
Bj 77 ピット	I <sub>2</sub>	1.05 × 0.78	0.05	不整形 楕円形	黒褐色土	焼土粒・粘 土粒	土師器甕片	部分的な焼成痕
Db 09 ピット		I <sub>3</sub>	0.85 × 1.00	0.09	不整形	黒褐色土	炭化粒・粘 土粒	(覆土) B坏片(厚手)
Bd 77 ピット	II <sub>1</sub>		1.37 × 1.36	0.5	円形	黒褐色土 黒色土	シルト・炭化 粒・粘土	(覆土) BC坏片 ・須恵器甕片
Cf 71 ピット		1.04 × 1.05	0.62	円形	黒褐色土 黒色土	粘土粒・粘 土ブロック	(覆土) B坏片	周辺に柱穴状ピット 有
Bi 50 ピット	II <sub>2</sub>	1.12 × 1.18	0.11	不整形 楕円形	黒褐色土	粘土	無	遺構内に柱内状ピット
Ca 06 ピット		1.60 × 2.33	0.09	不整形 楕円形	黒色土	粘土ブロック	無	壁内に柱穴状ピット
Cb 03 ピット		1.85 × 2.00	0.13	不整形	黒褐色土	粘土ブロック	無	壁内に柱穴状ピット
Cf 06 方形ピット	II <sub>3</sub>	1.10 × 1.60	0.4	方形	黒褐色土 暗褐色土	粘土ブロック・炭化粒	(覆土) 鉄器・ B坏片(薄手)	舟底状ピット 焼土ピットと重複
Cg 03 ピット		0.6 × 1.0	0.2	方形	黒褐色土	炭化粒・粘 土ブロック	(覆土) B坏片(薄手)	壁内に柱穴状ピット 有
Cf 09 ピット	II <sub>4</sub>	0.55 × 2.20	0.16	長楕 円形	黒色土	炭化粒・粘 土ブロック	B、C坏片、甕片	厚手の小型土器の 出土
Cf 56 ピット		0.35 × 2.4	0.15	長楕 円形	黒褐色土	粘土ブロッ ク	無	溝状土壕的だが浅 い
Cf 03 Na 1 ピット	II <sub>5</sub>	0.5 × 0.49	0.1	円形	黒褐色土	炭化粒・粘 土粒	B坏	厚手の小型坏を出 土する
Bc 12 Na 1 ピット		0.5 × 1.0	0.08	楕円形	黒褐色土	粘土粒	C坏片・甕片	甕片は刷毛目のもの
Bc 12 Na 2 ピット		0.7 × 0.8	0.35	楕円形	黒褐色土	粘土粒・粘 土ブロック	C坏片・甕片	Na 1 ピットと同様
Cf 03 Na 2 ピット	II <sub>6</sub>	0.65 × 1.15	0.1	楕円形	暗褐色土	粘土ブロッ ク	無	Na 1 ピットを切る
Cj 12 ピット		0.7 × 0.85	(→)	不整形	黒色土	粘土粒・粘 土ブロック	(覆土) B坏片	厚手の土器を出土
Da 09 Na 2 ピット		0.65 × 0.65	0.07	不整形	黒色土	粘土ブロッ ク	(覆土) B坏片	同 上

段を形成する。その後は緩やかな傾斜で立ち上がり壁に続く。なお横断面は両壁とも急な傾斜で立ち上がる。断面は、中央部分に皿状の窪みを示すが、他はレンズ状の落ち込みを示す。

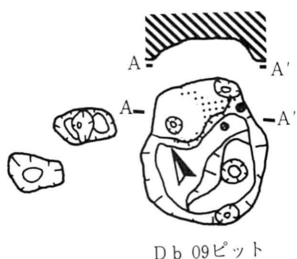
#### Cf 09 ピット出土遺物

B類だけの出土である。Na.13、15、16、17の4点は何れも糸切による切離しで、反転復元の例をも含めて口径が10cmに満たない小型のB類坏である。本来的には坏というより皿に近いものでもあるが、ここでは分類の都合上、一括して坏類として取り扱っている。

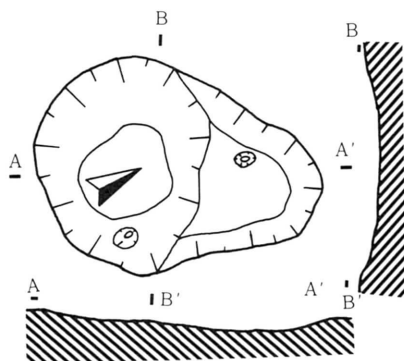
Na.13は、内面の一部に黒色変化している部分があるが、煤と断定できるものでもない。Na.16は、口縁部外側に沈線状の窪みが繞るのが特徴である。これはB類の中では硬質なものであり、どちらかというと須恵器的なものでもある。Na.17は、歪みのある坏で、体部と底部の境界が明



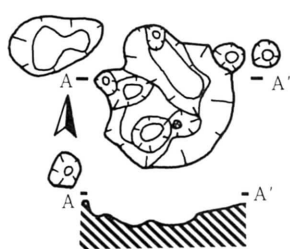
C f 03No. 1. 2ピット



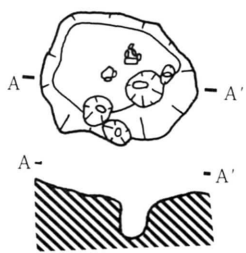
D b 09ピット



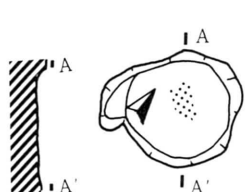
C a 06ピット



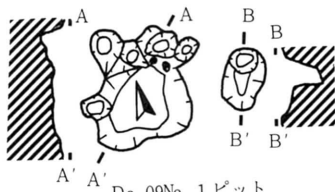
C j 12ピット



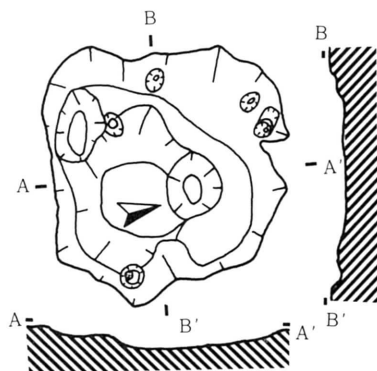
B j 77ピット



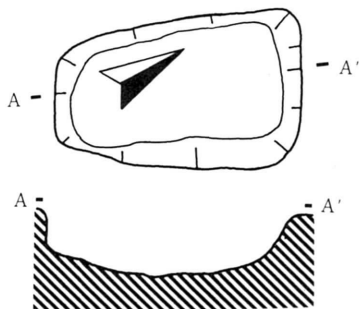
C e 53ピット



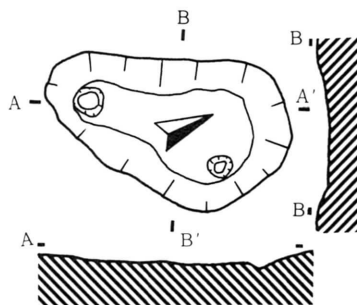
D a 09No. 1ピット



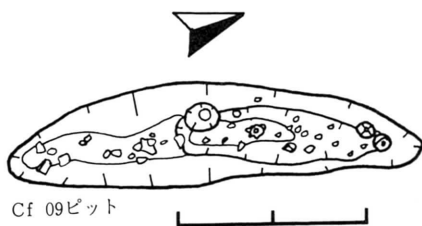
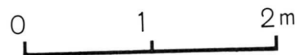
C b 03ピット



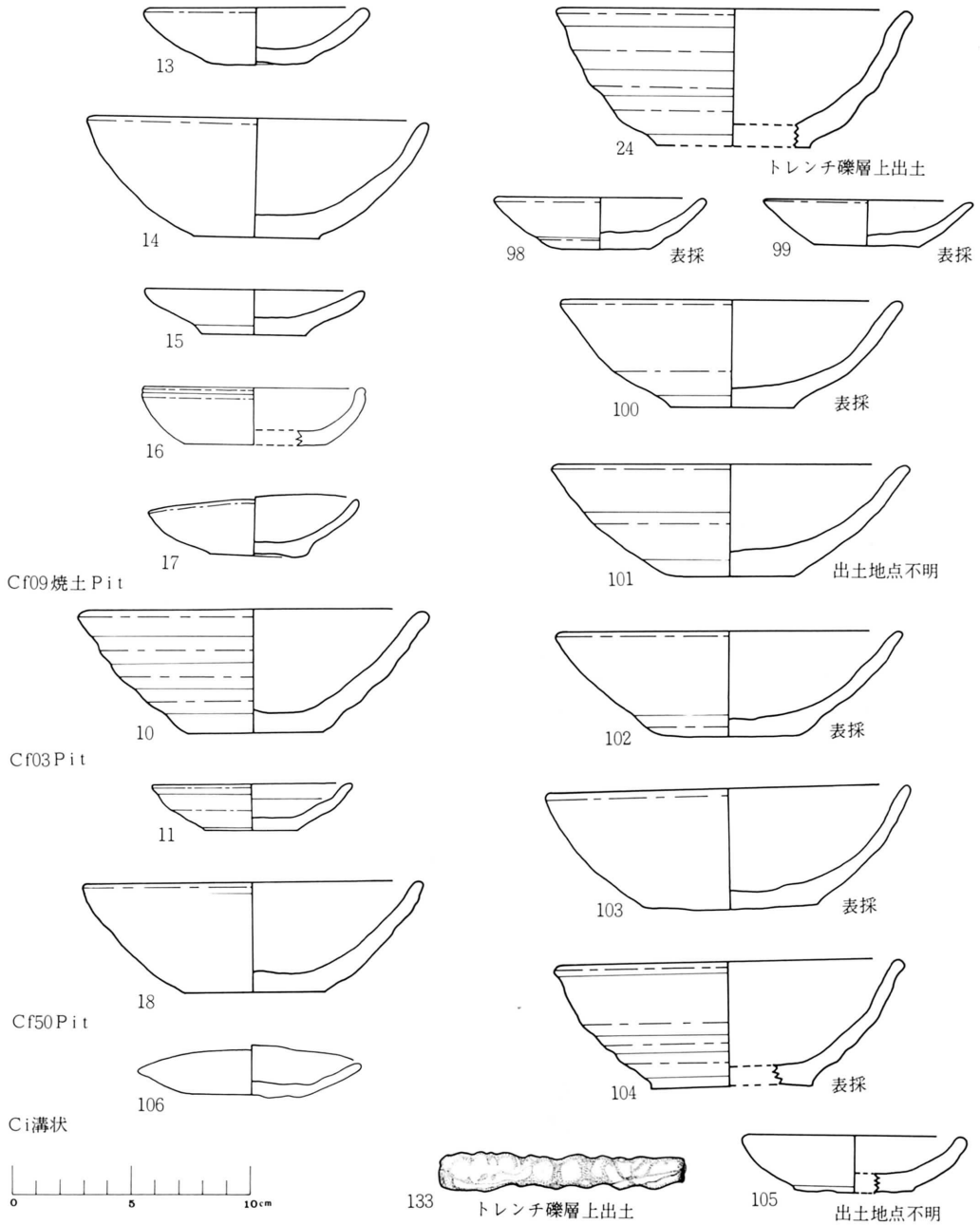
C g 03ピット



B i 50ピット



C f 09ピット



13、14、15、16、17  
10、11  
18  
106  
24、133  
98、99、100、102、103、104  
101、105

Cf09焼土Pit  
Cf50Pit  
Cf50Pit  
Ci溝上  
トレンチ礫層上出土  
表採  
出土地点不明

第16図 その他出土遺物実測図

瞭な所とそうでない部分とがある。細粒石を多く含む粗雑な胎土をしている。No.15は、小型B類の中でも時に器高の低いもので、内面壁の立ち上がりが直線的である。また、No.14は軟質で磨滅が激しい。

この他に、同類の底部が6片ほど出土しているが、糸切の切離しが確認されるのは2点だけで、他は不明である。中には、体部に段を持つ丸底風の器形を呈す例もあるが、この種の坏はCh 74 竪穴住居跡 (No.14) にも散見する。

#### その他出土遺物について (第16図)

No.24とNo.133はトレンチ礫層上からの出土。No.24は器肉の厚いB類の坏で、残存する底部に糸切痕が観察される。軟質で磨滅の激しい坏である。比較的器高が高く、体部外面の凹凸が目立つ。No.133は鉄製品であるが、腐蝕面が厚く確実な形状を知り得ない。

No.98、99、100、102、103、104の6点は表土面採集によるB類坏である。全体として胎土が粗であり、軟質な焼成による。口径が10cm以下の小型の坏はNo.98、99の2点、他は口径14cm以上の坏である。切離しの判明するのはNo.99、101の2点であり、他は不明である。後者の例は磨滅の結果によるものである。

No.101、105のB類2点は、出土地不明の坏であるが、表採によるものと思われる。No.104は、軟質な割には体部の凹凸が目立つ。No.105は小型の坏である。2点の切離しは、僅かに残る底部面に糸切痕が観察される。尚、これらは反転復元による実測である。

#### 柱穴状ピット遺構

全域に渡って検出された遺構である。これらの中でも数個のピットが集まり、独自の群を構成する地区がみられた。その中で、建物跡1棟、柱穴列跡等が確認されたことから、これらを中心にして記述するものである。なお他の小ピット計測表は省略する。

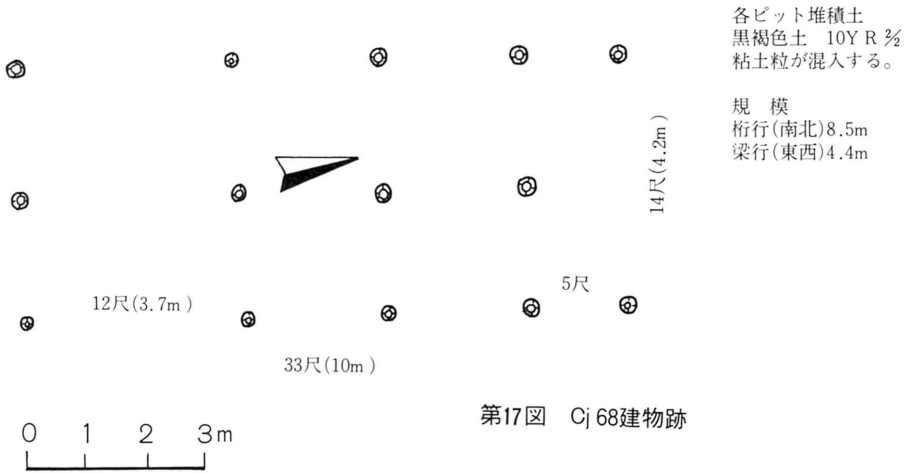
##### (1) Cj 68 建物跡 (第17図)

基準中軸線上のCj点から東方約19m、Dc点から東方約20m付近に位置する遺構である。

当遺構は、総括的な建物跡であり、その規模は南北約8.5m(28尺)×東西約4.4m(14.5尺)の南北棟で、桁行方向が磁北から約20度東に偏し、それに対して梁行方向は直角を示す。また北東梁行部分に約1.5m(5尺)のやや広目の廂様柱穴が取り付く。3間×2間の建物と考えられる。なお各柱間が平行関係にあり、相対応することから同一の建物と考える。

柱穴は、その規模が25~30cmの円形を呈し、その深さは、検出面から25~35cmを測る。柱掘り方は確認されていない。覆土は、黒褐色土であり、基本土・II層の粘土が粒状態で混入する混土である。柱痕は、各柱穴の規模から考えて、その直径が約20~25cm前後と推察される。なお当遺構は、Ca・Cb溝跡と重複するが、それらとの関係は、明らかでない。遺物は、出土していない。

— 西根遺跡 —

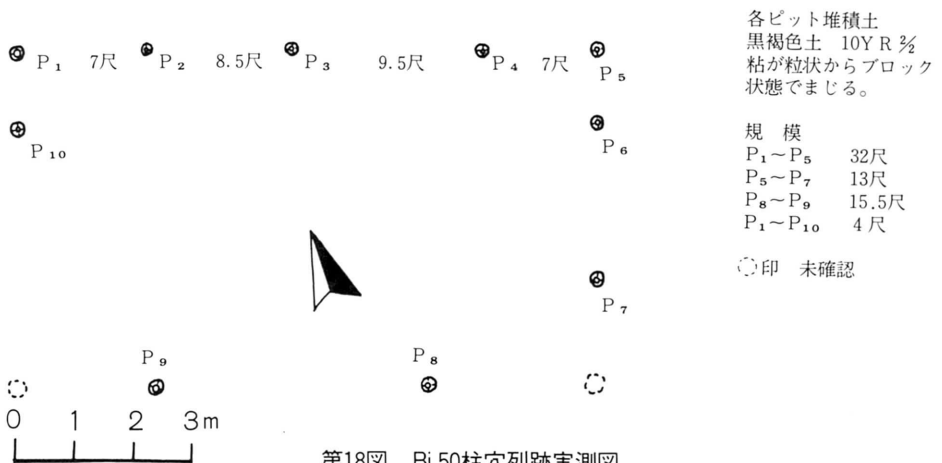


第17図 Cj 68建物跡

(2) Bj 50柱穴列跡 (第18図)

本遺跡の基準中軸線上Ca～Cc区を北西から南東方向に跨って検出された柱穴列跡である。各々のそれは平行関係にあり、その中に相対応する柱間が確認されることから建物跡としての可能性も考えられる遺構である。

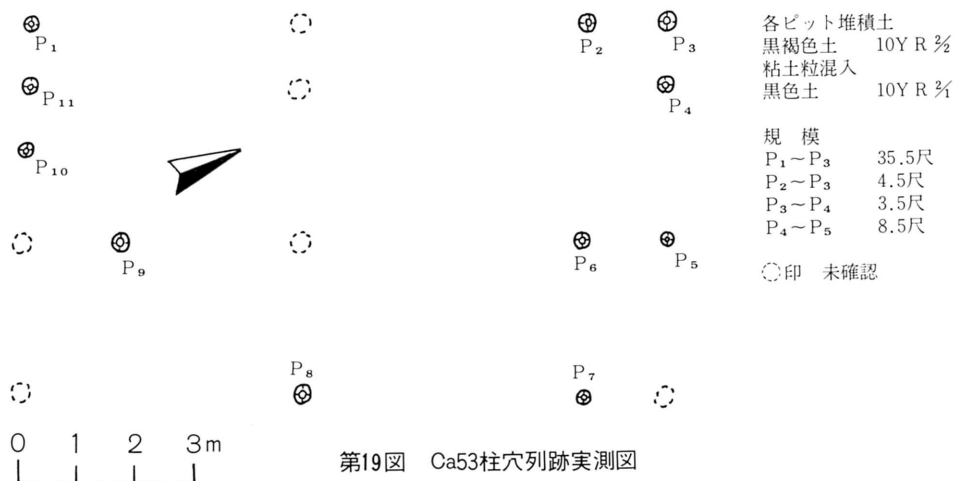
当遺構は、Bj 03住・Ca50住・Ca53柱穴列跡と重複関係を示す。いずれの住居跡よりも新期の遺構であるが、一方の柱穴列跡との関係は明らかでない。NW～SE約9.7m(32尺)×NE～SW約4.5m(15尺)の東西棟で、桁行方向が磁北から約110度東に偏し、それに対して梁行方向は、直角を示す。また北東桁行部分に約1.2m(4尺)の廂様の短い柱間が取り付く。桁行・梁行・廂様部分の各柱穴は一樣に規模が小さく約15～25cm程の円形を示し、その柱掘り方は確認されていない。なお各柱穴の深さは、いずれも20cm前後で占められるが、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>にお



第18図 Bj 50柱穴列跡実測図

いては30～35cmを測る。これらの覆土は黒褐色腐植土であるが、基本土・II層の明黄褐色粘土が粒子状態からブロック状態（1cm大）で含まれる混土である。柱痕は、各柱穴の規模から考えてその直径が約15～20cm前後と推察される。

(3) Ca 53柱穴列跡（第19図）



第19図 Ca53柱穴列跡実測図

基準中軸線上Cb～Ce区を北東から南西に跨って検出された柱穴列跡である。各々のそれは、平行関係にあり、その中に相対応する柱間が確認されることから、掘立柱建物跡としての可能性も考えられる遺構である。

当遺構は、北東部分でBi 50柱穴列跡と、南西部分でCc 06住と重複する。これらの関係は、住居跡を壊すことから、明らかであるが、柱穴列跡との関係は明らかでない。桁行・梁行の規模は、NW～SE約9.4m（31尺）×NE～SW約5.3（17.5尺）の南北棟で、桁行方向が磁北から約20度東に偏し、それに対して梁行方向は直角を示す。また北西桁行部分および北東梁行部分に、各々約1.06m（3.5尺）・約1.4m（4.5尺）の廂様の短い柱間が取り付く。

各柱穴の規模は、平均的であり、約20～25cm程で、その形状は円形を示す。深さは一定せずバラツキがみられるが、浅いもので約15cm、深いもので約35cmを測る。なお柱掘り方は確認されていない。覆土は、黒褐色腐植土を主体とした土色であるが、柱痕と推察される部分が若干黒色化しており、その周囲に粘土が粒状で含まれる混土である。

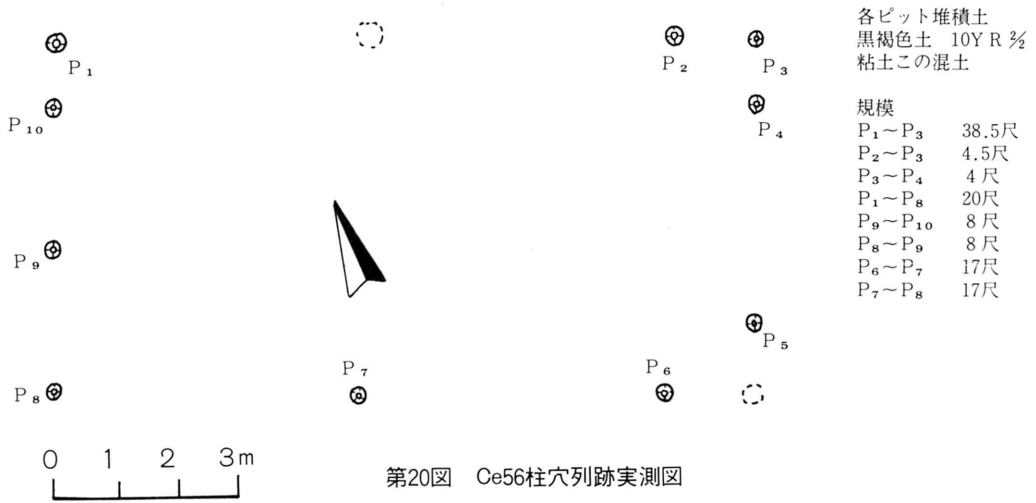
南西梁行の隅柱が確認されていない。

(4) Ce 56柱穴列跡（第20図）

基準中軸線上のCe区から東方約8m、Ci区から東方約11.5m付近に検出された柱穴列跡である。柱穴が確認されない部分が多いが、確認にいたったそれは各々平行関係を示し、その中に相対応する柱間が若干ながら確認できることから建物跡としての可能性も考えられる。



— 西根遺跡 —



第20図 Ce56柱穴列跡実測図

各々の規模は、NW~SE 10.3 m (34尺) × NE~SW 約 4.9 m (16尺) の東西棟で、桁行方向が磁北から約 110度東に偏し、それに対して梁行方向は直角を示す。北東桁行部分・南東梁行部分に各々約 1.1 m (4尺)・約 1.3 m (4.5尺) の廂様の短い柱間が確認されるが間仕切り柱が検出されておらず明らかでない。各柱穴の規模は20cm前後であり、その形状は円形を示す。深さは検出面から10~20cmを測りバラツキがみられる。なお柱掘り方は確認されていない。覆土は、黒褐色土を主体とする粘土の混土である。遺物は出土していない。

4 溝状遺構

本遺跡における溝跡は、新旧17本が検出されているが、そのほとんどは遺跡中央部付近から南縁崖にかけて確認された遺構である。なお当溝跡の中には現地表・旧地表土面（開田以前）の土地利用に伴うと思われる溝跡が存在するが、いずれも遺構検出面で確認された遺構であるため全溝跡について記述をおこなう。出土遺物については量的に僅少で、しかも遺構に固有のものはみられないため、遺構のあとにまとめて記述する。なお、プランは第1図をもって代用する。

(1) Z a 溝跡

遺跡北端に位置し、Z b 溝と平行状態を示すと共に南西から北東方向に走り、北東先端部分が第1濠に合流する。なお遺構中央地点から北側は開田時の攪乱と削平によって確認できなかった。堆積土は、黒褐色腐植土の単一層であるが基本土・II層の粘土がブロック状態で混じる混土である。当遺構の性格は、堆積土状況・旧地形図などから推察してほぼ旧土地利用時の水田に伴う溝跡と考えられる。規模その他の事項は溝状遺構一覧表（第10表）を他の各溝跡とともに参照されたい。

(2) Z b 溝跡

第10表 溝状遺構規模・他一覧表

遺構名	検出長 (m)	規模		深さ (cm)	方位	壁の傾き	堆積土	混入物	基底部土性	出土遺物(覆土中)	備考
		上幅×下幅	幅×深								
Z-a 溝状遺構	23	0.5 × 0.3		15	北→南	25°±5	黒褐色土	粘土ブロック	明黄褐色粘土	無	濠に注ぐ
Z-b 溝状遺構	33+α	0.7 × 0.4		20~50	北→南	26°±5	黒褐色土	粘土ブロック	明黄褐色粘土	C・土師器・陶片	濠に注ぐ
A-a 溝状遺構	24	0.9 × 0.7		10~30	北→南	30°±5	黒褐色土	粘土粒・ブロック	明黄褐色粘土	B・C類坏片	A-2(新)
C-c 溝状遺構	4.5	0.2 × 0.12		2~3	北→南	65°±5	にぶい黄褐色土	粘土ブロック	明黄褐色粘土	無	Cf09ピット(旧)
C-d 溝状遺構	18.4	0.22 × 0.15		7~8	北→南	52°±5	黒褐色土	粘土ブロック	明黄褐色粘土	無	新期攪乱
D-a 溝状遺構	10	0.8 × 0.45		20~35	北→南	36°±5	黒褐色土・黒色土	炭化物・粘土粒	明黄褐色粘土	B・C類坏片	C-a 溝と合流
C-1 溝状遺構	10	1.0 × 0.8		10~30	東→西	26°±5	黒褐色土・黒色土	粘土ブロック	明黄褐色シルト	無	落ち込みや、弓状
C-2 溝状遺構	10	0.5 × 0.45		5~10	東→西	18°±5	黒褐色土	粘土ブロック	明黄褐色粘土	無	新期攪乱
A-1 溝状遺構	43+α	0.7 × 0.5		20~50	東→西	17°±5	黒褐色土	炭化物・粘土粒・ブロック	明黄褐色シルト	土師・B・C類坏片	Ba71 性(旧) A-3(新)
A-2 溝状遺構	48+α	0.2 × 0.12		10	東→西	25°±5	黒褐色土	炭化物・粘土粒	明黄褐色粘土	無	A-a 溝(旧)
A-3 溝状遺構	12	0.5 × 0.3		10	東→西	45°±5	黒褐色土	炭化物・粘土粒	明黄褐色粘土	無	A-1・A-4(旧) Ba71 住(旧)
A-4 溝状遺構	10	1.0 × 0.5		30~50	東→西	17°±5	黒褐色土	炭化物・粘土粒・ブロック	明黄褐色シルト	無	A-3(新)
C-3 溝状遺構	15	0.5 × 0.35		10~15	東→西	38°±5	黒褐色土・黒色土	粘土ブロック	明黄褐色粘土	B類坏片	
C-4 溝状遺構	7	1.0 × 0.88		6~8	東→西	40°±5	黒褐色土	粘土ブロック	明黄褐色粘土	無	新期攪乱
C-a 溝状遺構	37+α	0.7 × 0.5		10 40	屈曲	32°±5	黒褐色土・黒色土	炭化物・粘土粒・ブロック	明黄褐色粘土	B・C坏、土師器壺	Cf77住(旧)
C-b 溝状遺構	31	0.2 × 0.1		10	屈曲	28°±5	黒褐色土	粘土粒	明黄褐色粘土	B・C坏、須恵器壺	Ch74住(旧) C-a と平行
D-1 溝状遺構	9+α	0.3 × 0.15		10~20	屈曲	25°±5	黒褐色土	粘土ブロック	明黄褐色粘土	B類坏片	Dd68住(旧) C-a、C-b(旧)

Za 溝跡と平行状態を示し、その東方約 3.5 m に位置する遺構である。検出状態は Za 溝跡と同様であるが、南端の道路断面では、掘り込み面からの深さ約 50 cm を測る。なお検出面からの深さは約 20 cm 前後である。堆積土は 3 層で構成されるが、黒褐色腐植土を主体とした粘土ブロックが混じる混土であり不整合状態を示す。性格は、旧土地利用時の水田に伴う水路と思われる。

### (3) A-a 溝跡

基準中軸線上の Aj 点を北東から南西方向に跨って走る溝であり、A2 溝跡に切られている。また中央部付近から北東方向にかけて水道管施工による新しい溝が重複している。基底面は粘土層であり、北東から南西に向けて緩い傾斜をもって形成されている。なお南西部分が近代の墓址に壊され確認できない。北端部には、基底部分をさらに掘り窪めた状態の落ち込みが確認され、その径は 0.7 × 1.3 m 前後で検出面からの深さは約 30 cm を測る。その堆積土は溝跡堆積層と一致する。溝跡堆積土は 2 層で構成される。上層は黒色腐植土、下層は黒褐色腐植土であり、いずれの層にも粘土が粒状からブロック(1 cm 大)状に混入する層である。性格は不明である。

### (4) D-a 溝跡

遺跡の南端部で中軸線の東側に検出された遺構である。北東から南西方向に走り、後に第 2 濠に落ち込む。北東部は Ca 溝に合流して消える。基底部は粘土であり、若干南西方向に傾斜する。堆積土は、4 層で構成される。上層から黒色土・黒褐色土・黒色土・黄褐色土の順で堆積するが、いずれの土層も粘土粒が混じる混土である。ただし最下層の黄褐色土層には黒色土が混じり汚れた土層である。なお性格は明らかでない。

### (5) C-1 溝跡

基準中軸線上 C 点から南西方向に位置し、中央部分が南に脹らむ弓状を成す遺構である。西方から東方に走り、その両端には、規模約 1.45 × 1.10 m × 深さ約 30 cm 程の窪みを持つ他、そ

— 西根遺跡 —

の中間に同等の窪みを3ヶ所に持つ。基底層はやや平坦であるが、その壁の立ち上がりは若干急傾斜を示す。堆積土は、黒褐色土と黒色土から構成されるが、混土状態から4層に細分される。上部2層は溝跡堆積土に一致する。性格は現土地利用時の堆積土とは明らかに区別されることから旧土地利用以前の溝跡と考えられるが用途などは不明である。

(6) A-1 溝跡

A・B区に跨り中軸線の東側を北西から南東方向に走る溝である。北西端は道路でとぎれ南東部分は調査地外へ食い込み全容は明らかでない。また中央部から若干南東寄りから枝分かかれして再度合流する部分が見られるが、堆積土状況から現家屋に伴う溝跡と考えられる。規模は50～80cm内外であり、その深さは30cm程で、基底層は平坦に形成されていた。なお当遺構はBa71住居跡を切り、A-3溝跡に切られている。基底層は粘性の強いシルト質土で、北西から南東方向にゆるい傾斜を持つ。その断面は急な傾斜で立ち上がり構築されている。堆積土は黒褐色土であるが混入物から3層に細分される。性格は、旧土地利用時の水田に伴う水路と考えられるが明らかではない。

(7) A-2 溝跡

中軸線ABC区の東西に跨り、北西から南東方向に走る溝跡である。北西部分は墓地で壊され、南東部はCc65住居跡付近で消滅する。途中一部舌状にとぎれ、A-a溝跡を切る。基底層は粘土であり、それは平坦で、北西から南東方向に緩い傾斜を持つ。断面形態は、幾分急な角度をなして立ち上がる。堆積土は、粘土粒が混入する黒褐色土の単層で占められ、炭化物を含む。性格については、明らかではない。

(8) A-3 溝跡

基準中軸線C区の東側に位置する。Ba71住居跡、A-1溝跡、A-4溝跡のいずれも切っ確認された遺構である。中央部付近に約0.7×1.2m×深さ約24cm程の皿状落ち込みを持つが、その堆積土は一致しない(Ba71ピット)。基底層は粘土質であり、水平に形成され、その断面形は、ゆるい傾斜で立ち上がる。堆積土は、粘土粒が混入する黒褐色土の単層で占められる。性格については、現土地利用の畑作における区画溝と推察されるが、根拠に欠けるため、不明とする。

(9) C-3 溝跡

遺跡中軸線上Ch～Da点の東側に位置し、北西から南東方向に走る。両端が舌状に切れ、途中も一部切れて確認された。基底層は、粘土を基盤として形成され、起伏に富む。断面形態は、緩い立ち上がりを持ち、その堆積土は、黒褐色土・黒色土から構成されるが、いずれにも粘土ブロックが不規則に混入する。性格は、旧土地利用の畑作に伴う溝跡と考えられる。

(10) C-a 溝跡

遺跡中軸線上 Cf ～Gf 点の東側に位置し、北方から南方に走り、後に屈曲して西方から東方に向きを変え、東端は D-a 溝に合流する。また北端は、Cf 77 住居跡を切って調査地外へ食い込む。なお途中を D-1 溝跡によって切られ、C-b 溝跡と平行状態を持つ遺構でもある。南北の規模は、上幅約 0.7×下幅約 0.5 m×深さ約 10 cm 内外で、東西の規模は、上幅約 0.8 m×深さ約 40 cm 程である。いずれの基底も基本土・II 層の明黄褐色粘土層を基盤として平坦に形成され、北方から南方・西方から東方向に緩い傾斜を示し、その両者の断面形態は幾分類似する構造を示す。堆積土は、黒褐色土と黒色土の 2 層から構成されるが、混入物などから 4 層に細分され、その上部には、黒褐色土が堆積する。なお東西に走る溝の基底から数個の川石が検出されている。当遺構の性格については、資料不足などから明らかではない。

#### (11) C-b 溝跡

C-a 溝跡と約 50 cm の間隔で平行状態を持ちながら走る遺構である。規模は、東西・南北とも一定であり、上幅約 0.2×下幅約 0.1 m×深さ約 10 cm 程で、若干東西に走る溝が深く形成されている。構造・断面形態などは C-a 溝に類似するが、その堆積土においては、黒褐色土の単層で占められる。C-a 溝跡との関係は、堆積土状況から推察して、当遺構が後に構築されたものと考えられる。なお D-1 溝によって、東西部分が切られ、南北部分が、Ch 74 住居跡を切って確認された。

#### (12) D-1 溝跡

C-a 溝・C-b 溝を切る溝であり、西端は C-a 溝の内側で舌状に切れ、Dd 68 住居を切り、その遺構内で消える。その規模は、C-b 溝に若干類似し、上幅約 0.3×下幅約 0.15 m 程である。検出面からの深さは東西部分で約 10 cm、南北部分で約 20 cm を測る。基底は粘土を基盤としてレンズ状に丸味を持って形成されている。断面形態は、幾分急な立ち上がりを示し、その堆積土は、粘土ブロックが不規則に混入する黒褐色土の単層で占められる。当遺構の性格は、堆積土状態などから推察して旧土地利用時の畑作に伴う溝と考えられるが、あまりはっきりしない。

各々の溝跡から出土する遺物は僅少であり、いずれも覆土中からの出土である。坏は全てロクロ成形であり、B 類・C 類の破片である。甕は、ほとんどがロクロ成形の破片であり、体部外面に成形後の篋ケズリ痕を有すものである。その他に須恵器甕片・土錘などが出土している。なお土錘は Ba 71 住に伴うと考えられるが明らかでない。

### 5 濠跡

本遺跡には、遺跡を区画するごとく、南端および北端に元来は自然地形の沢地と推察し得る窪地が確認され、調査した。南端部沢地は鳥海 B 遺跡とを区画して東西に走るもので現在は水田として利用されている。また北端部のそれは、ほとんど埋めもどされており、上部を水田とするが若干の痕跡を残している。いずれのそれも東端部分は胆沢川に開析された河岸低地

— 西根遺跡 —

に注ぐ。

本編では、これら自然地形から人為的な痕跡を見ることができかねたが、その状態での区画またその他の性格を持った一つの遺構を構成するものと考えられることから、「濠」としての意味合いも含め、北端部の自然地形を第1濠・南端部自然地形を第2濠として記述する。

(1) 第1濠 (第21図)

遺跡の北端部に位置する。東南東から西北西に走り、遺跡を南北に区画すると共に、西端は浅くなって舌状に切れ、東端は調査区外に食い込む。今回の調査では西端部分から東方約55mの確認調査を行い、その概要は次の様である。

**検出長**：約55m。(農道部分は未調査)以後農道を境として東・西とに区別する。

**規模**：(西方部)上幅約11.5×下幅約4m。(東方部)上幅約15×下幅約3.5m。なお中段規模は、西方部北壁約2.1m・南壁側約4.3m。また東方部北側約9.5m・南壁側約1.8mを測る。

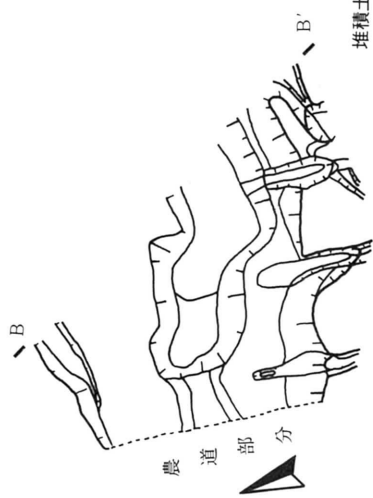
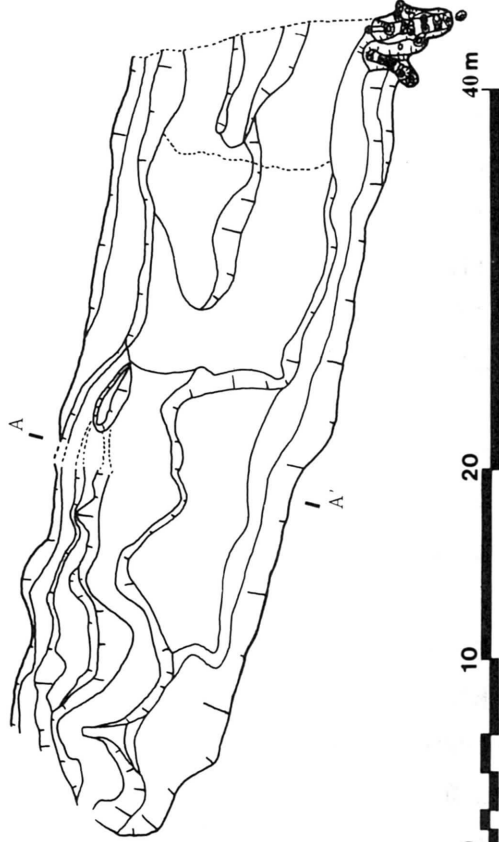
**検出面からの深さ**：(西方部)約1～1.4m。(東方部)約2.4～3m。なお中段平坦面までの深さにはバラツキが見られ一定しない。

**構造**：東方部は検出面から一段下がって平坦部分を構成し、さらに南壁寄りで一段下がり段丘礫層を掘り込んで基底面を形成する。その斜角は、43度～45度を示す。西方部分は、ほぼ東方部に類似するが、礫層上部に堆積する粘土層を基盤として形成され徐々に浅くなり、やがて舌状に切れて消滅する。その斜角は、30度～25度を示す。なお基底部分には泥炭層部分が確認されることから古くは低湿地帯であった事を示している。

**堆積土**：大別して黒褐色土と黒色土・砂状土から構成されるが、混入物などから13層に細分される。最上部層は単層の黒褐色土で占められるが、現水田面と畦とに区分され、その下層に酸化鉄の混入する層がみられる。3層から4層は、開田時に埋め戻されたI層であり、ビニール・ゴム片・肥料などが確認され明らかである。中位に占める黒褐色土は、開田以前の水田面と考えられ、下層に酸化鉄の混入する薄い層を形成する。なお水田形成段階に北側壁を壊して水田面を拡張したと考えられる。中位下層部(酸化鉄層下部)については明らかでないが、自然地形に幾分手を加え、水田として使用された層と考えられる。当層には、酸化鉄分・小円礫が多量にみられることから幾分伺えるものと思われる。なお最下層部分は、黒色土・砂状土が不規則に堆積しており、いずれも泥炭化している層である。この層は、古くは湿地帯であった部分を埋め戻したのと考えられる。酸化鉄分などは見られない。

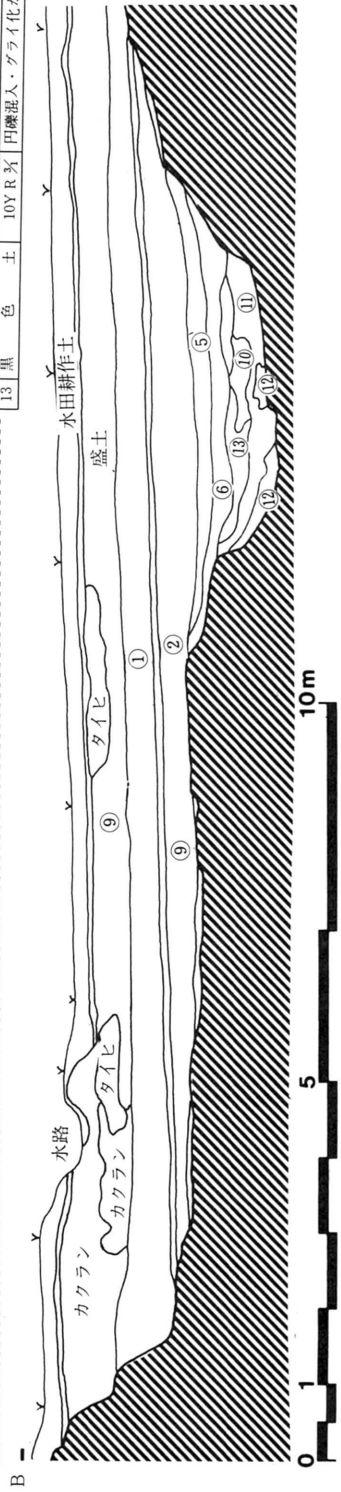
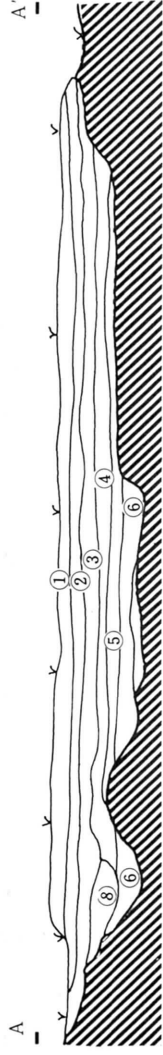
**施設**：西方部南壁に傾斜に沿って数十個のピットが段状に中位平坦部まで続き2方向に別れて確認された。その痕跡から階段様遺構としたが、各ピットの深さ、規模、距離などにバラツキが見られることから新期攪乱か、また足場的なものと推察されるが、明らかでない。

(2) 第2濠 (第22図)

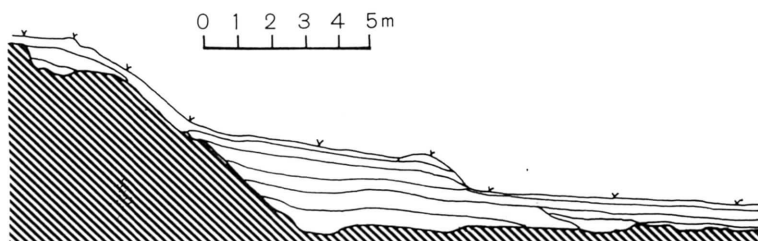


堆積土層

堆積土色	備考
1 黒褐色土	現水田耕作土・酸化鉄帯状に混入
2 黒褐色土	第一明耕作土・粘土少量混入
3 黒褐色土	第二明耕作土・酸化鉄帯状に混入
4 黒褐色土	第一明耕作土・酸化鉄混入
5 黒褐色土	第一明耕作土・酸化鉄帯状に混入
6 黒褐色土	円礫・粘土混入
7 褐色土	砂と黒色土の混入
8 褐色シルト	粘土混入
9 暗赤褐色土	水酸化鉄層・帯状に2~3cmで堆積
10 般丘砂礫層	円礫・砂等が少量に混入
11 オリーブ黒土	粘土質・グライ化が激しい
12 褐色土	砂・粘土・黒色土の混入
13 黒褐色土	円礫混入・グライ化が激しい



— 西根遺跡 —



第22図 南側段丘(第2濠)断面実測図

当濠は、本遺跡の南端に位置して、蛇行しながら東西に走り、西根遺跡と鳥海B遺跡とを区画するものである。現在も明瞭にその痕跡を止めており、規模の小さな水田と水路として利用されている。その概要は次の様である。

検出長は、調査地内を東西約30 m、南北約24 mを調査したものである。規模は蛇行状態を示すため一定しないが、その平均値は上幅約26 m、下幅約15 mであり、現段丘との比高差は 5.2 mを測る。断面形は上端部が検出面から約60cmの深さで掘り込まれその基底幅は 2.2 mの壇を形成し、その後緩やかな傾斜で基底部礫層に続く。その傾斜角は約37度程である。また、途中に中段部分を数箇所形成しているが、これは水田耕作に伴う拡張による痕跡と思われる。なお、基底部は北壁際で幾分深く形成され南方に進むにつれ徐々に段をなして浅くなっている。この基底部に見られる段差は人工的なものではなく沢の浸食作用によって形成されたものと考えられる。堆積土は、黒褐色土・黒色土・泥炭層に大別されるが、その各土質からほぼ12層に細分される。一部を除く何れの層も水平堆積の様相を呈すが、斜壁部分から約6 m南方には、他より一段高く土盛りされ、調査時には荒地となっていたが、かつては畑地また、水田として利用されたものと考えられる。下層に堆積する黒色土は水田耕作土に使用された土質と思われる。旧地形図によるとこの部分は小規模な水田となって数面を構成していることから規模拡張による土盛りとも受取れる。中位層は下部が泥炭化するが現在の水田面と水平堆積関係にあり、水酸化鉄分が帯状に混入することから開田以前に水田として利用されていた部分と思われた。また、中位下部から最下層においては基底部中央に旧用水路と考えられる攪乱部が確認され、その基底部とほぼ水平に酸化鉄層が薄く混入していることから湿地状態での水田の可能性が推される。なお、当水路は後に粘土・砂状土等で埋め戻されたらしくグライ化して確認された。当窪地は、泥炭部分が全域に渡った広がりを示すことから、かつては幅広の沢が極端なほどに蛇行して地形を浸食し、形成したものと思われる。他の施設としては、北斜面上部に人工的な幅約2 m程の窪地を確認するが基底部は平坦化せず極度な起伏状態を示し遺構を伴わない。規模は中軸線を跨ぎ、東方約22 m西方約15 m前後でその周囲には不規則的な掘り込みを数箇所持つ。覆土中からの遺物を除き当窪地部分からの出土遺物はない。形態等なども不規則的であることから整地段階における土取り攪乱部分と思われる。

遺物の出土状況は、何れも覆土内からであり、基底部出土のものは全く見る事ができない。上部層に見られる状況は全域に散らばり、その遺物の器種は種々に富むがすべて細片で占められる。中位層から泥炭層上部にかけては、上部層同様まんべんなく出土するが、特に北斜面寄りに集中して出土する。その器種は、ほとんどが厚手のB類杯・燈明皿タイプの小型杯であり、器形を復元可能とする遺物を多数出土する層である。また、泥炭層上部からは、黒色砂状土と共に火葬骨が多量にまじった状態の土師器甕が出土している。これらのことから当湿地帯は墓壙としての可能性も考えられるものであるが、今回の調査では、これを裏付する遺構は確認されていない。なお、他の遺物は上部平坦部からの流れ込みあるいは沢による澱み部分への堆積とも考えられる出土状態である。

当濠は、中軸線上でその比高差は約5.2mを測り、東方に進むにつれてその高さを増すが西方部分は第1濠に類似しており、次第にその差は少なくなり西端部は1m前後となって、その幅は狭くなり舌状に切れ消滅する。濠の性格は後世における若干の攪乱・破壊等も部分的に見られるが、西端部分の状況および沢の極端な蛇行とそれによって形成された各所の堆積状況から推察して、当台地特有の自然沢地と解釈したい。しかし前段でも記したごとく、その状態で区画また、防備溝として利用された可能性をふまえ“濠”として記した。なお、濠内から出土した骨壺との関係は不明であるが、段丘平坦縁辺部から袈裟襷文を施す破片が出土している。

## 6 遺構を伴わない遺物

本遺跡内出土遺物の大半は、南・西側段丘と称される周辺に集中している。これらは本来的には、段丘上の遺構と関わりを持つものであろうが、直接的に断定することができない。ただ、詳細については各々の項で記すことにしても、密接な関係にあったことは否定できず、本遺跡内における出土遺物中では大きな意義を持つ。

出土遺物は杯型土器が多く、台杯のものを除いてB類で占められる。また甕型土器はロクロ成形のものが大勢を占め、西側段丘部においては須恵器にみられる叩き目の技法を残す例もある。以下については、各段丘毎の出土遺物の特徴について記し、実測図を掲示する。

### 南段丘周辺部出土遺物（第23図）

自然地形よりなる第2濠部分をはさんで、鳥海B遺跡に対面する本遺跡南端付近からの出土である。ここでは多量の遺物が出土しているが、その大半は濠そのものと直接的な関わりを持つ遺物として把握されるものではない。遺物の多くは段丘縁に特有の流れ込みと、近世の整地に関わる所業の結果として解されるものである。層位的には第2濠の項で触れた通りであるが、水田化された面より下位に存在する遺物と、段丘寄りの水田と同じレベルより上位に堆積する不自然な土砂の高まり内に存在する遺物とがある。前者の遺物は通常の流れ込みや廃棄の結果として、段丘縁により近い方に分布しており、後者にあつては段丘上の整地の際に多量の土砂と共



に段丘崖に落された結果として、高まり部分全域に存在している。これらの遺物は、鳥海B遺跡方向からの流れ込みも考えられないわけでもないが、地形的に沢で分断される形にあることや、沢そのものは少なくとも濠内が水田化された以降は動いていないと思われることなどから、当地域における多量の遺物は本遺跡に関わるものとして把握されるであろう。尚、火葬骨片を含む土師器の甕は、これらより更に下位の泥炭層の部分に倒立した状態で出土したものである。

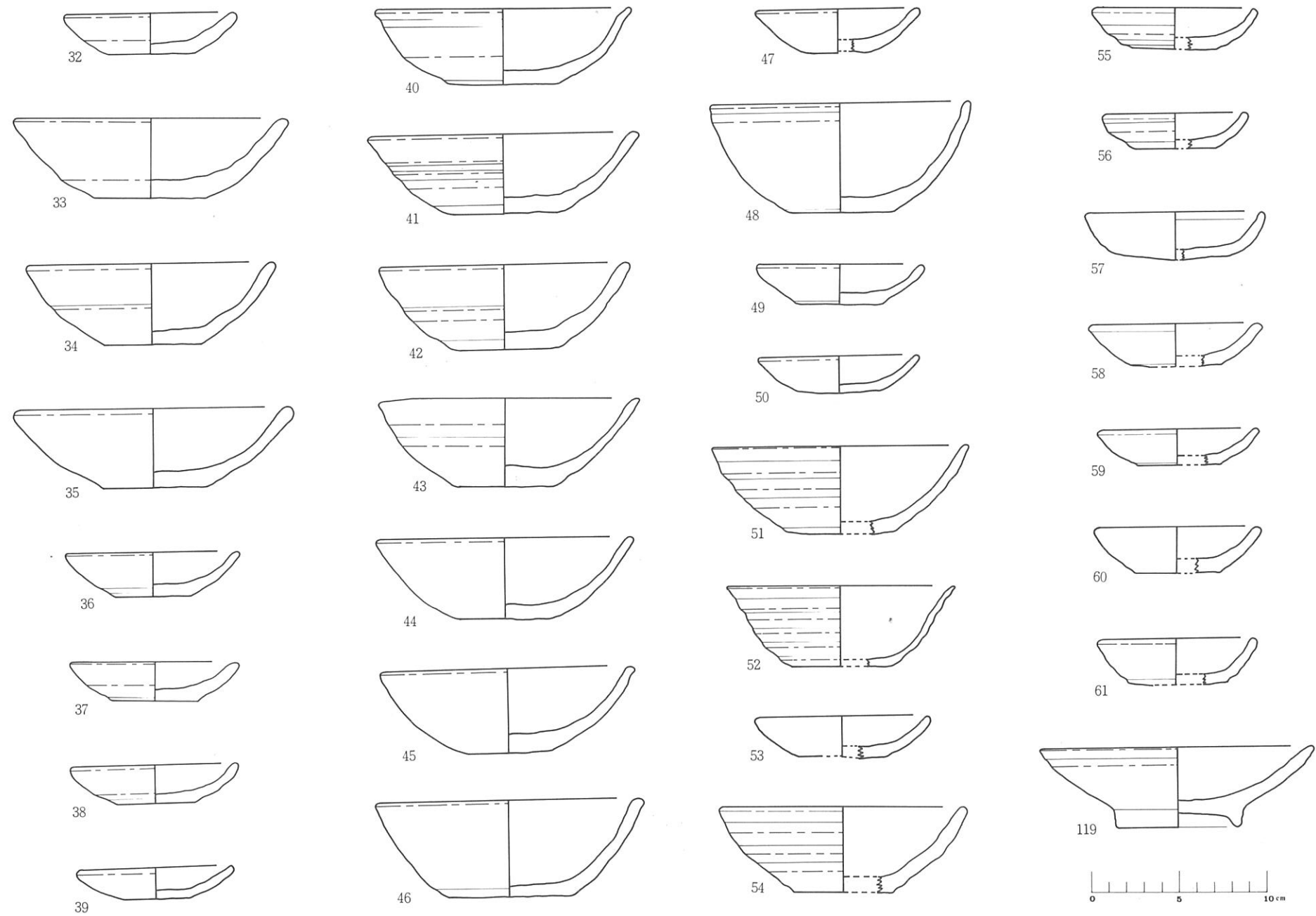
出土する土器は、坏・甕・台付坏等の器種であるが、大半はB類の坏で占められ、次いで台付坏がある。他の坏類・甕類は少なく、特にA類は一点もみられない。特殊な遺物としては、袈裟襷文を有する壺の破片が段丘上から出土しているが、これについての詳細は別項「陶器片」についてで記すので、ここでは省略する。また、以上の遺物は、図版上では段丘上・同縁辺部・同下部等に分けて図示しているが、前述の如き人為的な作業の結果によることが多いため、実際の記述は一括することとする。

実測点数はB類42点・台付坏1点・土師器甕2点の合計45点である。B類は口径が13cm以上のものと、口径が10cm以下の小型坏とに分類されるが、数的には皿に近い後者のものが若干多い。大き目の坏はNo.52、67の2点を除き器肉が厚目で、大旨軟質の坏で占められる。軟質であるという傾向は、小型のものにあってもほぼ同様であるが、2・3点例外もある。しかし、何れもA類ほどの硬さをもつものではなく、また色調も異なる。この他にB類の破片は多量に出土しており、底部片だけでも段丘上から109片、同下部より266片を数える。このうち切離しの判明するものは各々44片、203片、合計247片もあり、すべて糸切によるものである。他の破片にあっては、磨滅・剝離が激しいもので切離しは全く不明である。また、体部片も相当量出土しているが、薄手・厚手の両様があり、全体として軟質なもので占められる。硬質な坏片は器肉の薄目のものに数例みられるが、この場合もA類とは断定できないものである。他に、段丘下部より出土しているB類のうち、外面に朱の痕跡を残す破片例が一点ある。これは、体部下端から底部にかけての破片であり、底部外周の一部を除いて朱塗りされている。但し、内面にあっては、剝離のため不明である。

C類は、段丘上下部合わせて約15片ほどの細片が確認される。底部の破片例はなく、口縁か体部片であり、量的にみてB類の比ではない。

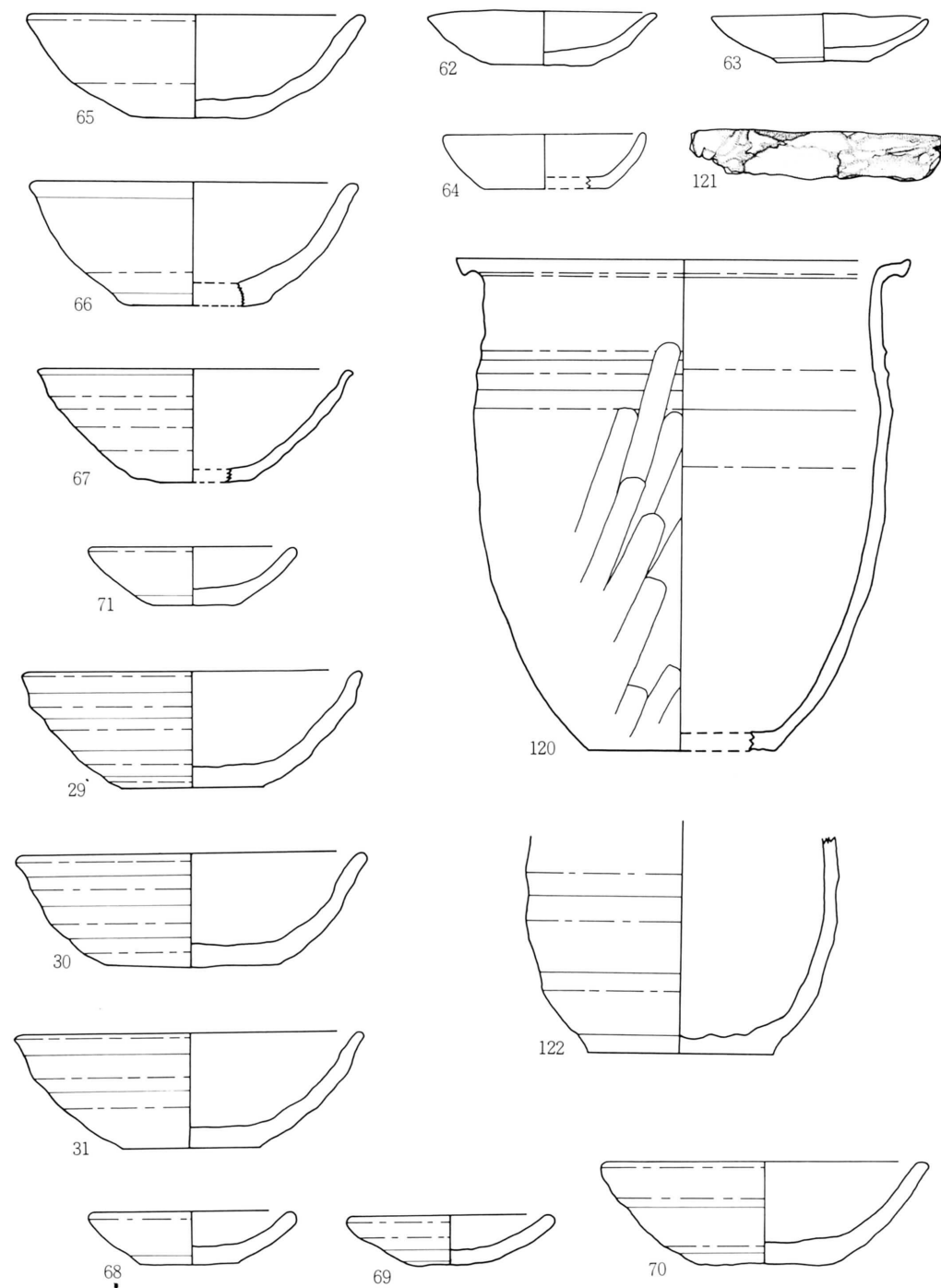
台付坏はNo.119がある。付高台によるものでB類の範疇にも属するものと解される。同類の破片は段丘上より3片、同下部より7片ほど出土しており、総じてみれば内黒のそれよりは台が高目のようである。一方、内黒の台付坏は段丘上下部合わせて5片あり、このうちの一点は底部に糸切痕が観察される。

甕型土器は、土師器No.120と122の2点の出土。No.122は小型の器種と思われる。ロクロ成形による体部下端～底部にかけての破片である。体部外面には煤が付着しており黒色変化して



第23-1図 南段丘下出土遺物実測図

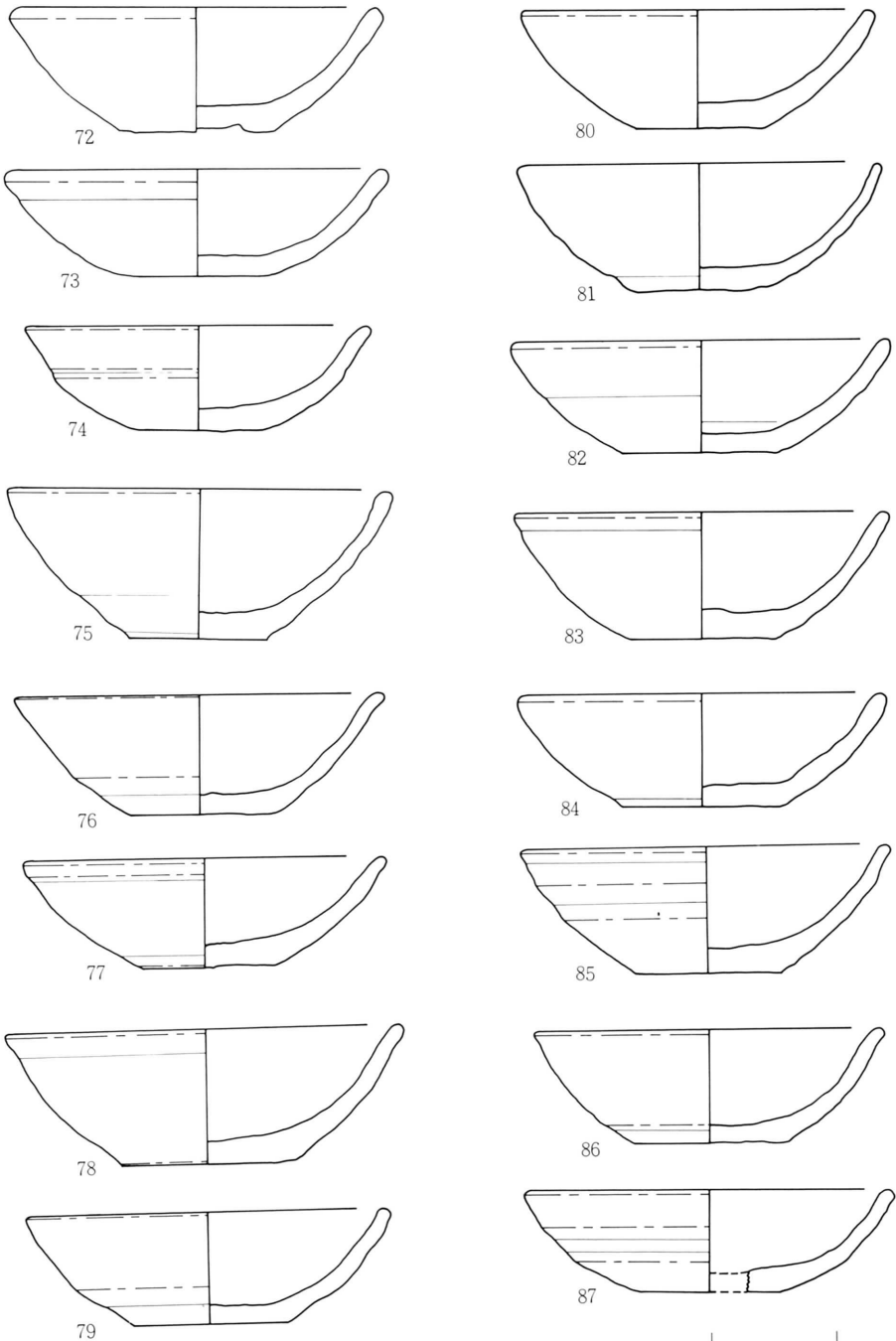
— 西根遺跡 —



- |                       |           |
|-----------------------|-----------|
| 65、66、67、71           | 南段丘上部出土遺物 |
| 62、63、64、120、121      | 南段丘下部出土遺物 |
| 29、30、31、68、69、70、122 | 南段丘縁部出土遺物 |

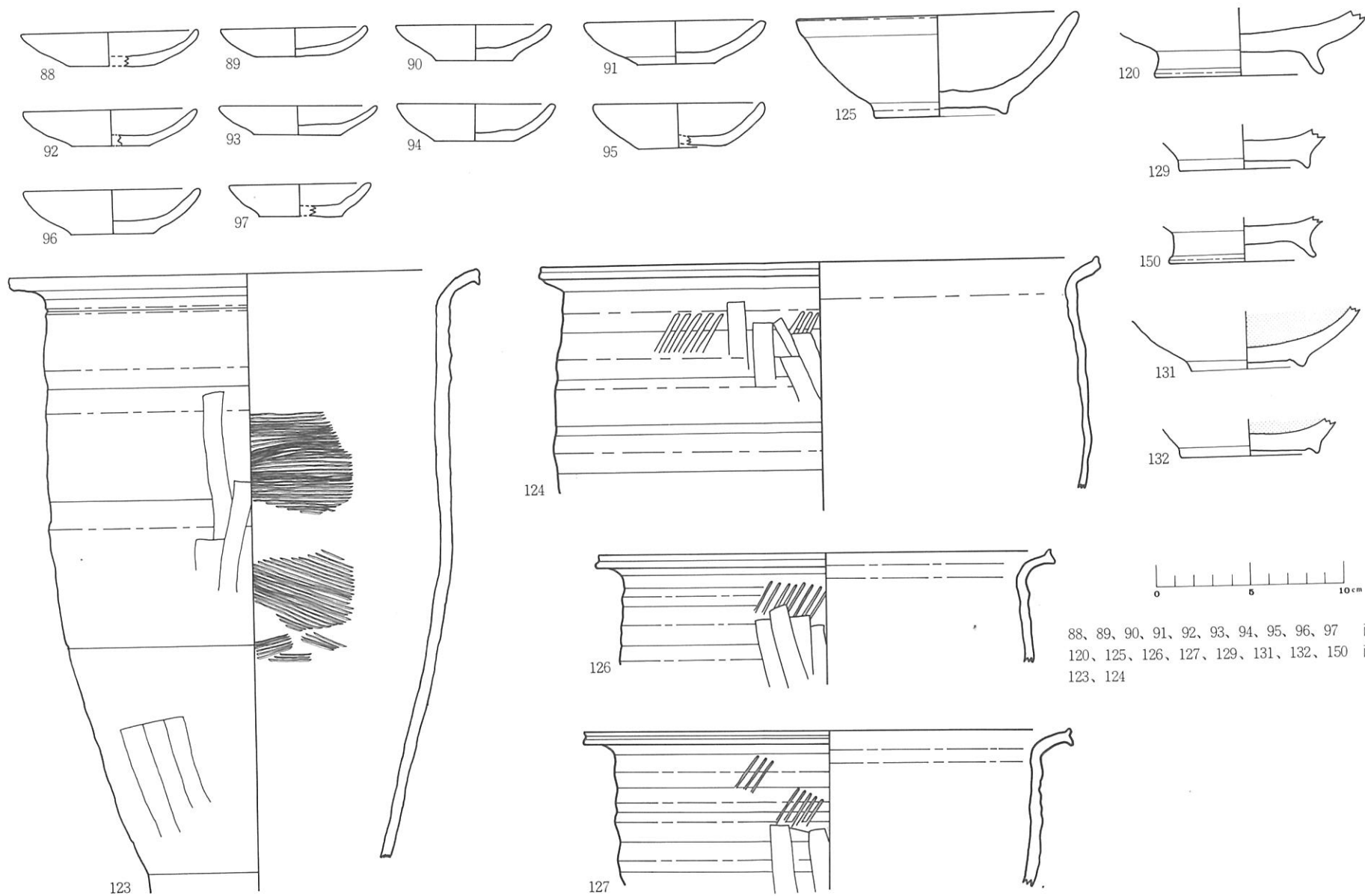
第23-2図 南段丘周辺部出土遺物実測図

— 西根遺跡 —



- |                         |           |
|-------------------------|-----------|
| 72、73                   | 西側段丘上出土遺物 |
| 74、75、76、77、78、79、80、81 | 西側段丘下出土遺物 |
| 82、83、84、85、86、87       | 西側段丘縁出土遺物 |

第24-1図 西側段丘出土遺物実測図



第24—2圖 西側段丘出土遺物実測図

いる。焼成が弱く軟質、推定底径は約8 cm大と思われる。No.120は、内部に火葬骨片と炭化物を多量に含む土が詰まっていた特異な甕である。出土の状況は詳細を欠く部分もあるが、段丘崖下の下層部分から出土したとされる。写真でも解る通り底部を上にして伏せられた状態にあるが、その周辺に掘り込みがあったかどうかは不明である。従って、段丘上からの流れ込みや廃棄の可能性も考えられるものでもある。しかし、たとえそうであったとしても、このような状況になったのは、少なくとも段丘上が整地される以前のことであり、もっと古くは自然地形で形成される濠内が水田化されるより以前のことであり、層的にみて明かである。この甕は底部が欠失しており、一般の他の長胴甕に比して器高の低いものである。体部には荒い篋削りが施されるロクロ成形甕である。長い間、泥炭層につかっていたため全体が黒褐色に変色しており、胎土中には粗砂、石英細粒を含む。焼成は比較的良好である。この他に土師器の破片として若干の出土例をみるが、絶対量は確実に少ない。須恵器にあっても同様であり、外面に格子叩目を持つものや、平行叩目を有する細片が数例みられるだけである。

鉄製品はNo.121の一点だけである。段丘縁の埋土中からの出土で、最長部10.8×2 cm、厚さ5 mm前後の大きさである。かなり腐蝕しており、詳細は不明であるが刀子の一部と推察される。

この他に、実測図には示さなかったが、灰かぶりの陶器片が出土している。灰色を呈す須恵器的なものであるが、細片のため器種等については不明である。

#### 西側段丘周辺部出土遺物（第24図）

予め断わっておくが、ここでいう西側段丘部というのは南側段丘と地形的に明確な境界を持つものではない。これは鳥海B遺跡に対面して、連続する段丘であり、南に対して北西側へ緩やかに曲がっている部分をいうのである（全体図参照）。従って、本来的には南側段丘周辺の遺物と同様の取り扱いをして差し支えないものであるが、調査時の名称をそのまま利用して区分したものである。

また、当地域における出土遺物は、西側段丘上とその縁辺部・斜面・下部とに分けられるが、流れ込みや、整地の際における攪乱・移動を受けていると思われることから、この場合も一括して記すこととする。

実測図に掲示した遺物は、B類の坏、内黒とそうでないものの台付坏、土師器と認識される甕型土器等の器種である。

B類の坏は多量に出土しており、第24—1図にみられるようなタイプと、第2図のような小型のものにと大別されるが、各々の特徴については遺物分類の項で記すので詳細の記述は省く。これらの他にB類の破片は多量に出土しており、底部片だけでも401片を数える。切離しの判明するものは109片であり、他は磨滅、剝離等のため不明。切離しの判明する底部片は回転糸切痕を残すもので占められ、再調整があると明言できる例はない。また、破片全体をみれ

## — 西根遺跡 —

ば遺存状態は芳しくなく、前述の如く磨滅してロクロ成形痕が見えないものが多い。これは他のB類にあってもそうであったように、軟質な焼成による結果が作用したのであらうと思われる。

甕型土器はNo. 123、124、126、127の4点の実測であるが、その他破片を加えても量的には少ない。これらの4点は何れもロクロ成形によるもので、口縁部に近い体部から下方にかけて篋削りを施している。このうちNo. 124、126、127の3点は、篋削りの前の段階で叩目が観察される。また、この3点は焼成が良好であり、大半の軟質なB類よりは硬い仕上がりである。一方、No. 123は内面に刷毛目の成形を施し、巻上げの痕跡もみられ、前3点の甕とは成形を異にするものである。

その他甕型土器の破片については、土師器・須恵器とも少なく、坏類の量からみれば圧倒的に少量である。この種の土器の量的な変遷は、セット関係に何らかの変化が生じてきた可能性を示唆することでもある。尚、土師器の破片は器肉が薄目のもので、器種としては大型のものにはなり得まい。これらは、外面に削り、内面にカキ目が施されている。

台付坏は、No. 120、129、150、131、132、125の6点を記載した。このうちNo. 131、132の2点は内黒処理を有するもので、他はB類の範疇にもとれる類の坏である。この種の破片は同段丘周辺に多くみられ、他にB類的なもの36点、C類的なもの9点を数えるにもかかわらず、B類坏の量からみればその比ではない。全体的にみれば、B類的な台付坏は軟質で、台部が比較的高目であり、脚径も5～9cm大と幅がある。台の高い坏は明かに付高台によると思われるが、中には台部を軽く挽き出す例もある。後者はC類に多くみられ、底部に同心円状の沈線を残している。糸切痕が判明するのはB類に若干散見するが、何れも付高台によるものである。

A類は、細片が僅か2点の出土。何れも白橙色を呈す軟質のもので、厳密に言えば従来の知見からする須恵器A類と全く同等とは言い難いものである。硬質なものについてはB類としたものの坏類に数例みられるが、この場合にあってもA類に置換できるものではない。

C類は、段丘下部より35片ほどの出土をみる。何れも口縁～体部の細片であり、底部片はない。この数は、B類に比して問題になるほどの量ではない。

(以上、遺構については鈴木、遺物については八重樫が記述)

## IV 考察とまとめ

### 1 遺構について

西根遺跡は、隣接する鳥海B・鳥海A両遺跡と共に安倍氏によって築造された鳥海柵の擬定地として最有力視されている地区で、今回の調査は同段丘平坦部の一部約7,560㎡を全面調査したものである。それらから検出された遺構は、竪穴住居跡(以後住居跡と記)・竪穴状遺構・大型ピット遺構・掘立柱建物跡・柱穴列遺構・溝状遺構・濠跡などである。またこの他に遺構は確認されなかったが、土師器(平安期)の骨壺が検出された。

本項では、総合的なまとめとして以後記載するが、擬定地としての考察は、鳥海B遺跡の本

文で別に記す。

(a) 竪穴住居跡

検出された各々の残存状態は、開田時の極度な削平とその後の耕作による攪乱などの影響を受け、決して良い状態ではなかったが、それら検出された住居跡の平面形態は、方形・隅丸方形・長方形の3形態に分けられる。以後この3形態を中心として各々の特徴をまとめる。

〈方形を示す住居跡〉 3棟。(3号・5号・6号住居跡)

この形態の住居跡は、規模が小さく、その周壁は、四隅が幾分丸味を示す。また付属施設としての柱穴・貯蔵穴・周溝・カマドについては、バラツキが見られる。柱穴は、遺構の全容が明らかにされない住居跡もあるが、ほぼ1～3個の検出を見る。周溝は伴わない。また遺物の出土が少なく、時期決定に不備な点も多分に伺える住居跡であるが、ほぼ10C後半から11C前半頃の性格を持つ遺構と考えられる。

〈隅丸方形を示す住居跡〉 3棟(1号・4号・7号住居跡)

平面形は、四隅が丸味を示し、その辺は、若干弓状を形成する。規模には各々バラツキがみられる。一辺が約45m程の中規模遺構で、その方位は東南東方向を指す。施設としての貯蔵穴およびカマドを持つ。貯蔵穴はカマドから一定の距離をもって壁際に構築され、カマドは東南壁に確認される。周溝は確認されない。なお煙道・煙出し部を確認した遺構は、7号住居跡(Ch 74住) 1棟だけである。他の2棟は、壁際床面に現地焼成痕を確認したものである。年代決定資料となる遺物は、少なく、あまりはっきりしないが、凡そ10C後半から11C前半頃と推察され、前者形態との時期差はあまりないものと思われる。なお当形態の住居跡は、草間氏によって33年から34年・36年に調査された西根遺跡集落跡の西端部分を構成する遺構と考えられ、同氏分類のA<sub>2</sub>式に類似すると思われる。

〈長方形を示す住居跡〉 2棟(2号・8号住居跡)

平面形が方形から長方形を示す遺構で、草間氏分類のA<sub>3</sub>式に類似する遺構である。但し、金ヶ崎町西根遺跡のそれとは、規模的に幾分異なり、小規模な住居跡である。

当遺構の特徴は次の様である。

- ①平面形が方形から長方形を呈し、張り出しをもたない。
- ②古代期一般にみられるカマドをもたず、床面に炉址的な現地性焼成痕をもつ。
- ③周壁内に、幅約10～15cm程の小規模な周溝をもつ。
- ④柱穴は、周壁の壁際に構築されるものと、遺構のほぼ中央寄りに構築される2様式。
- ⑤出土する遺物は、少ないが、器壁が厚手の素焼的な坏と燈明皿系の小皿坏を出土する他、内黒を施すロクロ使用片・鉄鏃・鉄片・陶磁器片などがみられる。なお8号住居跡においては、柱穴から袈裟襷を施す灰釉陶器の破片が出土している。



— 西根遺跡 —

これら特徴は、古代期一般にみられる住居跡形態と幾分異質のものと考えられる。古代一般にみられるそれは、規模が大きく、周壁のいずれかに「カマド」をもつ。柱穴は、対角線上に構築され、周溝をもつものもたないものがある。その幅は当遺構にみられるそれとは異なり幾分広く形成され周壁内を巡る。張り出し部分を伴わない。これらを総合すると上記のごとく古代一般の住居跡と異質な住居跡であり、当遺構との併行関係は考えられない。また中世以降の住居跡として報告されている各遺跡の住居形態はいずれも方形から長方形の平面プランを呈す遺構であり、その特徴は幾分当遺跡のそれと類似する様相をもつ。

他遺跡の類例として、岩手県内では、隣接する烏海A遺跡の他、玉貫遺跡・丸子館遺跡・花巻古館遺跡・大瀬川遺跡・柳田館遺跡・太田方八丁遺跡の県南各遺跡をはじめとして、県北地区、特に二ノ戸市地区の数遺跡で検出報告されている。また県外の例としては、青森県の富山遺跡・秋田県大館市館コ遺跡・柴平村七館遺跡・比内町谷地中館遺跡等が知られており、これら遺跡の性格は、中世以降の「館跡」に把握される遺跡である。また一部の遺跡は、古代集落跡と共に複合遺跡として調査された遺跡である。これら遺跡の共通点は、いずれも中世から近世にいたる遺跡であり、そのほとんどの類例が館跡関連での検出例で占められることであろう。それら遺構の特徴を各報告書・略報などから抜粋すると次のようになる。

- ①平面形は方形から長方形を呈し、張り出しをもつ遺構ともたない遺構がある。
- ②周壁のいずれにも「カマド」をもたず、床面に炉址的な現地性焼成痕をもつ。
- ③柱穴は、壁際に構築され、各隅には必ず配置されている。(8個以上をもつ)
- ④周壁内に周溝をもつ遺構ともたない遺構がある。
- ⑤古代期一般の住居跡より、規模が小さい。
- ⑥出土遺物は、宋銭・陶磁器を出土するが、土師器は出土しない。
- ⑦時期は、古代に位置づけされた報文はなく、すべて上限鎌倉期、下限近世初期の間に位置づけられている。

これら特徴の数項目は当遺構および金ヶ崎町西根遺跡のそれと一致する。

今まで述べた各特徴から当遺構の年代観を推察すれば、古代一般(平安前期以前)にみられる竪穴住居跡と異質形態を示すことから、それよりも後世の形態をもつ住居跡であることが推察される。また中世以降に把握される各遺構の特徴と比較しても一部を除き違いが明らかである。たとえば出土する遺物である。他の類例遺跡からは土師器に類別される遺物は出土しないが、当遺構においては、器壁が厚く、その色調は褐色を示し、粗雑で糸切底の坏・また燈明皿タイプの小型坏がセットで出土し、陶磁器片と共伴する。この出土状態は、明らかに他の類例遺跡とは異なる性格をもつものと考えられる。遺物から、その性格を推察するならば、当遺構の出土遺物は、平泉無量光院址・観自在王院址・毛越寺址等の各史跡から出土する遺物に類似

点を示すことから、ほぼその時期に位置づけするに可能な遺構と思われる。しかし平泉の各史跡から出土する遺物は、器形また技法が、当遺跡から出土するそれに比して極めて粗製の皿型土師器であり、ロクロ使用のものと同捏ねのものがある。これらは大型の皿型及び鉢型土器と小型の皿型土器の2種類であり、いずれもが破片で多数出土する。これら出土状態から使用目的を推察すれば、一時的な用途に利用されたものと思われ、また夥しい破片の出土量はそれが多数用いられたと共に、その取換えが頻繁に行なわれていたものと推察される。

もし上記のごとく、土師器が平安後期から鎌倉期にかけて、その使用目的が限定され、固定化し、なお製作手法が簡略化される過程があるとすれば、当遺構および遺跡から多数出土する素焼（赤焼土器）の各坏は、平泉の各史跡から出土するそれと比して幾分丁寧な製作手法をもちていることから、それ以前、すなわち平安時代後半頃に位置するものと推測できる。

以上までの考察結果から、当遺構における年代観は、凡そ平安後半頃に位置づけられることになり、他遺跡の類例遺構とは時期的に異質のものとなるが、その特徴にみられる数項目が、当遺構に幾分類似することなどから、一時的な構築形態を示すものではなく、時間的な経過とともに、形態を変化させながら中世以降に継続される一形態と考えられる。

なお遺構の性格については、床面から炉址的な現地性焼成痕・炭化物等が検出されていることから倉庫的な性格をもつものではなく、土座居住居的な住家の可能性を考える。

これまで、当遺構における年代決定・性格等について、他遺跡の類例や出土遺物の一形式的な比較から種々の考察を試みたが、いずれも充分意を尽し得た考察とは思えず、多くの問題が残るものと考えられる。そこで今後行なわれる調査成果に期待するとともにその一資料となればと思い記載したものである。

#### (b) 竪穴状遺構

本遺跡における竪穴状遺構とは、カマド施設・炉址等が確認されていないもので、平面形が方形を呈す竪穴住居様遺構である。

当遺構は2棟検出された。規模は、いずれもほぼ同様であり、その深さは、一般的に住居跡より深く掘り込んで構築している。出土する遺物は、坏・甕類の破片・丸釘等であり、いずれも覆土中からで、基底部からの出土はない。これら遺構の性格は、推積土・深さ・2号遺構の川原石の出土状況等から推察して墓塚的な性格をもつものとも考えられるが、副葬品と目される遺物がまったく出土しないことなどから断定しかねるものである。なお本遺跡の周辺には、西根縦街道古墳群・道場古墳群・五郎屋敷古墳・揚場古墳・桑木田小丸塚等各遺跡が点在する。これら遺跡の中でも、西根縦街道古墳群は、本遺跡の北東約0.3kmに位置し、桑木田小丸塚は西方約0.7kmに位置する。またこれらは、同河岸段丘上に位置するものである。

西根縦街道古墳の年代観は、それら古墳から出土した和同開珎・銚帯金具を基準として、8

世紀初葉から中葉までのものとして把握されている。(伊東信雄氏・伊藤玄三氏「西根縦街道古墳調査報告」)

(c) ピット遺構

前項において、各ピットの一般的な概略を記述した。これらピットは、種々の点で共通性をもつ。この共通性を分類し、当遺跡におけるピットの関連性を考えてみたい。

検出されたピットは、規模面から大型ピット・小型ピット(柱穴状ピット)に類別されるが性格・形式等から3群に大別され、それらは個々のもつ特徴によってさらに幾つかのタイプに細分される。各群の特徴は次の様である。

I 群： 遺構基底面に焼成痕をもつグループ(焼土ピット)である。さらに形状・性質等からI<sub>1</sub>～I<sub>3</sub>タイプに細分される。

I<sub>1</sub> 類 平面形が楕円から不整楕円形を示し、焼成痕が遺構全体におよぶものである。

I<sub>2</sub> 類 平面形が円形から不整楕円形を示し、焼成痕が遺構の一部にみられるもの。

I<sub>3</sub> 類 I<sub>2</sub> 類に類似するが、その状態がブロック状態でみられるもの。

II 群： 焼成痕をもたないピットグループである。形状・性質等からII<sub>1</sub>～II<sub>6</sub>の6タイプに細分される。

II<sub>1</sub> 類 平面形が円形を示し、その径が1 m以上であり、円筒状の掘り込みをもつもの。

II<sub>2</sub> 類 平面形が不整楕円ないし不整形を示し、その長軸が1 m以上であり、断面形態が、すり鉢状から皿状をもつもの。

II<sub>3</sub> 類 平面形が方形を示し、やや深めの舟底状ピットである。

II<sub>4</sub> 類 平面形が溝状土壌に類似する長楕円形をした、浅めの舟底状ピットである。

II<sub>5</sub> 類 平面形が円形ないし楕円形をした、すり鉢状から同筒状を示すピットである。

II<sub>6</sub> 類 平面形が楕円形ないし不整形を示し、基底部分が若干起伏するピットである。

III 群： I・II 2群に分類できない小規模ピットで、柱穴状ピット群である。

各ピットは、それら特徴から上述の様に類別されるが、I<sub>3</sub>・II<sub>6</sub>のそれは、覆土状況・形態等から開田・耕作段階における攪乱ピットと考えられるものである。また他のピット類については、その形状・規模・状態等から幾つかの性格が推察される。I<sub>1</sub> 類ピット(c f 06・Da09 Na 1)は、規模・形態等が、落合 I・堀ノ内・埼玉県水深・秋田県野形等各遺跡から検出された焼土ピットに類似する遺構である。しかし、水深・野形等で把握される土器窯跡とは幾分性質が異なる。当遺跡のそれには、上述遺跡にみられる“廃棄穴”に比定される遺構はみられないが、此らピットは、沢地を望む南端段丘縁上に形成され、沢地(第2濠)から多量の土器が出土する。出土する遺物は、当遺構から検出されたそれと同質の遺物であることから、当沢地は、主観的に“廃棄穴”に代用された場所としての役割をもつものと推察される。これら形態・性格

・施設等を総合すれば、当遺構のもつ意味は、むしろ屋外炉的な意味合いよりも、現地生産としての土器焼成の場、すなわち“野窯”としての役割をもつ遺構と考えられる。なお当遺構から出土する遺物は、2号、8号住居跡から出土するそれと同質器形を示すことから、ほぼ同時期に位置づけられるものと推察される。

I<sub>2</sub>類(Ce 53・Bj77)に分類されるピットは、I<sub>1</sub>類のそれとは幾分性格を別にするものと考えられる。いずれのピットもその形態が皿状を呈し、焼痕は薄く一部に確認できるだけである。

堆積土状況は、焼土粒・炭化物粒を幾分含む土層であり、明らかに人為的な埋設状態を示すことから、焼土・土器等の廃棄穴等にも考えられるが、周辺からは、それに付随すると思われる遺構は検出されない。また遺構自体も浅いことからその根拠に欠けるものと思われる。出土する遺物にはバラツキがあり一定しない。Bj77ピットは、内外面部部に刷毛目を施す土師器甕が1個体分破片で出土する他、坏類はみられない。またCe53ピットからは、1片も出土していない。遺物からそれら年代観をみるとBj77ピットは、I<sub>1</sub>類ピットより一段階古い時期に位置づけられるものと思われる。またCe53ピットについては明らかでない。

II<sub>1</sub>・II<sub>3</sub>類(Bd 77・Cf 71・Cf 03・Cg 03)の各ピットは、規模・形態・埋土状況等から土壙墓としての可能性を考えるものである。土壙墓としての類例は、柳田館・墳館・鈴ヶ沢・力石IIの各県南遺跡にみられるが、いずれも人骨ならびに副葬品・釘・古銭等の遺物を出土する。

しかし当遺構の場合、埋土中からの遺物で占められ、基底面からの出土はない。遺物は、鉄器・坏類であり上述の様な遺物は出土しない。この様に根拠に乏しい推測であるが、前述した各地に散在する古墳群、特に西根縦街道古墳群との関連で、墓壙としての可能性を考えてみたが、あまりはっきり断言できるものではない。出土する遺物は、器肉が薄く、赤褐色あるいは黄橙色を呈し、一見して酸化炎焼成によると解されるもので、内外面に器面調整を施さず、一般に土師質土器・赤褐色土器等に呼称される坏で占められる。これらは、10世紀代に位置づけられる遺物であることから、それら時期に把握される一遺構と思われる。

II<sub>4</sub>類(Cf 09・Cf 56)ピットは、平面形が長楕円形を呈すもので、その形態は、舟底状を呈するCf 09ピットから出土する遺物が、I<sub>1</sub>類のそれと類似することから同時期に位置づけられる遺構と考えられる。しかし性格については、削平など後の攪乱によって上部構造など不明とする点が多いことから明らかでない。またCf56ピットについても同様の事がいえる。

II<sub>2</sub>・II<sub>5</sub>類のピットの性格については、現段階では不明とするところが多い。但しBc12 Na1 No2ピットについては、出土する遺物又周囲の状況から、かつては住居跡の一部であったと思われるが、極度な削平によって、周囲が削りとられ、深く構築された部分が残ったものと考えられる。

III群に分類される柱穴状ピットは、I・II群とは性格を別にするもので、それら一部から柱列

— 西根遺跡 —

跡・建物跡等の検出をみた。柱穴跡については、各々のそれが平行関係に並び、その中に相対応する柱間などが確認されることから建物跡としての可能性を考えるが、検出されない柱穴も多分にみられることから柱列跡として記述したものである。なおこれら遺構の性格・当遺跡との関連については明らかでない。建物跡は、1棟検出されている。それは総柱的な様相をもつ小規模な建物であることから倉庫的な性格をもつものと考えられる。

これらⅢ群に比定されるピットからの出土遺物はなく、時期決定資料としての要因に欠けるために、今のところその年代観は不明である。

以上、類例形態ごとにまとめ、記述したが、これら各ピットからの出土遺物は2様に大別される。それらは、ほとんどが坏類で占められる。その1は、器壁が厚く、糸切り痕を残し、褐色あるいは黄橙色を呈す。その焼成は粗雑で素焼的なもので、同質の小型坏と共伴するグループである。その2は、器壁が薄く、丁寧な糸切り痕を残し、褐色あるいは黄橙色を呈す。その焼成は良好であり幾分固めの胎土をもつ、小型坏とは共伴しないグループである。

当分類は、遺物分類考察のB類に位置づけされる坏類であることから、中～大型の厚手の坏をB<sub>1</sub>類・口径10cm以下の小型の坏をB<sub>2</sub>とし、また特にここでは薄手の坏をB<sub>3</sub>として取扱う。

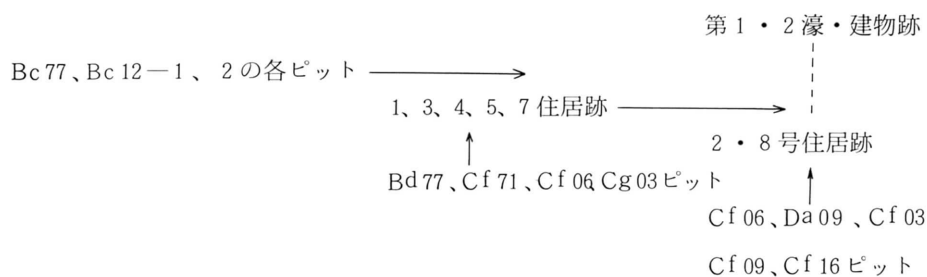
これらB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>類の坏類は、桜井氏の第Ⅱ型式、草間氏の後期土師器に呼称された坏類の範疇に類するものである。平安期になるとこれら坏類は、色調・胎土・焼成・成形技法などに種々の変化をみせながら長期にわたる幅を持つ。これら内容も各地域性によって複雑な様相を呈している。その中で当遺跡におけるB<sub>1</sub>類・B類に比定される坏は、無量光院址・観自在王院址・毛越寺址等の各史跡から出土する坏また皿に幾分類似する様相を呈するが、それより若干丁寧な製作手法を施す坏類である。またB<sub>3</sub>類に比定される坏類は、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>類より幾分丁寧な製作技法をもち、回転糸切りの切離しを呈す。それらは胆沢城出土の土師質土器に必適するが、胆沢城のそれは、須恵器(A類)・黒色土器(C類)等の坏類を共に伴出する。またこれら遺物は、糸切り、篋切り等が出土する様相をもつ。当遺跡のB<sub>3</sub>類においては、A・C類の坏は非常に少なく全て破片で出土する。しかしそれらは、全て回転糸切り無調整の坏片で、篋切り等のものはない。近年特に進められている古代土師器の編年史によれば、むしろ胆沢城のそれは、当遺跡B<sub>1</sub>類に比定される遺物より幾分古い時期差をもつものと思われる。またB<sub>2</sub>類は草間氏編年の後期土師器に類別され、平安初期頃の遺物として把握されているものである。

B<sub>1</sub>・B類の年代観については、堅穴住居跡の項で、歴史的概説をおりませ若干の考察を試みた。その推察が正しいものとするならば、当遺物は、草間氏の年代観との兼合いから平安中期から平安後期に位置づけされる遺物と推察される。

B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>類を出土するピットは、I<sub>1</sub>・II<sub>4</sub>・II<sub>5</sub>類の各ピットであるが、II<sub>5</sub>類に分類されるBc12No1 No2ピットからは出土していない。またB<sub>3</sub>類においては、II<sub>1</sub>・II<sub>3</sub>類各ピットから出土する。なお

これらにあてはまらないI<sub>2</sub>・I<sub>3</sub>・II<sub>6</sub>類の各ピットは、埋土内出土、もしくは攪乱ピット、性格不明のピットとして把握される遺構群である。但し、上述したBg77・Bc12No1No2ピットから出土する土師器甕片は、体部内外面に刷毛目調整を施し、肩部に明瞭な段を残すもので、その口縁はラッパ状に外反する。この器形は、一般に草間氏編年の前期土師器に分類される坏類と共伴して出土する器種である。他の出土遺物がない現状で、その年代観を決定することは、幾分危険であるが、一応B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>類よりも古い時期に位置づくものと推測する。なおこの両ピットは同時期に存在した遺構と考えられる。

なお、各遺構の先後関係については、既述の遺物との関わりをも含めて次のように考えている。但し、資料操作上の不備な点が多いため多くの問題点が残る。この点については今後の資料の増加を待ち、更に検討していきたいと考えている。



#### (d) 濠跡

本遺跡では、2本の自然沢を検出したが、それらが“濠”となるか否かは明確でない。しかし、本編ではその状態での区画また、防備溝その他の性格をもつ、一つの遺構を構成するものと考えられることから<sup>注1</sup>鳥海柵古地図（鳥海B遺跡に掲載）との兼合いも考慮して“濠跡”として記述した。第1濠の概略は前述した通りであるが、昭和33年に草間峻一氏をはじめとする金ヶ崎町教育委員会のもとで調査されたその西方部分にあたるものである。調査成果によると、その部分は明らかに人為的な痕跡が確認できるとして“濠”の意味合いを強めて報告している。しかし、今回調査した西方部分からは、本文で記述したごとく人為的な痕跡は確認されず、単なる自然地形としての意味合いが強く感じられるものである。但し、当濠を境として縦街道までの北側には、遺構の痕跡を確認することが全くできず、その南側、特に第2濠周辺に集中して検出されている。これらを総合して当濠の持つ性格を推察すれば、ある程度の生活領域を決定する区間的な役割を持った巾広い意味での遺構としてとらえることも可能である。しかしながら安倍氏によって築城せられた鳥海柵が当台地に立地していたとするならば、当濠が占める役割は多大なものとなるが、前述したごとくそれ等を構成する一施設と断定するには若干の資料に欠けることから現時点では不明とする。また、南側段丘を構成し、鳥海B遺跡を区画する第2濠は、現在もその痕跡を明瞭に残しており、小規模な水田また水路として利用されてい

— 西根遺跡 —

る。当濠は第1濠同様に自然地形として把握される沢である。しかし、その性格においては、それから、出土する夥しい遺物と火葬骨の詰まった甕また、鳥海B遺跡で検出された空壕等との関連から単なる沢として解釈し得ない性格を持つものと考えられる。

出土する遺物は、何れも覆土内からであるが、その遺物はB<sub>1</sub>・B<sub>3</sub>類に比定されるもので、その器肉は厚く素焼的な坏・小型坏(燈明皿タイプ)等であり、本遺跡の2号(Bj03)住・8号(Dd68)住居・I<sub>1</sub>・II<sub>4</sub>類ピットから出土する遺物と一致するもので占められる。また、鳥海B遺跡の空壕から出土した常滑片は、榑崎氏によって12世紀代との所見を頂いたものであり、8号住居跡、南段丘縁上から出土する灰釉袈裟禪文を施す陶器壺もまた平安後半から鎌倉時代以降にかけて位置づけされているものである。もし、ピット説明の項で記したB<sub>1</sub>・B<sub>3</sub>類に分類される遺物の年代観が平安後半頃からそれ以後に位置づけされるものとするならば、それら遺物は時代的にはあまり大差のないものと推察される。これらの推察は8号住居跡から出土するB<sub>1</sub>・B<sub>3</sub>類に比定される坏類と柱穴出土の灰釉袈裟禪文を施す陶器片が共に出土していることから若干裏付されるものでもある。以上の遺物を出土する当濠の性格を第1濠と比較した場合に明らかに異なる要素をもち、段丘上に各遺構が集中することからも幾分伺えるものと思われる。また、空壕との関連からそれを考えるならば、明らかに当濠を南北の境として台地を東西に区画していることが判別できる。このことは自然地形のまま区画また防備溝としての役割を果たしているものとも想起できることから、いわゆる“濠”としての意味合いを強く感じられるものでもある。上記までの考察を総合して柵を構成する一施設と考えた場合に第1濠より南方すなわち第2濠周縁から第3濠(鳥海B遺跡で記)に至る台地上に位置していたものとも考えられることにもなるが、それを構成すると思われる他遺構が調査地内からは確認されず断定しかねる推測である。また、火葬骨の詰まった甕の出土については、濠内における墓壙の可能性も考えられるが、その周辺からの検出はなくあまり明確ではない。但し、本道跡においては墓壙様のピット等が検出され、また、上述した経筒様の壺等が検出されていることから、当台地におけるそれらの時期に比定されるものであり、直接的には、当濠に対し関連性のないものと考えられ、台地上からの流入品と受けとれるがあまり明確ではない。

以上、第1濠・2濠の性格について幾分述べたが、本遺跡は、鳥海B遺跡を含め、安倍氏によって築城された鳥海柵の擬定地として最有力視されている台地でもあることから、これら濠のもつ意味は大きな位置を占めるものとも考えるが、しかし、上述した様に各濠からは人工的な痕跡は全く確認されず、それと断定するには若干の根拠に欠けるものであった。

なお、当濠を含め各遺構と鳥海柵との関連考察は、鳥海B遺跡の、“鳥海柵擬定地について”の項で記述するため、本項では第1・第2濠の“まとめ”を中心として記したものである。

注1 鳥海柵の地形をしるした地形図であり、大正年未頃のもので大沼慶一郎氏所蔵 (文責・鈴木)

参考文献

- |                                |             |                 |
|--------------------------------|-------------|-----------------|
| (1) 岩手史学研究「岩手県のチャシと烏海柵」        | 草間俊一        | 岩手史学会No.33      |
| (2) 岩手史学研究「金ヶ崎町西根遺跡・第四次調査を中心に」 | 草間俊一        | 岩手史学会           |
| (3) 岩手県金ヶ崎町西根古墳と住居跡            | 伊藤玄三氏・草間俊一他 | 金ヶ崎町教育委員会       |
| (4) 長瀬遺跡群・岩手県文化財調査略報（52年度分）    |             | (財)岩手県埋蔵文化財センター |
| (5) 北上市丸子館調査報告書                | 板橋源         | 北上市教育委員会        |
| (6) 館コ発掘調査報告書 第1次・第2次          | 奥山潤         | 大館市史編さん委員会      |
| (7) 秋田県柴平村小枝指七館遺跡              | 江上波夫他       | 東大出版会           |
| (8) 富山遺跡・永泉寺発掘調査報告書            | 杉山武         | 青森県教育委員会        |
| (9) 二戸市沢内B遺跡報告書                |             | (財)岩手県埋蔵文化財センター |
| (10) 東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ・落合Ⅰ遺跡  |             | 岩手県教育委員会        |
| (11) “ “ “Ⅱ・堀ノ内遺跡              |             | “               |
| (12) 水深遺跡報告書                   |             | 埼玉県遺跡調査会        |
| (13) 柳田館遺跡現説資料                 | 昆野靖・石川長喜    | 岩手県教育委員会文化課     |
| (14) 大瀬川遺跡実測図                  | 昆野靖         | “               |
| (15) 花巻古館遺跡実測図                 | 三上昭         | “               |
| (16) 繫Ⅲ 跡・玉貫遺跡・下平遺跡現説資料        |             | (財)岩手県埋蔵文化財センター |
| (17) 胆沢城跡報告書                   |             | 水沢市教育委員会        |
| (18) おさき山古墳群報告書                |             | 熊本県教育委員会        |

2. 出土遺物について

本遺跡における出土遺物は、量的には多いが遺構に伴うものは少なく、しかも破片例が相当量ある。土器類は器種が少なく、坏型土器と甕型土器とで占められるが、絶対量は圧倒的に前者が多い。他の遺物には、砥石、鉄製品等が若干あり、特異な例として12世紀前半代の年代観を与えられる陶器片が数例ある程度である。また、土師器の甕の中に火葬骨を含む一例もある。

以下については、坏型土器を中心として分類と考察を進め、陶器片、火葬骨を含む土師器甕等については、その特殊性を鑑み特に項を設けることとする。

(1) 坏型土器について

(a) 分類とその結果

坏型土器は、須恵器坏（A類）・土師器坏（C類）と酸化炎焼成で器面調整を施さない赤焼けの坏（B類）・台付坏（D類）等に区分される。実測点数からみた各類の内訳は、A類1点、B類103点、C類3点、D類11点と多様ではあるが点数に差があるため、ここでの分類はB類を中心にして記すこととし、A・C類については特に細分しない。

坏型土器については、第11表の如くである。この表は計測値を中心に記したものであり、器形的な面については、計測値にみられた差よりも微小と判断したため、特に配慮していない。

なお、A・B・Cの各類の詳細については、烏海B遺跡を参照されたい。



第11表 西根遺跡出土坯型土器分類一覧表

( ) は推定計測値

遺構名	実測番号	写真番号	写真版 ページ	種類 A・B・C	切離し 技法	各部位計測値と比						その他 (分類)
						口径 cm	底径 cm	器高 cm	口径 底径	口径 器高	θ°	
Ba71 竪穴住居跡	1	1	7 P	C	回転糸切 無調整	(15.2)	4.9	4.8	3.1	3.2	43	
	2	2	7 P	A	"	(13.5)	(6.4)	5.5	2.1	2.4	50	
Bj 03 竪穴住居跡	3	/	/	B	"	(12.8)	5.4	5.0	2.4	2.6	54	B <sub>1</sub>
	4	/	/	B	"	(15.8)	(7.0)	5.5	2.3	2.9	52	(B <sub>1</sub> )
	5	/	/	B	"	(13.6)	(5.8)	4.9	2.3	2.8	52	(B <sub>1</sub> )
	6	4	7 P	C	"	(13.2)	(5.0)	4.9	2.6	2.7	51	
Cc 06 竪穴住居跡	7	/	/	B	"	(12.0)	(5.4)	4.1	2.2	2.9	51	(B <sub>1</sub> )
	8	/	/	B	"	(13.3)	(5.2)	3.8	1.8	2.4	43	(B <sub>1</sub> )
	9	8	7 P	C	"	(13.8)	(5.0)	4.8	2.8	2.9	48	
Cf 03 ビット	10	9	7 P	B	"	(14.8)	(5.7)	5.2	2.6	2.8	50	(B <sub>1</sub> )
	11	10	7 P	B	"	8.5	3.9	2.0	2.2	4.3	41	歪みあり、 完形品 B <sub>2</sub>
Cf 06 ビット	12	/	/	B	"	(19.1)	(5.4)	2.5	1.7	3.7	54	(B <sub>2</sub> )
Cf 09 ビット	13	11	8 P	B	"	(9.6)	(4.3)	3.4	2.2	2.7	42	(B <sub>2</sub> )
	14	/	/	B	"	(14.4)	(5.4)	5.0	2.7	2.9	49	(B <sub>1</sub> )
	15	12	8 P	B	不明	(9.4)	(5.9)	2.4	1.6	3.9	38	(B <sub>2</sub> )
	16	/	/	B	回転糸切 無調整	(9.3)	(5.1)	2.6	1.8	3.6	57	底部 1/3 (B <sub>2</sub> )
	17	13	8 P	B	"	8.8	4.0	2.5	2.2	3.5	49	完形、歪みあり B <sub>2</sub>
Cf 50 ビット	18	14	8 P	B	回転糸切	(14.4)	(5.9)	4.6	2.4	3.1	49	(B <sub>1</sub> )
Ch74 竪穴住居跡	19	15	8 P	B	"	(9.6)	(7.6)	2.5	1.3	3.8	65	(B <sub>2</sub> )
	20	/	/	B	回転糸切 無調整	(13.9)	(7.5)	3.5	1.9	4.0	49	(B <sub>1</sub> )
	21	/	/	B	"	(15.7)	(8.4)	4.6	1.9	3.4	52	(B <sub>1</sub> )
	22	/	/	B	"	(13.6)	(6.0)	5.1	2.3	2.7	51	(B <sub>1</sub> )
Cブロック	23	19	9 P	B	回転糸切	(12.6)	(5.1)	4.9	2.5	2.6	56	(B <sub>1</sub> )
トレンチ 礫層上	24	66	14 P	B	"	(15.1)	(6.4)	5.8	2.4	2.6	(55)	底部欠失 (B <sub>1</sub> )
Da 09 焼土ビット	25	20	9 P	B	回転糸切 無調整	(9.2)	4.5	2.2	2.0	4.2	45	B <sub>2</sub>
	26	21	9 P	B	"	(14.4)	(5.9)	4.6	2.4	3.1	50	(B <sub>1</sub> )
	27	22	9 P	B	不明	(9.2)	(5.5)	2.5	1.9	3.7	55	(B <sub>2</sub> )
	28	23	9 P	B	回転糸切 無調整	(9.3)	4.7	2.0	2.0	4.7	44	B <sub>2</sub>
南段丘 上端	29	26	9 P	B	回転糸切	(14.8)	(6.1)	5.0	2.4	3.0	50	(B <sub>1</sub> )
南段丘下	30	/	/	B	回転糸切 無調整	(15.2)	(7.6)	4.9	2.0	3.1	53	(B <sub>1</sub> )
	31	27	9 P	B	"	(15.1)	(5.8)	5.0	2.6	3.0	49	(B <sub>1</sub> )

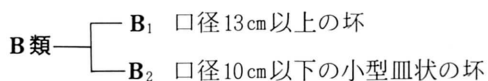
遺構名	実測番号	写真番号	写真版 I 版 ジ	種類 A・B・C	切離し 技 法	各 部 位 計 測 値 と 比						そ の 他 (分類)
						口径 cm	底径 cm	器高 cm	口径 底径	口径 器高	$\theta^\circ$	
南段丘下	32	28	9 P	B	不明	(9.8)	5.0	2.3	2.0	4.3	46	B <sub>2</sub>
	33	29	10 P	B	"	(15.6)	6.2	4.5	2.5	3.5	45	B <sub>1</sub>
	34	30	10 P	B	"	(14.2)	5.4	4.6	2.6	3.1	48	B <sub>1</sub>
	35	31	10 P	B	回転系切	(15.9)	5.7	4.4	2.8	3.6	43	B <sub>1</sub>
	36	32	10 P	B	回転系切 無調整	(9.9)	4.2	2.5	2.4	4.0	43	B <sub>2</sub>
	37	/	/	B	"	(9.6)	5.0	2.2	1.9	4.4	45	B <sub>2</sub>
	38	33	10 P	B	"	(9.6)	4.4	2.2	2.2	4.4	33	B <sub>2</sub>
	39	34	10 P	B	不明	(9.0)	3.6	1.8	2.5	5.0	36	B <sub>2</sub>
	40	/	/	B	回転系切 無調整	(14.6)	6.4	4.3	2.3	3.4	47	B <sub>1</sub>
	41	/	/	B	"	(15.4)	7.0	4.5	2.2	3.4	49	B <sub>1</sub>
	42	/	/	B	不明	(14.2)	6.2	4.8	2.3	3.0	51	B <sub>1</sub>
	43	35	10 P	B	回転系切 無調整	15.8	5.8	5.0	2.7	3.2	47	B <sub>1</sub>
	44	/	/	B	"	(14.6)	5.8	4.5	2.5	3.2	47	B <sub>1</sub>
	45	/	/	B	"	14.5	5.4	4.8	2.7	3.0	46	B <sub>1</sub>
	46	/	/	B	回転系切	(15.2)	7.4	5.5	2.1	2.8	56	B <sub>1</sub>
	47	/	/	B	"	(9.4)	(4.6)	2.5	2.0	3.8	46	(B <sub>2</sub> )
	48	/	/	B	回転系切 無調整	(14.8)	6.0	6.2	2.5	2.4	55	B <sub>1</sub>
	49	/	/	B	"	(9.6)	5.0	2.3	1.9	4.2	45	B <sub>2</sub>
	50	/	/	B	不明	(9.2)	4.6	2.1	2.0	4.4	42	B <sub>2</sub>
	51	/	/	B	回転系切 無調整	(14.6)	6.4	5.0	2.3	2.9	50	B <sub>1</sub>
	52	36	10 P	B	"	(13.0)	(5.6)	4.6	2.3	2.8	52	(B <sub>1</sub> )
	53	37	10 P	B	"	(10.1)	(5.1)	2.4	2.0	4.2	47	(B <sub>2</sub> )
	54	/	/	B	"	(14.2)	(5.6)	4.9	2.5	2.9	51	(B <sub>1</sub> )
	55	38	10 P	B	回転系切	(9.5)	(5.2)	2.3	1.9	4.1	48	(B <sub>2</sub> )
	56	54	13 P	B	"	(9.4)	(4.8)	2.0	2.0	4.7	51	(B <sub>2</sub> )
	57	/	/	B	"	(10.3)	(6.1)	2.7	2.1	4.8	53	(B <sub>2</sub> )
	58	39	11 P	B	"	(9.9)	(5.1)	2.9	1.9	3.4	47	(B <sub>2</sub> )
	59	40	11 P	B	"	(9.4)	(4.7)	2.0	2.0	4.7	44	(B <sub>2</sub> )
	60	41	11 P	B	"	(9.6)	(4.8)	2.6	2.0	3.7	41	(B <sub>2</sub> )
	61	42	11 P	B	"	(9.2)	(5.7)	3.6	1.6	2.6	59	(B <sub>2</sub> )
	62	43	11 P	B	不明	9.8	4.3	2.3	2.3	4.3	41	B <sub>2</sub>
	63	44	11 P	B	回転系切 無調整	9.4	3.9	2.1	2.4	4.5	38	歪みあり B <sub>2</sub>

— 西根遺跡 —

遺構名	実測番号	写真番号	写真ページ	種類 A・B・C	切離し 技法	各部位計測値と比					その他 (分類)	
						口径 cm	底径 cm	器高 cm	口径 / 底径	口径 / 器高		$\theta^\circ$
南段丘下	64			B	不明	(8.8)	(5.3)	(2.4)	1.7	3.7	(58)	底部欠失 (B <sub>2</sub> )
	65			B	"	(14.6)	5.6	4.5	2.6	3.2	45	B <sub>1</sub>
	66			B	"	(14.2)	(6.6)	5.3	2.2	2.7	56	(B <sub>1</sub> )
	67			B	回転糸切	(13.6)	(6.1)	4.9	2.2	2.8	49	(B <sub>1</sub> )
	68	45	11P	B	"	9.0	4.2	2.3	2.1	3.9	45	B <sub>2</sub>
	69	46	11P	B	回転糸切 無調整	9.0	3.9	2.2	2.3	4.1	41	B <sub>2</sub>
	70	47	11P	B	"	14.2	5.7	4.5	2.5	3.2	49	B <sub>1</sub>
	71	48	11P	B	回転糸切	(9.0)	4.2	2.5	2.1	3.6	46	B <sub>2</sub>
西側段丘	72	55	13P	B	不明	155	6.2	5.1	2.4	3.0	51	B <sub>1</sub>
	73	56	13P	B	回転糸切	(15.4)	5.8	4.4	2.7	3.5	44	B <sub>1</sub>
同下部	74			B	"	13.8	5.0	4.4	2.8	3.1	45	B <sub>1</sub>
	75			B	"	(15.4)	5.4	6.0	2.9	2.6	52	B <sub>1</sub>
	76			B	"	(14.8)	5.8	4.8	2.1	3.1	48	B <sub>1</sub>
	77			B	不明	(14.6)	5.6	4.4	2.6	3.3	45	B <sub>1</sub>
	78			B	回転糸切	(16.0)	7.0	5.5	2.3	2.9	52	B <sub>1</sub>
	79	57	13P	B	不明	(14.6)	6.2	4.5	2.4	3.2	49	B <sub>1</sub>
	80	58	13P	B	回転糸切	(14.2)	(5.2)	4.7	2.7	3.0	48	B <sub>1</sub>
	81			B	回転糸切 無調整	(14.7)	5.2	5.1	2.8	2.8	48	(B <sub>1</sub> )
	82	59	13P	B	不明	(15.2)	6.4	4.5	2.4	3.4	46	B <sub>1</sub>
	83	60	13P	B	回転糸切 無調整	(15.0)	5.8	5.1	2.6	3.1	50	B <sub>1</sub>
	84			B	不明	(14.8)	6.6	4.5	2.2	3.3	49	B <sub>1</sub>
	85	61	13P	B	回転糸切 無調整	(14.8)	5.8	5.1	2.6	2.9	50	B <sub>1</sub>
	86	62	13P	B	不明	(14.0)	6.2	4.6	2.3	3.0	51	B <sub>1</sub>
	87	63	13P	B	"	(14.8)	(5.4)	4.1	2.7	3.6	43	B <sub>1</sub>
	88			B	回転糸切	(9.5)	(4.2)	1.8	2.3	5.3	38	(B <sub>2</sub> )
	89			B	"	(8.0)	4.0	1.5	2.0	5.3	38	B <sub>2</sub>
	90			B	"	(8.3)	4.1	1.9	2.0	4.4	46	B <sub>2</sub>
	91			B	"	(9.8)	4.2	2.3	2.3	4.3	39	B <sub>2</sub>
92			B	"	(9.3)	(4.2)	1.9	2.2	4.9	37	(B <sub>2</sub> )	
93			B	不明	(8.5)	4.7	1.5	1.8	5.7	39	B <sub>2</sub>	
94			B	回転糸切 無調整	(8.5)	4.3	2.0	2.0	4.3	44	B <sub>2</sub>	
95			B	不明	(9.2)	(4.6)	2.4	2.0	3.9	47	(B <sub>2</sub> )	

遺構名	実測番号	写真番号	写ページ	種類 A・B・C	切離し 技法	各部位計測値と比					その他 (分類)	
						口径 cm	底径 cm	器高 cm	口径/ 底径	口径/ 器高		$\theta^\circ$
同下部	96			B	回転糸切 無調整	(9.5)	4.4	2.3	2.2	4.1	43	B <sub>2</sub>
	97			B	不明	(7.6)	(4.5)	1.7	1.7	4.5	47	(B <sub>2</sub> )
表採	98	67	14 P	B	回転糸切 無調整	(9.0)	4.2	2.2	2.1	4.1	45	B <sub>2</sub>
	99	68	14 P	B	不明	(8.8)	4.4	1.9	2.0	4.6	44	B <sub>2</sub>
	100			B	"	(14.5)	5.2	4.5	2.8	3.2	46	B <sub>1</sub>
	101			B	回転糸切 無調整	(15.1)	5.8	4.7	2.6	3.2	47	B <sub>1</sub>
	102			B	不明	14.6	6.0	4.4	2.4	3.3	46	B <sub>1</sub>
	103	69	14 P	B	"	(15.4)	7.4	5.1	2.1	3.0	52	B <sub>1</sub>
	不明	104			B	回転糸切	(15.4)	(7.4)	5.3	2.1	2.9	53
105		72	14 P	B	"	(9.5)	(5.0)	2.4	1.9	4.0	49	B <sub>2</sub>
C <sub>1</sub> 溝	106	71	14 P	B	"	9.4	4.5	2.2	2.1	4.3	33	歪みあり B <sub>2</sub>

以上、106点についてであるが、その具体的な分類結果の詳細はB類についてのみ記すこととする。B類は、端的に下記の二群に区分される。



B<sub>1</sub>類は、数点の例外を除いて口径が13cm以上で、器高4.3～6.0cm内に分布する一群の坏である。全体として器肉が厚く軟質なものが多い。B<sub>2</sub>類に比して相対的に口径/底径値が大きく、口径/器高値は小さい。口縁は外傾・外反と一定しないが、強く外反するものはなく、傾向として外傾気味の方が多い。また、B<sub>1</sub>類は、分類上では鳥海B遺跡のB-I類との関わりから、口径13cm以上のものとしたが、実質的には14～15cm台のものが大半であり、13cm前後の例は少ない。

B<sub>2</sub>類は、坏というよりは皿型に近い形状のものであり、反転復元のものをも含めて口径10cm前後以下に位置づけられる一群である。B<sub>1</sub>類に比して大きな「口径:器高」値は特に際立った差異であり、口径に比して器高が低目であることを示している。器形的には、Ch 74 住居跡出土No.14のように有段、丸底風の異形を呈す例もあるが、他は大旨類似したものである。No.14に類似した坏の破片は、C f 09 ピットにも一例をみるが、B<sub>2</sub>を細分化するほどの量ではない。焼成については、B<sub>1</sub>と同様に軟質のものが多数であるが、かなり硬質な例も数点ある。

台付坏については、特に一覧表に提示しないが、内黒のものとそうでないもの、即ちC類とB類の各々の範疇にかかる部分にあることから、前者をD-c類、後者をD-b類と区分する

程度に留める。

注 A、B、Cの各類の詳細については鳥海B遺跡を参照されたい。

(b) まとめ(坏型土器について)

B類の坏は、隣接する鳥海A・B<sup>注1</sup>、あるいは西根遺跡第23号住居跡等<sup>注2</sup>にみられるものと同類の坏である。何れの遺跡にあっても、本遺跡のB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>とした坏類に近い数値を示す二者を出土しており、台付坏D類と共にある一時期のセットを構成するものと思われる。B類とD類類似の坏が伴出する例は、他に北上市国見山極楽寺遺跡・胆沢城等にもみられ、また県外<sup>注3</sup>においては多賀城政庁跡・植田前遺跡等<sup>注4</sup>が挙げられるが、特にB<sub>2</sub>類的なものとD-b類的なものとの伴出が取り上げられよう。B<sub>2</sub>類的な坏類そのものは、上記の遺跡の他に北上市更木町大竹廃寺<sup>注5</sup>・紫波町樋爪館<sup>注6</sup>・平泉館<sup>注7</sup>・無量光院跡<sup>注8</sup>・観自在王院跡<sup>注9</sup>・毛越寺跡<sup>注9</sup>・毛越A遺跡等<sup>注9</sup>に出土例をみることができる。この種の坏は所謂燈明皿と称されるタイプであり、多賀城研10類-bとされた坏群に比定され、具体的には文治5年(1189年)焼失の記事がみられる平泉館との関係から、12c代を中心とする<sup>注10</sup>とされている。しかし、前述の遺跡群におけるB<sub>2</sub>類的な坏類の特徴は必ずしも同様ではない。例えば、本遺跡B<sub>2</sub>類と平泉町毛越A遺跡出土の小型坏とを比較してみた場合、後者は白橙色を呈しており、B<sub>2</sub>よりは更に軟質であり、切離しは殆んど判明しない。また、歪んだ稚拙な作りものも多く、胎土の相違はともかくとしても、成形・色調等で異なるものである。同時に鳥海B遺跡と本遺跡との比較でみた場合、前者における小型B類(鳥海B・B-II)は、口径10cm以下の例はなく、後者では10cm以下の坏が主流となっている。この場合は、共存遺物のあり方からみて、小型化するB類の変遷が想起されることでもある。従って、平泉周辺に多くみられる燈明皿タイプの坏類と本遺跡B<sub>2</sub>類あるいは鳥海BのB-II類が同時期に併行するとみずには難点がある。但し、こういう中であっても前述の極楽寺・大竹廃寺等が安倍氏以降の藤原文化の先鞭役を果たしたこと、あるいは中尊寺の寺領を近辺に配し、12c前半の年代観を与えられる陶器片を出土した鳥海B・西根遺跡、また「清衡四男清網の嫡男俊衡居住す」と伝えられる樋爪館等に出土するB<sub>2</sub>類類似の坏は、各々の在地における土器生産、消費の場が平泉文化圏のある一時期を占めていたであろうことは推察されよう。と同時に、全体として甕型土器が少なく、坏が単一化され、しかも遺構に伴う遺物が少ないという本遺跡内での傾向は、土器様式の変化のみならず、家屋構造にも関わる変化が一般化してきたこと、即ち生活様式そのものの変化が顕著になってきた頃であろうことを示唆する。

一方、B<sub>1</sub>類はB<sub>2</sub>類と共にこの段階にあっては、所謂須恵系土器(多賀城研10類-a)にも比定され得るものであろう。その一証左として、B類と認知される数千の破片をも含めたすべてに黒斑を有する例が一点もないことが挙げられよう。また、A・C類が殆んど消滅した一時期のあり方としてみれば、同類の範疇と捉えることも大過ないといえよう。しかし、器形が単

一化したB<sub>1</sub>類は、大旨器肉が厚く軟質のものであり、硬度の面からみて必ずしもC類より硬いとはいえない。また、東北北部におけるB類類似の坏の始源は、須恵系土器のそれと同一とはいえない一面もあり、当初から酸火炎焼成B類の生産を目的とした工人の集団があるとするならば、須恵系土器とは異った系譜からの派生もあり得るということを付記しておく。

A類の坏は、Ba 71 竪穴住居跡に一点みられるだけであり、本集落内の上限に近い頃に位置するものであろうが、遺構そのものは後世の溝によって著しく破壊されており確定するものではない。回転糸切り調整による唯一点のA類は、短絡的にみれば多賀城研の9類に入るものであろう。

C類は、Ba 71・Cc 06 竪穴住居跡等に出土するが、何れも回転糸切り無調整の坏である。隣接する鳥海B遺跡の段階では、C類がまだ確実にセットとして残っていたと思われるが、本遺跡にあっても、遺構の一部はそれに近い頃に存在していたものと窺えよう。

注1 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 IX分冊

注2 金ヶ崎町西根竪穴住居跡第三次調査報告、岩手県教委・金ヶ崎町 昭和42年11月

注3 北上市史第一巻、原始・古代編、北上市 昭和43年3月

注4 加藤道男、植田前遺跡、東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査概報（白石市柴田郡村田町地区）宮城県文化財調査報告書第25集 昭和47年3月

注5 注3に同じ

注6 平泉遺跡総合調査、第1期第1次平泉館遺跡発掘調査概報、平泉町、平泉町教育委員会、平泉遺跡調査会 昭和46年3月

注7 文化財保護委員会「無量光院跡」 昭和29年

注8 藤島玄治郎編「平泉一毛越寺と観自在王院の研究」 昭和36年

注9 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 第三分冊

注10 岡田茂弘、桑原滋郎「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」考古学雑誌

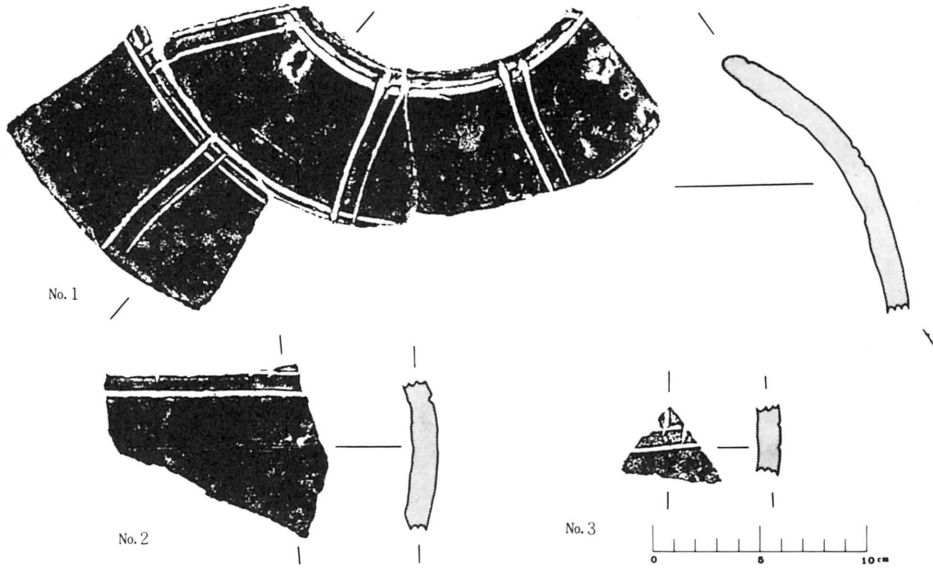
## (2) 陶器片について 第25図

※ (Cc 53ピット出土No 140)

本遺跡では、鳥海B遺跡出土の灰釉袈裟襷文壺と目される破片と同様の文様を呈する遺物が2点出土している。一点は、Dd 68 竪穴住居跡内No 6 ピットの埋土中から、またもう一点は同遺構に近い南側段丘からの出土である。前者の破片は釉の様子や色調・胎土から察するに、鳥海B遺跡Cc 53 ピット内出土の灰釉袈裟襷文壺片のそれに酷似するものである。従って、この分については鳥海B遺跡の項を参照して頂くこととし、ここでは後者のみについての詳細を記す。その後で、袈裟襷文壺の概要と本遺跡との関わりについて述べたい。

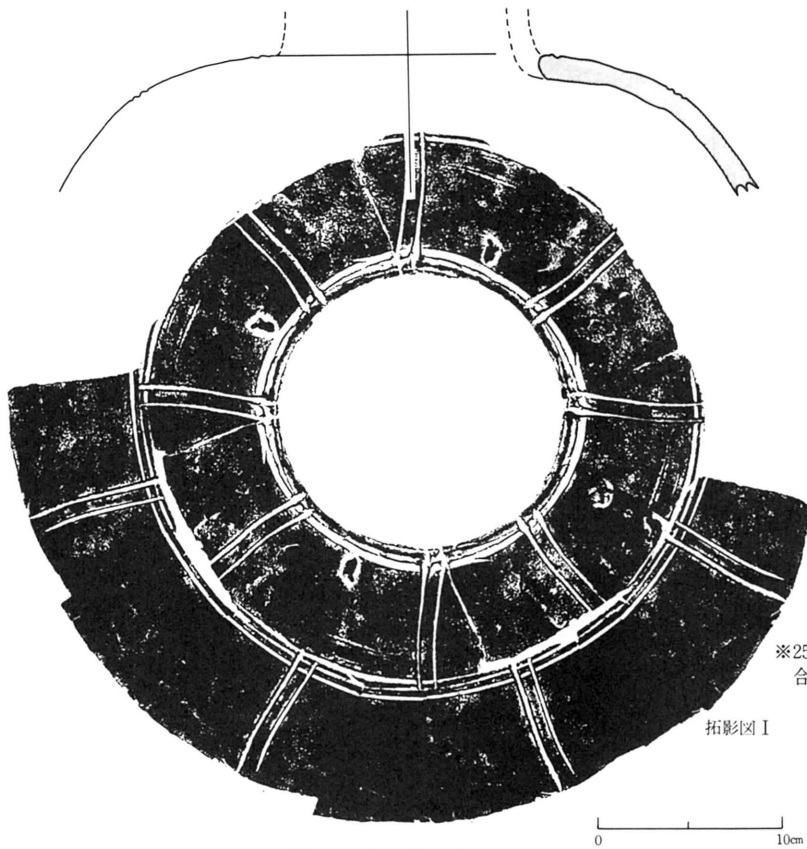
No. 1 は、南段丘出土というものの、正確な出土地点や層位の詳細については、残念ながら不明な部分のあることは否めない。

肩部から胴部にかけての破片であり、頸部との接合部より下方の部分にあたる。断面から察する肩部の曲がりには比較的大型の壺を連想させるに充分なものである。肩の張った、ふくらみ



第25-1図 陶器類実測図

No. 1・2 南段丘上 No. 3 Dd68堅穴住居跡出土



※25-1図, No. 1を基にして合成復元したものである。

拓影図I

第25-2図 復元拓影実測図

のある胴形を呈している。内面には巻上げ痕をそのまま残し、各所には指によると思われる圧痕がみられ、その分だけ器面の凹凸が目立つ。また、指あるいはキメの細かい刷毛のようなものによると思われる調整痕が横位方向に観察される。

断面にみる胎土は灰白色を呈し、砂質に富んだ素地である。この様子は、鳥海B遺跡出土の常滑片とは明らかに異っている。

外面にあっては、巻上げの痕跡はみられず、叩き締めて押印した様子もない。頸部近くから肩部にかけて半截竹管による二段の平行沈線があり、その間に縦方向の沈線が後から配されている。胴部にかけては、更に縦方向の沈線がみられることから、本来的には三段の平行沈線が繞るものなのであろう。このことから、Na 2の破片は恐らくその下方にあたる部分と推察される。端的にいうならば、二条の半截竹管を三段に繞らした間を千鳥に縦線を配す所謂袈裟襷文の作風なのである。Na 3は、横位に繞る平行沈線のあり方が必ずしもその条件のすべてに合致するというわけでもないが、同類の範疇としてみることは大過ないであろう。

釉は、黄白色を呈すが、灰白色の胎土に消されてやや暗く感じる。釉の範囲は、頸部との境界より肩部にかけて、即ち二段目の平行沈線部分の周辺までである。それより下方にあっては断面にみる胎土より灰色がかった地肌である。尚、推定頸径は14cm位と思われ、器肉の厚さは11mm前後である。また、一段目の平行沈線の下部に2ヶ所、二段目の直上は1ヶ所、計3ヶ所の突起部分が観察される。拓影図の左寄り部分と右端部に位置するものであるが、これらは把手が付いていた痕跡と思われる。左右の各々の点の延張線はほぼ直角に交錯することから、対角線の反対側にも同様の把手があったものであろう。

この種の作風を持つ遺品は、近年、破片ながらも渥美半島の古窯跡から出土しており、これらの製作地について、手懸かりを与えるものである。<sup>注1</sup> 代表的な遺品例としては、北は岩手県西磐井郡平泉町中尊寺金鶏山出土の線刻文壺から、南は愛媛県松山市石手寺出土の灰釉袈裟襷文壺<sup>注2</sup>まで知られている。何れも経塚関連の出土であり、写経などを納める経筒の外容器とされる。<sup>注3</sup> この種の遺品は経塚用に特別に作られたものと解され、しかも製作年代が限られているようである。<sup>注4</sup> 同様の文様を有する他の遺品としては、愛知県渥美郡田原町大久保出土の灰釉袈裟襷文壺<sup>注5</sup>、愛知県蔵の袈裟襷文四足壺、三重県一志郡漆経塚出土の経筒蓋等が挙げられ、前記二点を含めて何れも12世紀代の作とされている。<sup>注6</sup>

本遺跡出土のNa 1は、器形的には胴の張り具合や大きさからみて、中尊寺金鶏山出土の壺に類似する大型のものであろうが、縦方向の沈線の配置は数的にみれば12世紀前半の作とされる田原町大久保出土の壺にも近い。

元来、平安期から鎌倉期にかけての経塚からは、外容器としての各種壺類が出土する例を多くみるが、その多くは常滑風のものであり、袈裟襷文壺の類は稀であるという。このような特



— 西根遺跡 —

殊な遺品が、何故に本遺跡あるいは隣接する鳥海B遺跡から出土したのかという点については甚だ興味のあるところであるが、残念ながら両遺跡にあって直接的に経塚そのものに関わると思われる遺構、またはそれに関連する遺構の存在を確定するだけの事実には欠けることは否めない。しかし、巨視的にみて、本遺跡内の一部遺構や周辺との関係、立地条件等を勘案してみれば、古来より宗教的な遺構の存在の可能性を想起させるに十分な要因は多分にみられるのである。

即ち、(1) 本遺跡の存在する金ヶ崎段丘面上にあって、隣接する一帯は奈良～平安時代の集落跡が確認されており、通称縦街道付近には西根古墳群が存在する。

(2) 本遺跡内南段丘の斜面下部より、平安時代と思われる火葬骨埋納甕が発見されている。この位置は、袈裟禪文壺片が出土した地点にも近い。

(3) 本遺跡あるいは鳥海B遺跡は、真西方向彼方に経塚山を仰ぎ、胆沢川を南東にみる金ヶ崎段丘面上に位置している。鳥海B遺跡の眼下には、胆沢川によって開析された河岸低地が広がる。尚、胆沢川は東方に至って南流する北上川に合流する。

(4) 本遺跡、鳥海B遺跡より南東約1.5km付近には、胆沢川を挟む低位段丘面上に胆沢城跡がある。これらの遺跡はそれを俯見する位置にある。胆沢城付近には古代の駅路が走り「延喜式」記載の駅家(胆沢駅)があるとされ、付近には掃部長者屋敷跡も伝えられる。

(5) 北北東約10kmの地点に陸奥国定額寺とされる極楽寺が存在する。

(6) 本遺跡、鳥海B遺跡は、安倍氏の城柵、鳥海柵の擬定地内に存す。

(7) 金ヶ崎町大字三ヶ尻は、中尊寺の寺領とされる。<sup>注7</sup>

等が挙げられる。

(1)については、特に西根古墳との関わりに拠るものである。この遺跡は西根の字原添下、鳥海より始まり、二の宮、壇の坂、明灯、前谷地、道場に至る胆沢川、黒沢川に沿う一連の段丘面一帯にわたる古墳群である。このことは同一の段丘面上にあってかなり広い範囲にわたる霊<sup>注8</sup>地の存在を想起させるものであり、全国的にみても古墳上に営まれた経塚の例も少なくはない。<sup>注9</sup>

(2)は、一族の墳墓の他に、例えば追善供養の一環とする何らかの宗教的遺構が営まれる可能性をも示唆する。また、(3)については、完全に合致すると断定できるものではないが、経塚が営まれる立地条件をある程度ながら満たしているともいえよう。<sup>注10</sup>(4)については、(3)にも関わることでもあるが、墳墓造営の選地条件の一要因にも成り得る。<sup>注11</sup>(5)、(6)については、両者のつながりから、当時の仏教思想を背景とする奥六郡統治の片鱗を窺わせる。これは清原氏を経て、藤原氏に至って築かれた平泉文化の導入を容易ならしめた、いわば先鞭役ともいえよう。即ち、平泉にみられた天台宗を中心とする高い水準の仏教文化は、12世紀代に忽然と出現したのでは

なく、前述の如くその基盤となる先行文化が存在していたのであり、(7)との関わりから、<sup>注13</sup>当遺跡も同様の下地を背景としながら特に藤原氏の代になって強い影響力を受けたものであろう。このことは、極楽寺中心の文化が平泉に吸収され、それが平泉藤原氏の外護施入の形で再び流布してきたことでもあり、本遺跡や、鳥海B遺跡に灰釉袈裟禪文や常滑等の遺品が存在する所以とも考える。

経塚の建立そのものが、当時の仏教思想から派生する遺構であることは周知の事実である。従って、前述のような背景を有する限りは、本遺跡出土No.1は、平泉からの施入品であるということだけでなく、袈裟禪文壺そのものが持つ特殊性からみて、他用途への転用とは考えられず、明らかに宗教的な遺構との関わりで捉えるのが妥当であろう。これは、中尊寺建立の趣旨が天徳の高きに感じ、国恩の深きに奉じることの他に「併せて官軍と夷慮たるを問はず事に死する者の跡を弔い、冤霊をして淨刹に導かしめん」と述べられていることにも通じるものであろう。「死する者」とは、前九年、後三年の役の戦没者であることはいうまでもない。<sup>注14</sup>

県内において、常滑・渥美産の遺品の出土例は、第12表の如く多い。しかも、その大半は平安期のもので、経塚出土として伝えられるものが多い。しかし、袈裟禪文を有するものとなると、その例は少なく、まさに特殊製品としての性格を如実に物語る。県内において先にも記した通り、平泉町中尊寺、また破片であるが本遺跡と鳥海B遺跡等の僅か三ヶ所にその例をみるだけである。それでも、東北地方に於ける他県からは、今の所、出土例の報告はなく、相対的には多いといわざるを得ない。この傾向は、数量的には異なるが、常滑のものにあってもほぼ同様といえる。そういう中において、袈裟禪文から三筋壺、あるいは日常雑器に至るまでの出土例からみて、県内には豊富な器種と相当量の遺品が搬入されたものと解される。<sup>注15</sup>このことから、平泉藤原氏の強力な権勢の一端を垣間みることができよう。時期的にみても、袈裟禪文そのものが12世紀代として捉えられることから、前述のようにNo.1、2もまた、平泉文化圏の所産とみることには大過ないことといえる。出土する遺物の中に、平泉毛越寺周辺の遺跡にみられる所謂燈明皿タイプに類似した小型の坏類が多く含まれるのも、その一つの証であろう。搬入の時期については、中尊寺一山の造営が12世紀前半期であることから、製作年代にかなり近い頃が考えられる。ただ、袈裟禪文を含めた壺類が、平泉藤原氏の外護施入とするものの、現段階では、渥美・知多両半島からいかなる経路でもって陸奥国に運ばれたかについては特に触れない。

何れにしろ、以上のようなことから、本遺跡は安倍氏以降であっても存続したものであり、下限については、少なくとも平泉藤原氏に併行する時期にまで及ぶものであろう。この時期に伴う遺構は、前段でも記した通り、経塚関係のものとして営まれたと断言し得る例はない。しかし、Dd68竪穴住居跡内ピットから出土した袈裟禪文様の破片例を鑑みると、本遺跡内やその

— 西根遺跡 —

周辺にあって、この時期に近い集落跡の存在が想起され、また経塚と断定しなくとも、本来的には何らかの形で宗教的な遺構が営まれていたものと推察される。埴濠によって独立した占地に位置する鳥海B遺跡にあってはなおさらのこと、その限定された範囲内に同様の遺構が存在していたものであろう。それらが、後世の整地作業等によって著しく破壊され、現在に至ったと考えられる。西根古墳群が注8の如くな状態であったように、本遺跡・鳥海B遺跡にあって同様である。本遺跡の出土遺物の多くが、住居跡を含めた遺構内より堀を形成する自然地形段丘縁周辺やその崖下に集中しているのもそのためであり、恐らく削平した土砂で濠の一部を埋めたものであろうと推される。

尚、鳥海B・西根遺跡出土の陶器片については、名古屋大学、榑崎彰一氏によりNo.1・2・3・140は所謂袈裟禪文壺の破片で12世紀前半代、No.143は12世紀中～後半の年代観を得ている。前者は渥美窯跡からの産であり、渥美三筋文陶器編年図中のII期に位置づけられるものである。<sup>注16</sup>この種の陶器類は、本来的には同時期に製作された三筋壺の変形とみられるが、文様に限って言えば渥美産のものに特定されているようである。時期が降るに従い蓮弁文と組み合せて文様が変わっていくが、それはIV～V期とした頃に相当する。No.140は、最下段の刻線と思われ、少なくとも蓮弁文が入る以前のものであって、平泉町金鶏山出土の袈裟禪文壺と同形を呈するのであろう。刻線が下位にある例は小型壺にみられるが、No.1・140の形態からみて大型の壺を連想するに足るものである。

一方、鳥海B No.143は常滑壺の肩部付近の破片とされる。12世紀前半にみられる同類の遺品の肩部は、角張らずに丸味を帯びているが、No.143の断面にみられるような肩部屈曲があるものはそれらに後続するとされ、12世紀後半から後期に位置づけられる。

鳥海B遺跡は、出土遺物からみて広く12世紀代に存続していたという確証はないが、隣接する西根遺跡との関わりで、各遺跡間の時代的継続性は当然考えられよう。しかし、これらの遺跡は、少なくとも出土陶器片の特殊性からみて通常の集落のあり方とは異なるものである。

当地域に於ける遺品の存在については、先にも記した通り平泉藤原氏の外護施入の可能性は否定できず、11世紀末頃から全国的に経塚の運営が普及するに至った結果の所産と推されよう。No.1・2・3・140はまさにその起運が隆盛を極めた時期のものでもあろう。また、鎌倉期にもかかるNo.5の常滑片は、経塚の衰退期にも相当する遺品であることから、12世紀代を通した中での宗教的遺構の存続が考えられる。ただ、当地に於けるこの種の遺構の隆盛と衰退を遂げる経緯が中央の推移とどの程度の地域差を持って存続したかについては明言できない。

注1 小野田耕一、日本陶磁全集、常滑・渥美 中央公論社 昭和52年1月20日  
原色日本の美術19・陶芸 小学館 昭和52年7月1日

注2 日本の陶磁、古代・中世論第4巻 常滑・渥美・猿投 中央公論社  
肩の張りの強い大型壺で、胴に比べて口頸部が小さいのが特徴。素地は砂質に富んだ荒い土で、

紐土巻上げ成形で接合部を叩き締めた押印が器面全体に残されている。肩に半截竹管による平行沈線を三段繞らし、その間を交互に四ヶ所縦線で結んでいる。渥美の特産物の刻文壺の一類型をなすもので、経塚用に特別に作られたと考えられる。断面三角形の口縁のつくりも渥美の特色を示している。12世紀前半の作と考えられる。

注3 沢田由治、陶磁大系7、常滑・越前、平凡社

注4 注2に同じ

注5 同上

注6 沢田由治編、時代別常滑名品図録、光美術工芸株式会社 昭和49年11月5日

注7 旧三ヶ尻村は、1889年西根と合併して金ヶ崎村に含まれる。その後北上市相去町の一部、六原・永岡村と合併し、今の金ヶ崎町となる。「平泉記」によれば、三ヶ尻は中尊寺の寺領になっていたとある。なお、山王社縁起にも藤原氏に関わる記事があるが省略する。

注8 金ヶ崎町史(金ヶ崎町昭40.5.31)によると、明治末期頃には鳥海で70~80基、前谷地で60~70基あったといわれ、今は開墾でつぶされて少なく、乱掘されながらも残っているのは僅か8基ばかりであるとされている。尚、これらは古墳時代の後期にあたる平安初期のものであり、小規模のものばかりである。最も大きいのは鳥海の高さ2m、径11mという盛土のものである。

尚、鳥海柵跡内三の丸とされる東側には、古墳が9基あったが、大正年間からたびたび盗掘され、今は2基しか残っていない。

注9 仏教考古学講座 第6巻、経塚、雄山閣版

注10 注9に同じ

経塚造営の場所は次の5つに分類される。

- (1) 寺院や神社の境内、あるいはその近傍。
- (2) (1)とも関連するが、人々が聖なる所、霊地と考えていた所。
- (3) (1)と関連を持つことが多いが、墳墓の周辺。
- (4) (1)あるいは(2)とも関連を持つ場合があるが、周辺よりは一段と高い見はらしのよい丘陵地。
- (5) 以上挙げた4つ以外で現在そこがどうして選ばれたのか指摘し得ない所。

尚、(2)については次のように補足されている。

この場合はある特定の墳墓の近くに営まれる場合で、これは当然墳墓の主たる追善供養の一環として営まれたものである。

注11 仏教考古学講座 第7巻、墳墓、雄山閣版

この中で、久保常晴氏は墳墓の選地(平面的)として、(1)一族の墓地、(2)交通に関係ある所、(3)官衙に関係ある所、(4)寺社の境内あるいはその周辺に存する、等を挙げている。尚、立地としては齊藤忠・若城千代両氏の説を引用しており、「後に山を負い、左右に丘陵を持ち、前面に平地の流水を臨み、蔵風得水に適する位置」とし、更に「丘陵先端あるいは斜面にあって、平野と川を臨む場所」としている。

注12 北上市史第2巻、北上市極楽寺遺跡(北上市昭47.8.20)、水沢市史

極楽寺は、江刺郡稲瀬村(現 北上市稲瀬町)に位置した独立の山寺である。元来は無宗派であるが、古代に於いては天台学履修の僧によって補佐されていたと伝えられる。安倍貞任の伯父任(僧名 良昭)は、「吾妻鏡」によれば境講師とも伝えられ、延暦寺で己講の僧となり、陸奥国の講師職として極楽寺に任命された人である。康平6年(1063年)には、磐井郡小松柵にいたとされるから、康平の初め頃は極楽寺の講師職座主であったと推察される。またこのことから、定額寺になる以前の極楽寺は、安倍氏の私寺であり、菩提寺であった可能性も強い。尚、極楽寺周辺の中畑坊で、採集された大平鉢は、榑崎彰一氏によって12世紀前半の渥美古窯の産とされている。

注13 注7に同じ

注14 平泉中尊寺経蔵、供養願文、天治三年

今	每	朽	精	毛	官	拔	右
冤	鐘	骨	魂	羽	軍	苦	一
靈	声	猶	皆	鱗	夷	与	音
道	之	為	去	介	慮	楽	所
浄	動	此	佗	之	之	普	于
利	地	土	方	受	死	皆	界
矣	一	之	之	屠	事	平	不
	レ	塵	界	過	古	等	限
				現	来		
				無	幾		
				量	多		

注15 大平鉢は第12表の如くに出土例をみるが、日常雑器とはいえ、その出土地は限られており、一般の集落で使用されたものではあるまい。

注16 初期中世陶器に於ける三筋文の糸譜。名古屋大学文学部研究論文集(史学) 1978

第12表 岩手県出土の常滑系遺品一覧表

番号	名称	出土地、所蔵	時期	その他
1	灰釉三筋壺	花巻町高倉山経塚・関良衛氏	平安時代・末	器高25cm、口径11.5cm、底径8.5cm、胴径18cm この他に2個体分の破片がある。
2	(破片)	一関市山野目泥田廃寺近くの経塚	?	常滑の破片
3	灰釉経塚壺	金鶏山経塚、平泉町毛越寺資料館	平安時代・末	器高35cm、口径20.5cm、底径13cm、胴径36cm
4	大平鉢	"	"	
5	三筋壺	"	"	
6	自然釉経塚壺	柳の御所跡、毛越寺資料館	鎌倉時代	
7	袈裟襷文壺	金鶏山経塚、東京国立博物館	平安時代・末	器高38cm、口径13.7cm、底径15.6cm 渥美半島古窯跡産
8	(破片)	毛越遺跡、岩手県教育委員会	平安末～鎌倉初	常滑の破片である口縁部
9	自然釉三筋壺	水沢市宇佐八幡、東京国立博物館	平安時代・末	器高24.5cm、口径(11.0)cm、胴径19cm 御子田経塚出土とされる。
10	灰釉袈裟襷文壺 (破片)	金ヶ崎町鳥海B遺跡、岩手県教育委員会	" (12C前半)	鳥海柵擬定地内、渥美古窯跡産
11	(破片)	"	" (12C後半)	常滑肩部破片、鳥海柵擬定地内
12	灰釉袈裟襷文壺 (破片)	金ヶ崎町西根遺跡、岩手県教育委員会	" (12C)	鳥海柵擬定地内、肩部～胴部破片、渥美古窯跡産
13	大平鉢	北上市極楽寺遺跡	"	破片である渥美古窯跡産で12世紀前半とされる
14	陶壺	北上市口内町水押(経塚)	平安末～鎌倉初	出土状況不明。出土地の状態から推して経塚出土か。常滑
15	三筋壺	東和町小山田廃寺	?	埋納経壺
16	自然釉三筋壺	花巻市高松・岩根神社	平安時代・末	埋納経壺、愛宕神社経塚、完形品である。
17	蓋	" "	"	上記16の埋納経壺に関わるもの
18	大平鉢	" "	"	旧観音堂、完形品である。
19	三筋壺	石鳥谷町大瀬川遺跡内経塚、岩手教育委員会	"	三筋を残す体部(胴部)片、青灰白色の釉あり
20	自然釉三筋壺	紫波町土館、新山神社	"	口縁部欠欠、器高26.2cm、底径9cm、胴径23.2cm
21	自然釉二筋壺	都南村油壺経塚、都南村歴史資料館	鎌倉時代・初	器高25cm、口径11.0cm、底径8.5cm、胴径19.4cm
22	自然釉経塚壺	都南村内村経塚、都南村歴史資料館	平安時代・末	器高51cm、口径32cm、底径15cm、胴径54cm 印符を表わす押印四段
23	自然釉経塚壺	二戸郡浄法寺町、天台寺経塚、東京国立博物館	"	器高29.3cm、口径14.7cm、底径14.6cm、胴径29.3cm、正倉院薬壺の影響、鎌倉時代に多い。
24	自然釉経塚壺	" "	"	器高35.2cm、うわぐすりが使われ黄色っぽい。23も同様か。

付記 上記の他に、岩谷堂益沢院、成島の毘沙門堂近くの経塚から壺が出土しているが、詳細については不明である。遺品の名称については、同一のものでも文献によって異なる場合があるため、一例を記すに留める。尚、上記の一覧表作成は、下記の資料より抽出したものである。

- ・ 沢田由治編、時代別常滑名品録 昭49.11.5 光美術工芸株式会社
- ・ 日本陶磁全集 常滑・渥美 昭52.1.20 中央公論社
- ・ 原色日本の美術19、陶芸 昭52.7.1 小学館
- ・ 日本の陶磁・古代・中世論第4巻 常滑・渥美・猿投 中央公論社
- ・ 陶磁大系7 常滑・越前 昭48.5.8 平凡社
- ・ 仏教考古学講座第6巻 経塚・石田茂作・雄山閣 北上市史第二巻
- ・ 文化財調査報告書第28集、岩手県古代・仏教資料調査 昭51.52年度歴史資料調査報告書 昭53.3
- ・ 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書 V分冊 日本道路公団、岩手県教育委員会 昭55
- ・ 北上市極楽寺跡、北上市教育委員会 昭47.8
- ・ 天台寺そのナゾに挑む 毎日新聞社盛岡支局 昭51.4

### (3) 土師質の蔵骨器と火葬骨について

南段丘斜面下部より火葬骨の入ったNo.120の土師器甕が出土している。出土の状況の詳細については明らかにし得ない部分が多いが、一応、南段丘周辺部出土遺物の項で記したので再述しない。ここでは、納骨された土師器甕のあり方から推察される可能性について記す。

7世紀代に畿内を中心として始まった火葬の風習は、東北の山形県地方にあっては9世紀以降とされているが、本県における初源は明らかではない。現在、最も多く確認されている北上市周辺の古墳群<sup>注1</sup>でも古代とされるものはなく、13世紀以降とされるものが多い。発掘調査された例は北上市鬼柳古墳群、同口内宝積古墳群<sup>注2</sup>、江刺市玉里薬師堂墳墓<sup>注3</sup>、紫波町柳田館<sup>注4</sup>、墳館<sup>注5</sup>、石鳥谷町大瀬川遺跡<sup>注6</sup>等がある。これらの遺跡の立地は主として山の頂上、丘陵地の縁辺部、山腹傾斜地の東・南面等にあるのが一般的であり、石室・蔵骨器等はみられず、火葬骨は土中に直接埋葬される。

本遺跡の火葬骨については、墳墓に伴う施設そのものについて不明とするものの、(1)古代の土師器の成形技法を有す甕に納められている。(2)蔵骨器は土師質のもので、底部を欠き、しかも口縁を下にする形で検出された。(3)火葬骨片の他に炭化物・小石・土等が隙間なくぎっちり詰まっていた。(4)出土場所が南段丘面崖下である。等々の事実があり、前述の古墓群とは全く様相を異にするものである。

(1)の甕の特徴は、酸化炎焼成で、体部に篋削りを施していることである。器形的には、一般の長胴甕よりは寸詰まりであるが、この種の成形技法はロクロ技術が定着した一時期に多くみられる。墳墓に土師質の土器を使用する例としては、宮城県小山田火葬墓<sup>注7</sup>、山形県宮山坂、高寺火葬墓<sup>注8</sup>等がある。しかし、山形県の例は土師質といっても壺型を呈すもので本遺跡のそれとは形態を異にする。一方の小山田火葬墓にあっては長胴の器形のものである。後者の例は、須恵器の影響を受けて製作されたとする所謂埴質土器とは異なる。本遺跡における甕もロクロ土師器の伝統的な成形技法によるもので同様である。ただ、本遺跡内西側段丘とした周辺にみられた酸化炎焼成の甕型土器に、須恵器の伝統的な叩き目技法を施す例があることや、須恵器が極端に少ないという現象面から、ある種の土師質の土器が何らかの形で須恵器と関わりを持つであろうことは推察される。坏類にあって主体的に出土するB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>類のあり方や、須恵器との消長関係が予察されることから古代の末期に近い頃の所産でもあろう。

(2)については、人為的な所業の結果としてみれば、特に施設がなくとも墳墓の一類型としてとれないこともないが断定はできない。しかし、破片として周辺に散在していた遺物を完形に近い形で復元した中では、底部片のみに限って不足している。このことだけで底部穿孔の痕跡と明言するものではないが、同様の類例は宮山坂火葬墓群第4号・9号墳に求めることができよう。また、蔵骨器を倒置する例は小山田火葬墓にもみられるが、東北では類例が少ない。こ

— 西根遺跡 —

の種の火葬墓は南関東に多く認められ、簡素にして多くは何らの副葬品を伴わず、土師器甕が単独に出土するのが普通であるとされている。<sup>注10</sup>このような観点でみる限りは、類似したあり方としてとれないこともないが、宮山坂、小山田火葬墓等<sup>注10</sup>にあっては何らかの施設を伴うものであり、遺構の不明な本遺跡出土のそれと同じ立場で論ずることは避けたい。また、倒置しているということについても、後述する(4)との関わりから偶発的な結果の可能性も否定できないため、上記の如く類例を記すに留める。

(3)は、火葬骨片や木炭のみならず、土や小礫等が甕中に混在していたという点で異質のものである。もちろん、底部を欠き倒立したままの状態とあれば多少の土砂の混入はあり得ようがそれを配慮してもなお、人為的な要素が強い。火熱によって砕けたと思われる石片の混入や、木炭・土・火葬骨片のあり方などから、火葬の場に於いて骨片を土と一緒に掻き集めて納骨したものと解されるのである。これは、荼毗後の処理としては極めて雑な方法といわざるを得ない。

火葬場と墓地の関係については、①火葬場、即ち墓地の場合、②火葬のみを行い場所を変えて埋葬した場合、③埋葬地のみの場合、<sup>注11</sup>等が考えられる。本遺跡のあり方は、現状としては③に該当するものでもあろうが、埋設施設が定かでないため、何れとも断定し難い。

(4)の出土位置については、段丘上や斜面であるならば、ある程度は墳墓の選地条件を満たすものでもあろうが、本遺跡と鳥海B遺跡とを区分する沢で形成された自然地形の段丘崖下にあるとするのは非常に不自然である。他の土器と同じように人為的な廃棄の他に、本遺跡を整地する以前での何らかの作用による流れ込み、あるいは段丘縁、斜面の崩壊等による偶発的所業の可能性は多分にあり、その結果として底部を欠いたり、倒置した状態になったとも考えられよう。

12世紀前半の年代観を有す袈裟襷文壺片は、土師質蔵骨器の出土地点にも近い段丘面上からの出土である。若し、直接的に両者の遺品が一連のものとして捉えられるならば、本来的には墓地、経塚等の遺構施設の存在を示唆することでもあるが、現状では確定されるような遺構は存在しない。

時期的にみれば、小山田火葬墓出土の土師器甕は、表杉ノ入式に比定される坏類が出土していることから平安時代前期に位置づけられ、また、宮山坂火葬墓群も山形県にあってほぼ同時代とされている。これは本遺跡内出土の土師器甕が、本遺跡全体の編年観のある一時期に併行するものとしてみた場合、大きな隔りをもつものである。この種の風習は、地域によって時期方法等の差が予想されるわけであるが、本遺跡のそれは周辺の出土遺物などからみても平安時代前期に成り得ず、どちらかといえば、袈裟襷文壺片の上限とされる時期に近い頃とみる方が自然である。

尚、遺構との関わりについては既述の如く不明とするが、ここで通常の堅穴住居跡とは性格を異にするとと思われる一例を簡単に付記しておく。

Cj 74 堅穴状遺構としたものがそれである。袈裟襷文壺片を出土したDd 68 堅穴住居跡や同種片が散在していた南側段丘縁より約13~20mほど北側に位置している。遺構の内部に多数の礫石が入っており、通常の住居として使用されたものでないことが窺える。これは周囲の堆積土との関係から自然作用による流入の結果とは考えられず、人為的な入り込みと思われる。この種のタイプの遺構は鳥海B遺跡Dg 56堅穴状遺構としたものに類例をみることができる。各々の遺跡内にあって、何らかの役割を果たしていたものであろうが、特に石組みを配したととれるものでもなく、性格そのものは皆目不明である。しかし、盛石あるいは底石というような人為的な配慮が本来的にはあったのかもしれない。このことは、宗教的な遺構との関連が想起されることでもあるが、直接的に墳墓・経塚等に結びつけるのもまた尚早であろう。

以上、本遺跡内出土の蔵骨土師器甕に関する推察の一端を列記したが、既述の如く問題点が多く残る。遺跡の範囲外に於ける今後の調査に負う所も多いが、今の所、土師質を呈す蔵骨器は県内に於ける古墓群では未だ発見されておらず、また、中世の実態とは異なっていることや、他の出土遺物からみて、大筋として古代末期の遺品とみて大過ないと考えている。しかも、その時期は、平安前期まで遡るものではなく、また中世にまで降るものでもないが、それに近い頃までの間と推察する。

- 注1 東北考古学の諸問題、山形県における古代・中世の火葬墓について 川崎利夫  
注2 北上市史第2巻所収、この他に未調査であるが、亀ヶ森墳墓群・和賀町梅ノ木古墓群等が同市周辺にある。  
注3 上 同  
注4 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 昭55年 第IV分冊  
注5 " 昭54年  
注6 " 昭55年  
注7 考古学雑誌45巻4号、宮城県小山田の火葬墓 伊藤玄三  
注8 酒井忠一・川崎利夫「山形県飽海郡遊佐町宮山坂火葬墳墓群について」 考古学雑誌 昭49.3  
注9 松本喜久夫、羽黒町高寺の火葬墳墓について (庄内考古学3号) 昭51  
注10 新版仏教考古学講座第7巻、墳墓 昭50 雄山閣版  
注11 注10に同じ

#### (4) 考察とまとめ

本遺跡の出土遺物は、既述の如く南・西側段丘部周辺とされる地域からのものが多く、遺構出土の例は相対的に少ない。前者の場合は流れ込みや、後世の整地に関わる所業の結果が大きな要因であり、遺構との関わりについては不確定的な部分が多い。従って、遺物からみた本遺跡の年代観について云々することは本来的には避けるべきであろう。が、しかし南、西段丘周辺部出土の遺物と一部堅穴住居跡の遺物のあり方が異なることや、段丘縁に存在する掘立柱遺



第13表 西根遺跡出土遺物一覧表

遺構名	A類	B類		C類	D類		備考
		B <sub>1</sub>	B <sub>2</sub>		D-b	D-c	
Ba 71 竪穴住居跡	1			1			他に砥石、ロクロ土師器甕、B類の体部片若干
Bj 03 竪穴住居跡		3		1			ロクロ成形甕、鉄滓あり、A類なし、B類片多量、糸切の甕底部
Cc 06 竪穴住居跡		2		1		1	A類なし、D-b類の破片あり
Ch 74 竪穴住居跡		1	3			1	A類なし、ロクロ成形土師器甕あり
Cf 03 ビット		1	1				
Cf 06 ビット			1				A類なし、B類の破片のみ、D類の破片あり、鉄器
Cf 09 ビット		1	4				B類だけの出土、底部片6点あり（糸切2）他は磨滅のため不明
Cf 50 ビット		1					
Da 09 ビット		3	1				B類多量、A・C類なし、B類糸切底部片10点、D類の破片
南側段丘周辺		21	22				A類2細片、C類体部片若干、B類片多量、ロクロ成形土師器甕、鉄器
西側段丘周辺		16	10				A類なし、C類体部片若干、ロクロ成形土師器甕（体部に叩き目あり）
Dd 68 竪穴住居跡							灰釉袈裟襷文壺片

注、南・西段丘周辺部D類の点数は省略。

構との関係などから、土器消費の場に於ける何らかの変化があったであろうことは考えられる。段丘崖下に押された遺物は、削平される以前にあって、少なくとも存在する竪穴住居跡よりは上層に存在していたものであろうから、その部分に他の何らかの遺構が存在していたものと思われる。Cブロック西側付近に存在するピットの多くがB類だけの出土を示し、同じブロック内にあるCc 06 竪穴住居跡とはあり方が異なっていることや、また、段丘縁に近い部分に位置していることなどからみて、ビットそのものの性格は不明とするものの、段丘上下部周辺に出土した遺物に関わる遺構の一部であったものであろう。このようなことから、ある竪穴住居跡と一部のビット群とは、少なくとも出土遺物でみる限りでは時間差を持つものとして捉え、以下については、共伴遺物を中心としてまとめて行く。

第13表に提示した住居跡関係の共伴については、A類とC類とを共伴するBa 71 竪穴住居跡、B<sub>1</sub>類とC類を出土するCc 06、Bj 03 旧竪穴住居跡、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>類を出土するCh 74 竪穴住居跡、また各類を出土しないが12世紀前半代の年代観を与えられる陶器片を出土したDd 68 竪穴住居跡等がある。ビット内からはB類のみの出土であり、A・C類は伴わない。また、南・西段丘周辺部でもやはり、B類を主とするが、D類とした台付坏の点数も比較的多い。

Ba 71・Bj 03 旧・Cc 06 竪穴住居跡等は、少量であるがまだC類を伴う段階の遺構として捉えられ、隣接する鳥海B遺跡に近いあり方を示すものである。Ba 71 竪穴住居跡は、A-1.

3溝で破壊され、全容を明らかにし得ないが、本遺跡内で実測された唯一点のA類を出土しているのが特徴である。また、B<sub>1</sub>類とC類を出土するがB<sub>2</sub>類がみられないCc 06、Bj 03 旧堅穴住居跡は、小型化したB<sub>2</sub>類が出現する以前の時期にも比定され得よう。これは、鳥海B遺跡にあって、A類を伴出する遺構にはB<sub>2</sub>類に近いB-Ⅲ<sup>注1</sup>とした坏類の出現率が少なく、A類の消滅した部分でB-Ⅲが目立ってくること、あるいは本遺跡にあってA・C類を含まずB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>のみを出土する堅穴住居跡やピットのあり方などから、共伴遺物に於ける何らかの変遷があったことを示唆している。このことは、今村邸内遺跡にみられたように、多賀城研における10-a類とした坏が10-b類を含まず一括出土することから、10-a類と10-b類は重複しない一時期が想定され、やや年代が降って10-a類に小型の10-b類が加わってくるものと考えられるということにも通ずるものであろう<sup>注2</sup>。このようなことから本遺跡にあってはB<sub>1</sub>-B<sub>2</sub>の先後関係は大過ないことと思われ、大別してB<sub>1</sub>中心の一時期とB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>類を中心とする一時期、しかも前者はまだC類が残る段階、後者はA・C類がほぼ消滅した段階としての二時期が想定されよう。尚、A類の下限については、C類より降るものではあるまいと思われる。また、C類については、鳥海B遺跡のB-Ⅲとした坏群が本遺跡のB<sub>2</sub>になりきらない段階ではまだ残るようであるから、それより後でしかもB<sub>2</sub>類が一般的になるより以前に消滅していったものと考えたい。ここで、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>類の関係について補則するが、両者の先後関係は既述の通りとするものの、B<sub>1</sub>類のすべてがB<sub>2</sub>類的なものに変化していくということではない。これらは共伴しない一時期を経た後にセットとして併行するということである。このあり方は、(b)まとめて記したような相違点があるものの、平泉町毛越A遺跡にあっては同様であり、新しい部分では陶器片が目立つ。当然、中世にもかかる<sup>注3</sup>とされている。

一方、出土遺物の少ないDd 68 堅穴住居跡については、住居跡内ピットの埋土から12世紀前半の年代観を持つ袈裟襷文壺片の出土があるが、この種の陶器が有す特性からみて、集落内に於ける他用途への転用は考えられず、同時性があるとは思われない。また、たとえこの遺品そのものが当遺構に関わるという仮設にたった場合にあっても、同様の破片が住居跡外に多く散在していたことからみて、直接的に関与するものではなく、おそらく当住居跡構築の際に破壊、混入の経緯を経たものであろうと推察されよう。もちろん、遺物そのものは搬入時点で既に壊れていて廃棄される場合もあろうが、その場合でも当遺構の構築が袈裟襷文壺片の上限以前、即ち12世紀代以前に遡ることはないと思われる。当遺構のようにカマドを持たない長方形の住居跡は、遺構の項で記した通り他例を求めることができるが、平安末期～中世代にかかるとされているものが多い。従ってDd 68・Dj 03 新等の遺構もまたそれらに近い頃として捉えたい。袈裟襷文壺片そのものを平泉藤原文化との関わりで捉えるならば、藤原氏存続期間内での破壊はあり得ないであろうから、藤原氏滅亡後の所業として構築年代が12世期末期以降にもかかる

— 西根遺跡 —

ものであろうか。

尚、金ヶ崎町・岩手県教委が調査した西根遺跡第23号住居跡もまた類似の形態を呈し、出土遺物は本遺跡でB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>類とした土器群で構成されており、<sup>注4</sup> 时期的には藤原氏時代以前に於ける存在の可能性について記されている。本遺跡Dd 68・Bj 03 新堅穴住居跡等は出土遺物が少なく、第23号住居跡との併行関係を論ずるには難点があるが、少なくとも袈裟禪文壺片との関わりでみる限りは、时期的に大きな隔りがあるといわざるを得ない。

また、南・西段丘上下一帯の出土遺物については、B類を中心とし、A・C類が微少であることから、Ba 71・Cc 06 堅穴住居跡等よりは新しい部分での流れ込み等が大勢を占めているものと思われる。

その他土器では、甕型土器が量的には少なく、須恵器にあっては更に微量である。これは、坏類の共伴関係が変化していくと同じように、甕型土器にあってはそれに変わる器種の使用が想起されることである。また、D類は住居跡内では内黒のD-c類としたものが2点、他は段丘周辺にみられる。D-c類を出土したCc 06・Ch 74 堅穴住居跡は、B類のあり方が若干異なるが他の遺物や住居跡の規模等からみて、そう大きな時間差を持つものではないと思われる。

以上、本遺跡内出土遺物から推察される解釈の数例について記したが、年代的には表杉ノ入式土器に比定され得るC類を伴出する時期と、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>類を中心とする一時期とに区分し、前者を広く11世紀代に、後者は一部それにオーバーラップしながら後続してくるものと捉えたい。尚、出土遺物の少ないDd 68・Bj 03 新堅穴住居跡等は本遺跡内に於ける下限に近い頃と考えられるが、B<sub>2</sub>類が一般的に使用された頃に併行あるいは後続するものであろう。まさに日常使用の土器類に限らず、家屋構造にあっては変革が進行した一時期とも推察される。また、B<sub>2</sub>類そのものは多賀城研の10類-b的な特徴を持つことや、既述の袈裟禪文壺片との関係から、12世紀代以後にその中心を置くものと考えている。当然、中世に係るものでもあろう。

(文責・八重樫)

注1 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書、岩手県文化財報告書第X分冊、鳥海B遺跡

注2 多賀城周辺における古代坏型土器変遷、岡田茂弘・桑原滋郎、研究紀要I、宮城県多賀城調査研究所

注3 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書、岩手県文化財報告書第III分冊、毛越A遺跡

注4 西根古墳と住居跡、岩手県教育委員会、金ヶ崎町教育委員会 昭和43年3月

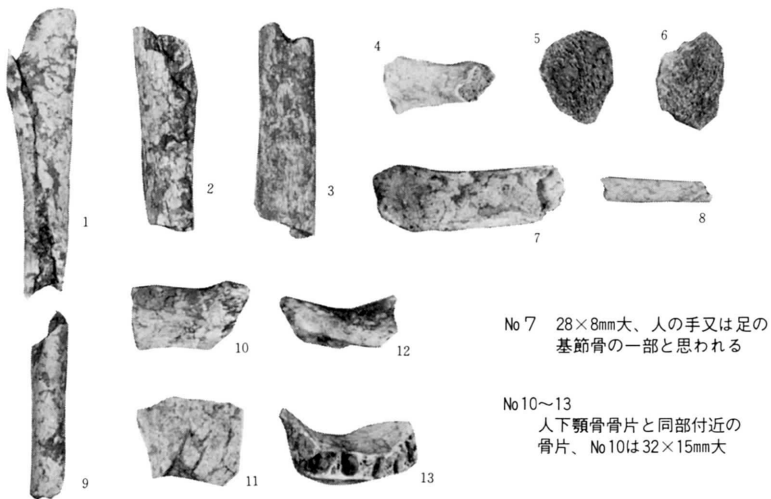
## V 鑑定・年代測定結果

本遺跡出土遺物No. 120の土師器甕中に納められた人骨・炭化材については、年代測定・鑑定等について直接依頼し、その結果を受理している。人骨の具体的な部位等については岩手医科大学法医学部教室、桂 秀策氏の鑑定により、また炭化材の<sup>14</sup>C測定については日本アイソトープ協会による年代測定である。

1 人骨の鑑定結果 第14表、図版19

第14表 人骨検査結果・抜粋一覧表 (番号は鑑定書の整理番号である)

性状 番号	大きさ(mm)	所	見
1	72 × 18	色は灰褐色。人左肋骨と推定。変形しており、外側に縦に走る亀裂がある。	写真図No. 1
3	48 × 15	人右橈骨体。手根関節に近い部分と推定。	写真図No. 2
4	54 × 14	人左橈骨体と推定。	写真図No. 3
12	80 × 55	人左上腕骨下端部。	
14	30 × 21	頭蓋骨の一部と推定されるが部位不詳。	
15	16 × 16	橈骨骨頭。左右の別は不明。	
17	56 × 9	肋骨の一部と推定される。	
26	41 × 12	肋骨と推定。	
29	44 × 11	肋骨の一部と推定。	写真図No. 9
32	24 × 14	人橈骨骨頭の一部と推定。左右の別は不明。	
57	28 × 17	成人骨としては細すぎる。人小児骨か獣骨か不明。	写真図No. 8
83	33 × 22	上顎骨の一部と推定されるが、変形があるように思われ、詳細は不明である。	
84~91		No.84~No.91骨片は頭蓋・顔面骨の一部と推定され、No.85骨片は上顎骨の一部と思われる。	
93	25 × 17	人下顎骨の右関節突起。	写真図No. 4
94~97		No.94~No.97骨片は長管骨骨端と推定されるが、詳細は不明である。写真図No. 5. 6	
99	22 × 10	椎骨の一部と推定。	
100	17 × 12	胸椎の右椎骨弓根と推定。	



### — 西根遺跡 —

- (1) 西根遺跡出土の骨片については明らかに人骨の一部があるが、性別・年齢・死因等是不明である。
- (2) 亀裂・変形のあることから、加熱された骨であることも考慮され得る。
- (3) 色調の異なる骨片も混じるが、複数の個体であるという証拠を見出し得なかった。
- (4) 骨片中には人骨の一部（左右の橈骨体・左上腕骨下端部・橈骨骨頭・肋骨・上下顎骨の一部・椎骨の一部・手または足の基節骨）がある。

以上が鑑定結果の要旨である。細部については部位の判明した人骨片を抜粋し、一覧表に記し、一部については写真を添える。

### 2 <sup>14</sup>C測定結果

試料はNo.120の土器内に骨片と共に入っていた炭化材片である。炭化材といっても殆んどが細粒片であり、土塊内からピンセットで取り出し集めたものである。

日本アイソトープ協会による測定結果は、 $1420 \pm 85$  y B.P. ( $1600 \pm 75$  y B.P.) と計算されている。換算年代誤差を2倍にして算出すると360～700年となる。これは、県内にあってロクロ成形による土器群が発生した時期と異なるものであり、特に本遺跡出土の他の土器群に関わる従来の編年観からみれば時期差が大きいと言わざるを得ない。周辺に存在する古墳群との関係で骨片そのものにどの程度の移動があったかは知る由もないし、また、火葬骨埋葬の初源もはっきりしない現在では、時間的空間を埋め得るだけの理由は説明できない。試料に関わる取り扱いについては、他のカーボンが入り得るような状態ではなく、一応<sup>14</sup>C測定に耐え得るだけの配慮はしたつもりである。

「尚、年代は<sup>14</sup>Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）に基づいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力及び温度の読取りの誤差から計算されたもので、<sup>14</sup>C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に広げますと確率は約95%となります。尚<sup>14</sup>C年代は必ずしも真の年代と等しくない事に御注意下さい」とのコメントを付記して本項を閉じる。

### 3 土器胎土分析結果

Ba71 竪穴住居跡出土No.2のA類については土器胎土分析を行なっている。この結果の詳細については巻末資料を参照されたい。

# 鳥海 B 遺跡

遺跡名：鳥海 B 遺跡(略号 TM-B75)

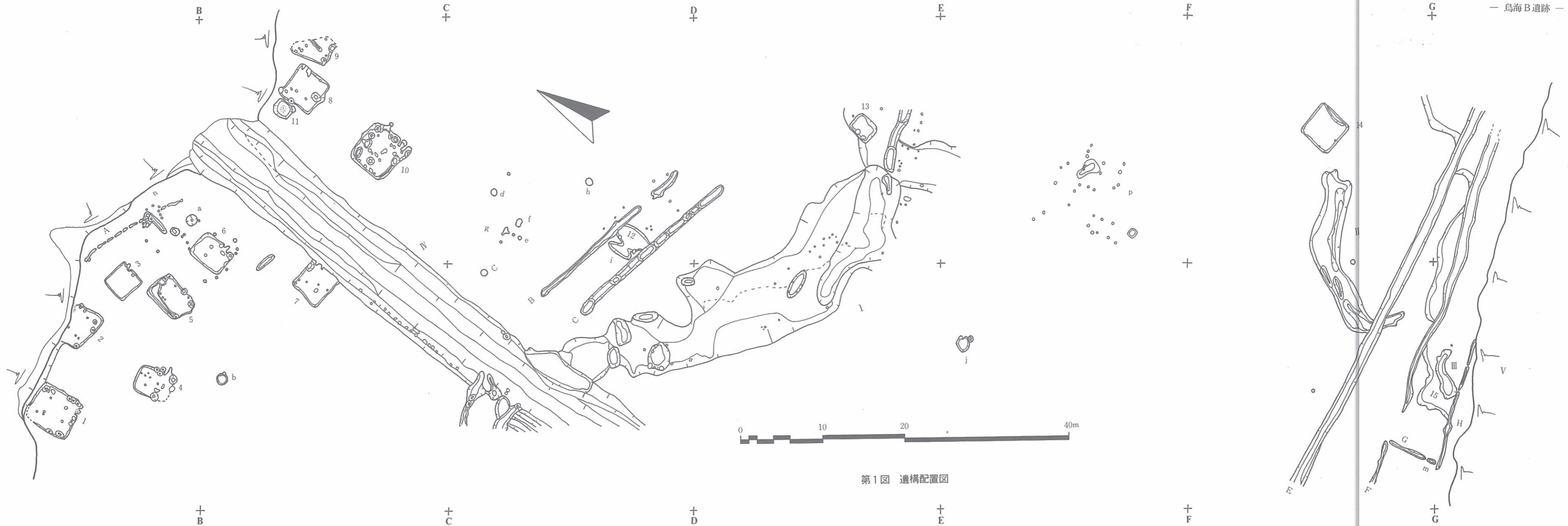
所在地：金ヶ崎町字鳥海

調査期間：昭和50年4月14日～8月31日

調査対象面積：約8,500m<sup>2</sup>

発掘調査面積：約8,500m<sup>2</sup>





第1図 遺構配置図

1～15 竪穴住居跡・竪穴状遺構

- |                  |                      |               |
|------------------|----------------------|---------------|
| 1. 第1号住居跡(Ad21住) | 6. 第6号住居跡(Aj50住)     | 11. Bd68竪穴状遺構 |
| 2. 第2号住居跡(Ad09住) | 7. 第7号住居跡(Bd03住)     | 12. Ch53竪穴状遺構 |
| 3. 第3号住居跡(Ag03住) | 8. 第8号住居跡(Bd68住)     | 13. Dg65竪穴状遺構 |
| 4. 第4号住居跡(Ah18住) | 9. 第9号住居跡(Bd74住)     | 14. Fe65竪穴状遺構 |
| 5. 第5号住居跡(Ah06住) | 10. 第10-1号, 10-2号住居跡 | 15. Fj18竪穴状遺構 |

a～p ビット遺構・柱穴状ビット群

- |               |               |              |             |
|---------------|---------------|--------------|-------------|
| a. Aj53ビット    | f. Cc53No2ビット | k. Ei53ビット   | n. Ah53ビット群 |
| b. Ba15ビット    | g. Cc53焼土ビット  | l. Fc18ビット   | o. D区ビット群   |
| c. Cb03ビット    | h. Cf59ビット    | m. Fi24焼土ビット | p. Ed53ビット群 |
| d. Cb56ビット    | i. Ch50ビット    |              |             |
| e. Cc53No1ビット | j. Ea12ビット    |              |             |

A～I 溝状遺構・U字状溝

- |           |              |
|-----------|--------------|
| A. A-No1溝 | F. F-No2溝    |
| B. C-No1溝 | G. F-No3溝    |
| C. C-No2溝 | H. G-No1溝    |
| D. D-No1溝 | I. Bc50溝(U字) |
| E. F-No1溝 |              |

I～II 落ち込み・空壕

- |              |
|--------------|
| I. CD区落ち込み部  |
| II. F区落ち込み部  |
| III. G区落ち込み部 |
| IV. 空壕       |
| V. 第3壕       |



## I 遺跡の位置と立地

本遺跡は、東北本線金ヶ崎駅より南方約 1.5 km の金ヶ崎町字鳥海に所在し、夏油川によって形成された六原扇状地の金ヶ崎段丘南縁にあたり、胆沢川の浸蝕によって形成された東西に延びる段丘崖上の平坦面に位置する。標高約 59 m 程で、その現河床との比高差は約 8～10 m 程である。調査地は、水田であるが、かつては原野および畑地がその大半を占め、後の開田事業によって整地されたもので、その削平が各遺構に及ぼす影響は激しく、地形においても旧地形とはかなり異なっている。

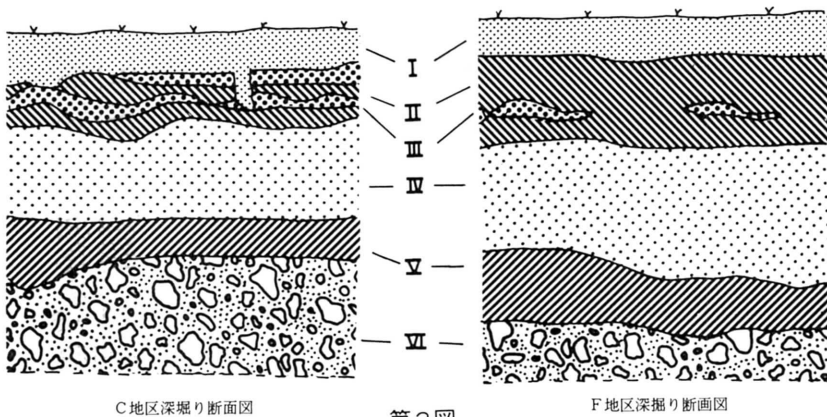
なお、同段丘面上には、各種“遺跡”が分布する。本遺跡の北方には西根遺跡・縦街道古墳群があり、南方には鳥海A遺跡が見られる。また、西方には桑木田小丸塚等が位置する。西根遺跡・鳥海A遺跡は、当遺跡を中心として、南北に沢を隔てて隣接する遺跡であり、安倍氏時代の鳥海柵擬定地として重要視されている遺跡である。縦街道古墳群・桑木田小丸塚等の各遺跡は、時代的には本遺跡をはじめとする前述遺跡より古い時期の年代観を持つ遺跡である。

注1 昭和50年岩手県教育委員会調査 東北自動車道関連遺跡・昭和54年(財)岩手県埋蔵文化財センター調査、金ヶ崎バイパス関連遺跡・昭和33～36年金ヶ崎町教育委員会調査の3遺跡を含む。すべて西根遺跡として登録。

注2 昭和47年岩手県教育委員会調査、東北縦貫自動車道関連遺跡・鳥海柵擬定地の一部。

## II 基本層序 第2図

本遺跡の基本堆積層は、西根遺跡のそれとほぼ一致する。下図はC区F区の深掘り断面図で



ある。これら両者を比較すると堆積土層の厚さに若干の変化がみられるが、その土性の変化は目立たない。また、C区はF区より約50～60cmの比高差をもって高位にある。

当遺跡における具体的な標準土層は下記の如くである。

I層 黒褐色腐植土(10YR $\frac{2}{2}$ )粘土、シルトブロックが多量に混入する粘性の強い土質である。水田耕作土層にあたり、下層部分には酸化鉄状の層が帯状に入る。厚さは約15cmほどである。遺物等を多量に包含するが、ほとんど細片で占められ復元可能とするものはない。

— 鳥海B遺跡 —

当堆積土は、開田時における削平、土砂の移動があった部分である。

Ⅱ層 明黄褐色粘土（10 Y R<sup>6/10</sup>）

橙色シルトが帯状ないしはブロック状に混入する。

土質は固くしまり、厚さはC区で20～30cm、F区で約40cm前後となる。F区は厚く、混入するシルトの量も少なくなっている。

本遺跡における遺構検出面であり、その中位から下位にかけては各遺構の基底部分が掘り込まれている。

Ⅲ層 橙色シルト質土（7.5 Y R<sup>6/10</sup>）層である。粘性はなく極度に荒い粒子が目立ち、ザラザラした感じが手にのこる。厚さは10～30cm位でA・B区が最高値となる。

Ⅳ層 浅黄橙色粘土（10 Y R<sup>6/10</sup>）粘性が強くしまっている。上部面に明黄褐色粘土が縞状に混じる、北側で約30cm、南側で50cm位の厚さになっている。また、部分的であるが下位部に酸化鉄分が確認される。

Ⅴ層 灰白色粘土（2.5 Y 7<sup>1/10</sup>）15～20cmの厚さで堆積する。

Ⅵ層 段丘砂礫層である。明褐色・褐色を呈す砂土が混じり、上部ほど砂分が強く粗い。

### Ⅲ 検出された遺構と遺物

調査の結果次の各遺構を検出した。①平安時代と目される竪穴住居跡11・竪穴状遺構5・②大型ピット遺構13・柱穴状ピット群3箇所・③溝状遺構8・Y字状溝1・④空壕跡1・⑤性格不明の不定形落ち込み3箇所等を検出した他、歴史時代の遺物を多数検出した。

以下これら検出した各遺構また遺物について順次に説明する。なお規模その他は別表参照。

(1) 第1号竪穴住居跡（Ad 21住） 第3図・第9表

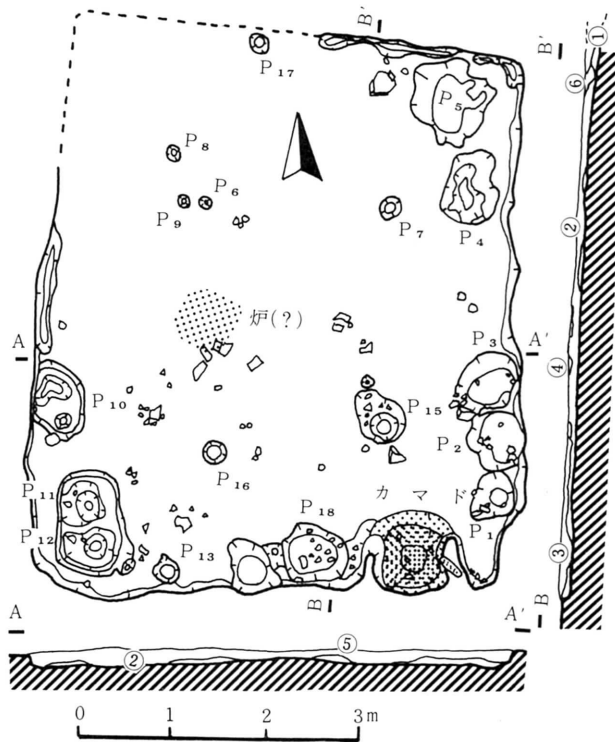
〔平面形〕 北側段丘縁に位置するため北壁と西壁の一部が確認できかねたが、南北に長軸を持つ隅丸の長方形プランを呈す。

〔断面形〕 開田時の影響を多分に受けているが、残存する各壁の立ち上がりは、比較的垂直に形成されている。検出面からの深さは約10cmを測る。

〔堆積土〕 黒褐色土の単層で構成されるが、混入物の割合から4層に細分される。

〔床面〕 基本層Ⅱ・明黄褐色粘土を掘り込んで、ほぼ平坦に構築している。また床面中央部付近から、規模65×75cm×深さ約5cm程の焼成痕が確認された。規模・位置等から炉址的な性格を持つものと考えられる。

〔カマド施設〕 南壁東寄りに確認されたが、煙道・煙出し等は確認できなかった。なお燃焼部の両側には先端に礫を埋め込み粘土で被覆した袖部が確認できた。燃焼部の規模は、約80×70cm程度、床面からの深さは11cm前後である。



堆積土層一覧表

	堆積土色	基本層	備考
①	黒褐色土	II	段丘崖堆積土
②	黒褐色土		炭化粒・粘土混入
③	黒褐色土		粘土が②より多く混入
④	黒褐色土		暗赤褐色焼土が混入
⑤	褐色土		シルトとの混土 締まりなし
⑥	黒褐色土		木根攪乱
ピット堆積土一覧			
黒褐色土(②)・P <sub>4</sub> ・5・6・7・8・9・11・16			
黒褐色土(③)・P <sub>1</sub> ・2・3・10・11・12・13・14 P <sub>17</sub> の各ピット			
暗赤褐色土・P <sub>15</sub> (焼土が混入している)			

第3-1図  
第1号住居跡実測図と覆土

〔その他の施設〕 床面から7個の小ピットが確認されているが、規模・位置・形状等から柱穴と推察されるピットは5個（P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>16</sub>・P<sub>17</sub>）確認された。そのうちP<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>16</sub>の3個は支柱穴と考えられる。貯蔵穴様のピットは東壁から南壁にかけて5個（P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>18</sub>）確認された。そのいずれもが遺物を多量に含み、カマドを中心として、その周囲から検出されたものである。周溝は、西壁一部・北壁一部に確認されたが、いずれも小規模で、その深さは床面から約5cmを測るにすぎない。

第1表 住居跡内ピット計測値他一覧表

No.	径 (cm)	深さ(cm)	平面形	堆積土	No.	径 (cm)	深さ(cm)	平面形	堆積土
1	貯 45 × 50	12	楕円形	黒褐色土	10	55 × 73	10	楕円形	黒褐色土
2	貯 62 × 64	23	楕円形	黒褐色土	11	貯 70 × 112	14	方形	黒褐色土
3	貯 63 × 56	11	楕円形	黒褐色土	12	22 × 28	9	不整形	黒褐色土
4	55 × 73	12	不整形	黒褐色土	13	柱 26 × 22	13	楕円形	黒褐色土
5	76 × 87	11	不整形	黒褐色土	14	42 × 55	16	楕円形	黒褐色土
6	柱 16 × 15	7	円形	黒褐色土	15	51 × 58	14	楕円形	暗赤褐色土
7	柱 24 × 22	12	楕円形	黒褐色土	16	25 × 21	8	楕円形	黒褐色土
8	12 × 18	7	楕円形	黒褐色土	17	柱 20 × 22	10	円形	黒褐色土
9	12 × 14	9	楕円形	黒褐色土	18	貯 65 × 55	18	楕円形	黒褐色土

出土遺物 第3-2図

(1) 坏型土器

坏類は、埋土中のものをも含めて15点の出土。その内訳は、B類10点、C類4点、高台付坏1点で、実測可能なA類はみられない。尚、A類については床面上では1片も残存せず、埋土内にあって体部の細片が僅か5片程度あるだけであり、全体の出土率からみれば、共伴しないとみなしても過言ではないほどのあり方をみせる。また、坏類全体の傾向としてみれば、磨滅あるいは剝離のため切離しの不明な坏がその半数を占め、判明するものはすべて回転糸切による。

B類は、No.8（写真No.9）、No.9（写真No.10）、No.10（写真No.11）、No.11（写真No.12）、No.12（写真No.13）、No.13（写真No.14）、No.14（写真No.15）、No.15（写真No.16）、No.17、No.18の10点である。このうち、No.8、12、13、14、17の5点は、前述の如く理由で切離しは不明である。

No.8は、ピットと床面出土破片の接合による反転復元図である。内外面とも磨滅が激しく、器面に無数のひび割れ痕がある。器形的には口縁のくびれ方が特異である。にぶい橙色を呈し、胎土中には粗砂を混入する。焼成は弱く軟質である。No.9は、床面出土。底部の厚さと比較すれば、体部の器肉は薄目である。これは磨滅による結果とも思われ、特に外面が激しい。回転糸切後の再調整もみられない。色調、胎土、焼成は、No.8の坏と同様である。No.10は、住居跡内ピットからの出土。回転糸切無調整。一見してC類的な器形を呈す。石英粒、細粒石を含む粗なる胎土で、焼成も弱い。No.11は、住居跡内ピットからの出土。軟質な仕上がりの坏でひび割れ痕が目立つ。底部の中央部分には1.3×1.7cm大の穴がおり、その周辺の器肉も薄くなっている。人為的な要素としてとれないこともないが、他の用途に使用したという確証も得られない。恐らくひび割れを持つ軟質なことから、剝離を重ねているうちについた穴と思われる。色調は浅黄橙色～白橙色を呈す。No.12は、住居跡内ピットからの出土。全体の1/2程度の破片による反転復元図である。遺存状態は芳しくなく、内外面とも磨滅、ひび割れが多く軟質。器高の低目な小型の坏であるが、口縁部分を欠失しているため当然のことであり、また、正確な計測値も望めない。底部には、僅かに回転糸切痕を残すが、再調整の有無は不明である。明黄橙色を呈し、粗雑な胎土。No.13は、カマド左付近の床面出土。底部面は欠失しているため、切離し不明。内外面に黒色炭化物が付着しており、全体が黒変している。内面部分にあっては、剝離によって露出した器面にまで黒変が及ぶ。灯芯痕は見当たらないが、所謂燈明皿にでも転用したものであろう。胎土は混入物が少なく、比較的良質である。No.14は、住居跡内ピットからの出土。全体の1/3程度の残存による反転復元。胎土は悪く焼成も弱い。当然、磨滅は激しく、崩れ易い器面である。体部のたちあがりも他のB類と様相を異にしており、体部全体が外反する器形である。色調は明黄橙色を呈す。No.15は、埋土内出土。回転糸切無調整。石英細粒、砂粒を含む粗雑な胎土だが、焼成はいい。外面には黒斑ともとれる黒色変化部分が観察されるが、何れとも断定し難い。全体として器形に若干の歪みがあり、また、内面底部中央付近は僅かながらも突出している。No.17は、床面出土。全体の1/3程度の破片による反転復元。剝離・磨

滅が激しく、体部の凹凸はあまり目立たない。明褐灰色を呈す。胎土は混入物が少なく比較的良質であり、焼成も悪くはない。No.18は、埋土内からの出土。全体の1/6程度の残存。体部は緩やかなちあがりを見せ、底部は厚い。体部と底部の境界は明瞭であり、切離しは回転糸切により、再調整はない。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は悪いが、焼成はいい。

C類は、No.5（写真No.6）、No.6（写真No.7）、No.7（写真No.8）、No.16の4点の出土である。磨滅・剝離をうけているものが多く、切離しや再調整の有無が判然としない場合が多い。

No.5は、住居跡内ピットからの出土。器高が高めで器肉が薄い。磨滅のため、体部の凹凸は内外面ともあまり目立たない。内面は黒色処理されており、光沢があることから、本来的には篋みがきが施されていたであろうが、単位ははっきりしない。底部の切離しは回転糸切であるが、再調整の有無については断定できない。明黄橙色を呈している。粗砂を混入する胎土で焼成は普通の仕上がりである。No.6は、床面出土。回転糸切無調整。磨滅が多く、体部の凹凸は目立たない。内面の篋みがきの単位も不明である。また、外面の口縁部分にも黒色処理が及ぶが、この場合の篋みがきもはっきりしない。No.7は、住居跡内ピットからの出土。小型の坏で、他のC類ほどの磨滅はみられないが、外側底部面だけが剝離しており、切離しは不明である。胎土・焼成とも良質であり、篋みがき調整痕も明確に観察される。No.16は、床面上出土。全体の1/6程度の破片による反転復元である。回転糸切痕を僅かに残すが、再調整の有無は不明。内面の黒色処理はみられず、篋みがきの単位も観察されない。しかし、光沢のあることから、本来的には篋みがきによる仕上げがあったものと推察され、また、黒色処理についても、何らかの二次元的加熱の結果、消え去ったものであろうと思われる。

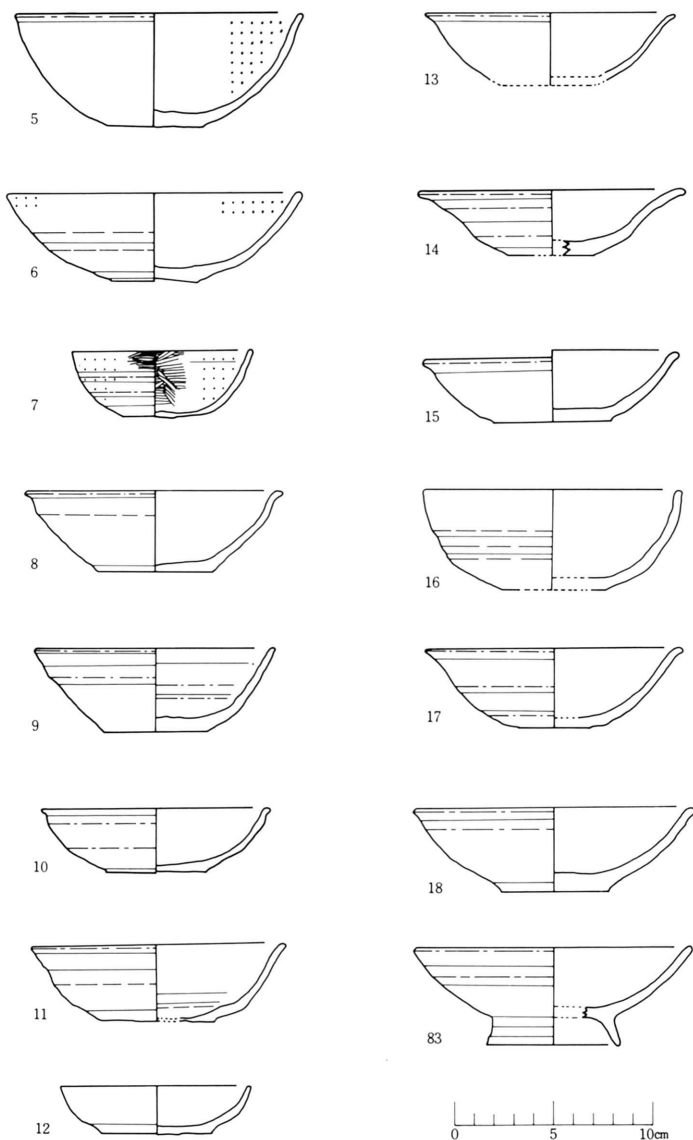
他に、No.83（写真No.17）がある。床面上出土。反転復元による実測であり、推定ではあるが口径14cm、器高5cm、脚径6.8cm位の大きさの台付坏。内外面に器面調整を加えず、色調の観点でみる限りでは、B類の範疇にも入るべき種類のものである。底部の切離しは、磨滅のため何によるかは不明である。細石を混入する胎土は悪いというほどでもない。焼成は弱く、非常にもろい軟質な仕上がりである。

## (2) 甕型土器

大中小合わせて4点の甕が出土している。

No.103（写真No.18）は、床面上出土で、土師器の小型甕と思われる。ロクロ成形による体部下端部分の反転復元図である。にぶい黄橙色を呈し、胎土・焼成とも普通のできあがりである。No.104（写真No.19）は、カマド付近出土。ロクロ成形の土師器。明黄橙色を呈す硬質な甕であるが、胎土は粗雑である。推定口径は約19cm位。No.105（写真No.20）は、カマド内出土の土師器。口縁部と底部を欠失しており、胴部だけが筒状に残っている。外面には縦～斜位の篋削りがあり、その上位にメ印がくっきりと刻みこまれている。内面の仕上げは、磨滅のため不明である。小

一 鳥海B遺跡 一

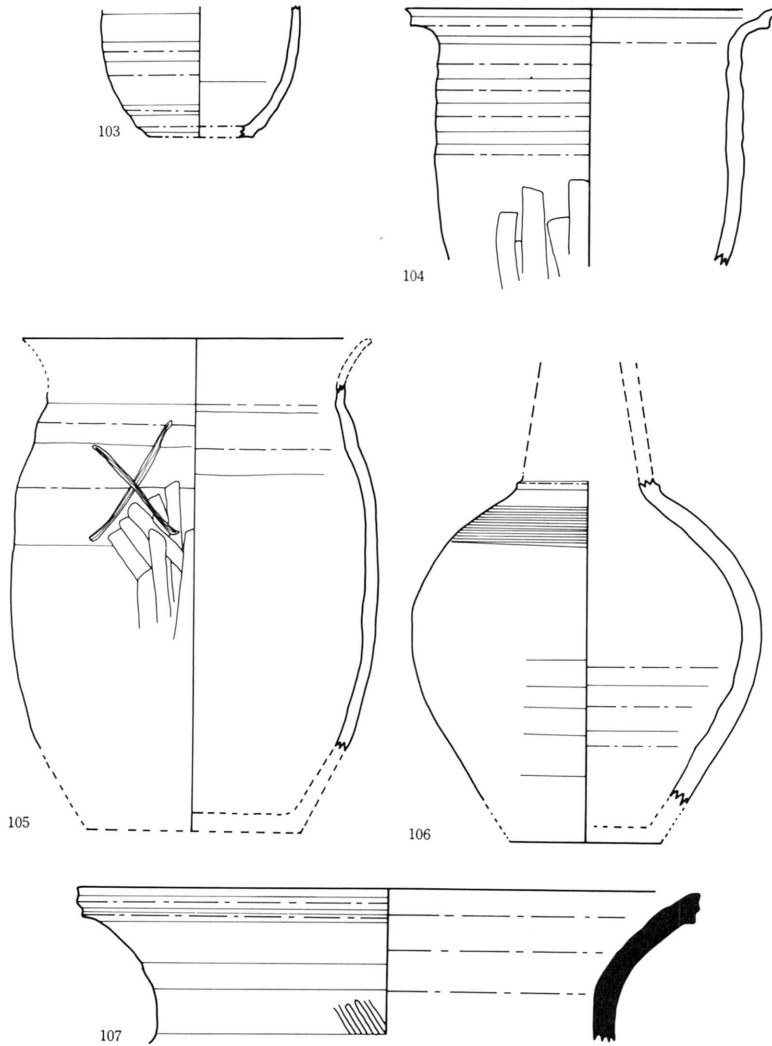


図版3-2 Ad21 堅穴住居跡出土遺物

石や粗砂を混入する粗雑な胎土だが、焼成は良好である。胴部の最大径は、18.5 cm。

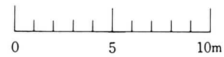
No. 107 は、床面出土の須恵器甕である。僅かに叩目痕がみられる。断面にみる胎土の色が異なる部分があり、褐灰色を呈す硬質な仕上がりである。推定口径は約37 cm。この他に同類と思われる体部片があるが、外面には叩目、内面には布目痕を残している。No. 108 は、ロクロ成形の土師器。埋土中からの出土である。体部の凹凸は明瞭に残るが、器面の磨滅は激しい。推定口径は23.5 cm位。

(3) その他



図版3-3

Ad21 堅穴住居跡出土遺物

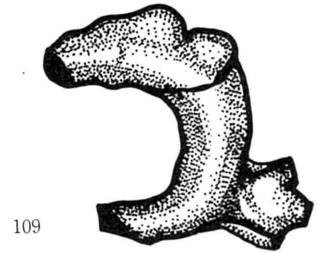
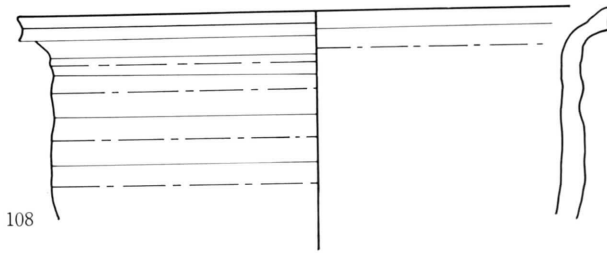


No. 106 (写真No.21) の長頸壺があるが、長頸部分と底部を欠失している。体部中央より下位にかけて、ロクロの回転力を利用した篋削りがみられる。粗砂を混入する胎土だが、焼成は非常に良くしまっている。最大胴径は18cmである。

No. 109 は、実物大の鉄製品である。馬具の一部かもしれないが、端的にいて不明である。

#### 2号堅穴住居跡 (Ad 09住) 第4図

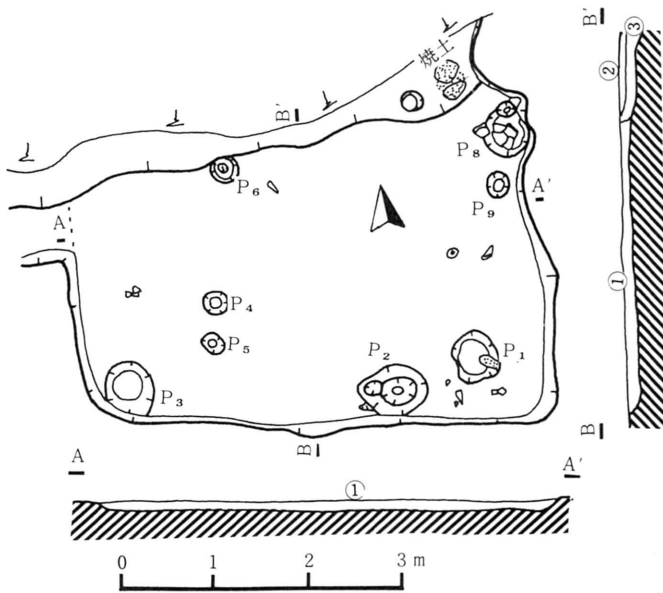
〔平面形〕 北側段丘縁に位置するために遺構の3分の1程度が明らかでない。正確な平面形は不明であるが、残存する壁のコーナーは隅丸を呈す。



図版3-4

Ad21 竪穴住居跡出土遺物

- 〔断面形〕 全容が明らかでないが、残存する壁の立ち上がりは、緩い傾斜を示す。
- 〔堆積土〕 黒褐色土の単一層で構成される。また段丘崖は2層から成り、区別される。
- 〔床面〕 基本層Ⅱ・明黄褐色粘土層を掘り込んで、平坦に構築されているが、段丘縁のためか幾分南から北に向けて緩い傾斜を持つ。
- 〔カマド施設〕 東壁北寄りの段丘縁から径約16cm程の焼成痕を2箇所確認したが、煙道・煙出し・袖等の施設が確認されないことから明らかでない。
- 〔その他施設〕 遺構内から9個のピットを確認した。規模・位置等から柱穴と推察される



堆積土層一覧表

	堆積土色	基本層	備考
①	黒褐色土		粘土粒混入
②	褐色土		段丘堆積土
③	暗褐色土		段丘堆積土
ピット堆積土			
	黒褐色土		P <sub>1.2.3.4.5.6.7.8.9</sub>
	黒色土		P <sub>4.8</sub>
	暗赤褐色土		P <sub>1.8.9</sub>

第4-1図

第2号住居跡実測図と覆土

第2表 住居跡内ピット計測値他一覧表

No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土	No.	径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆積土
1	48 × 55	5	楕円形	暗赤褐色焼土、黒褐色土	6	柱 18 × 18	15	円形	黒褐色土
2	71 × 55	16	楕円形	黒褐色土	7	23 × 24	9	円形	黒褐色土
3	51 × 56	8	楕円形	黒褐色土	8	貯 45 × 45	18	円形	暗赤褐色焼土、黒褐色土
4	柱 20 × 20	30	円形	黒褐色土	9	柱 17 × 20	8	楕円形	暗赤褐色焼土 黒褐色土
5	25 × 25	20	円形	黒褐色土					



ピットは3個（P<sub>4</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>9</sub>）である。貯蔵穴様ピットは、東壁から1個（P<sub>8</sub>）確認された。他の5個のピットについては明らかでない。

出土遺物 第4—2図

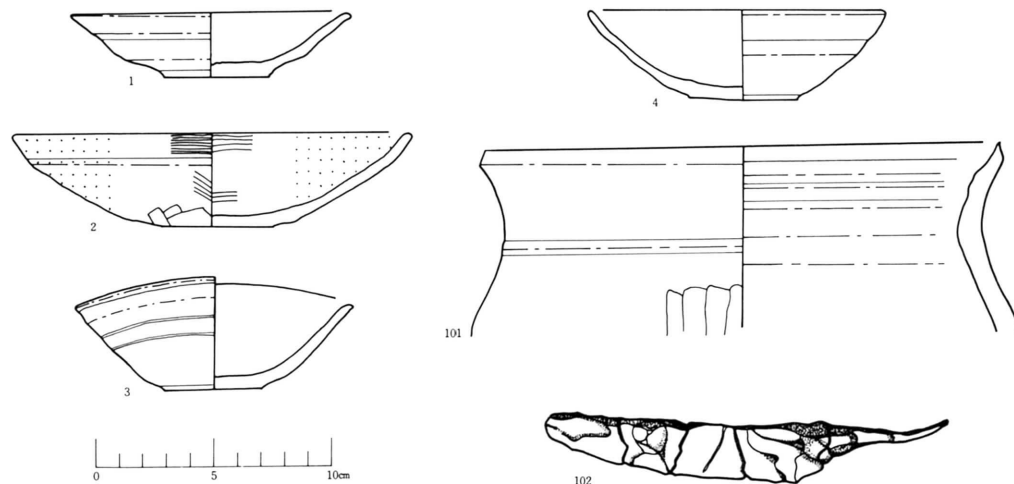
(1) 坏型土器

完形は少なく反転復元によるものを合わせて4点の出土。B類は住居跡内ピットから出ている。

B類は、No. 1（写真No. 1）、No. 3（写真No. 3）、No. 4（写真No. 5）の3点である。何れの坏も石英細粒・粗砂等を含む粗雑な胎土で、浅黄橙～明褐色の色調を呈す。No. 1は、磨滅のため切離しは判然としない。歪みがあるため各部位の計測値は確定したものではないが、口径12cm前後、底径4.6cm前後、器高2.7cm位がその平均値である。小型の坏にみえるのは特に器高が低いためである。体部のたちあがりは緩く、口縁で僅かに外反する。No. 3は、反転復元によるものであるが、回転糸切痕を明瞭に残している。体部には2本の沈線状痕が繞る。この場合も器形に歪みがあり、計測値は一定しない。一覧表の数値は、最大と最小の平均値である。No. 4は、内外面とも磨滅が激しく、ロクロナデの痕跡すらみえない。底部の小範囲に糸切痕が観察される程度であり、調整の有無については不明である。本遺構内出土のB類の中で最も粗悪な胎土であり、焼成も弱い。当然、磨滅の度合いも激しく、体部はその分だけ器肉が薄くなっている。

C類は、No. 2（写真No. 2）1点の実測。全体の¼程度の破片による反転復元である。内外面とも黒色処理され、外面一部にも篋みがきの痕跡が観察される。石英・粗砂を混入する胎土。焼成は普通である。体部の上方部分には、沈線とまではいかないが、浅い条痕が繞る。この種の坏は他にAg 03堅穴住居跡にも1点みられるが、何れの場合も各々の遺構内に於いて明らかに埋土中からの出土であり、前述のB類坏と共伴すると断定できるほどのものではない。

他に坏類は、床面より回転糸切痕を残すC類底部片がある。



図版4—2 Ado9堅穴住居跡出土遺物

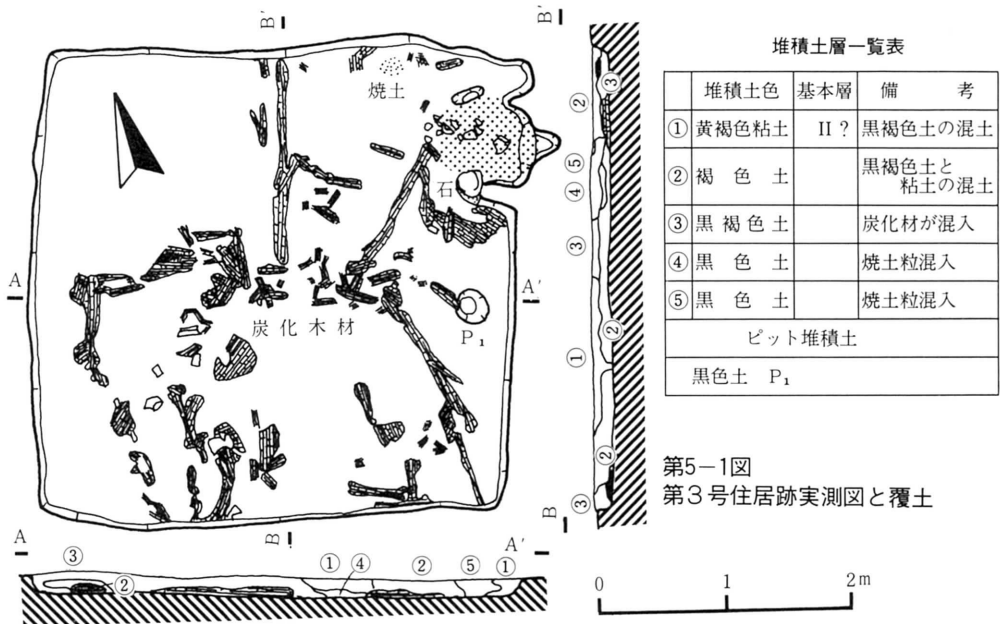
(2) 甕型土器

甕は、No. 101 の土師器がある。磨滅が激しく、口縁部付近も剝落したりしているため本来のあり方とは異なっている。ロクロ使用の土師器であり、外面は縦方向にヘラナデ痕がある。他に体部片が若干あるが、外面には篋削りを施しているものが多い。焼成は良好、胎土はあまりよくない。

(3) その他

鉄製品がある。全長18cm、最大幅2.7cm程度の刀子と思われ、床面からの出土である。また、須恵器については、A類はみられず、甕の体部片が床面に僅か1点ある程度である。

3号竪穴住居跡 (Ag03住) 第5図



第5-1図  
第3号住居跡実測図と覆土

〔平面形〕 一辺が3.6m程の正方形プランを示し、その壁のコーナーは角張る様相を呈す。

〔断面形〕 各壁は、床面から幾分急な角度で立ち上がり、検出面に続く。

〔堆積土〕 黒褐色土と黒色土の2層から構成される。上層には黒褐色土が堆積するが、粘土ブロック・炭化物等が多量に見られ、その割合から3層に細分される。また下層に占める黒色土は、部分的な層をなすもので焼土・炭化物等が多く混入する。

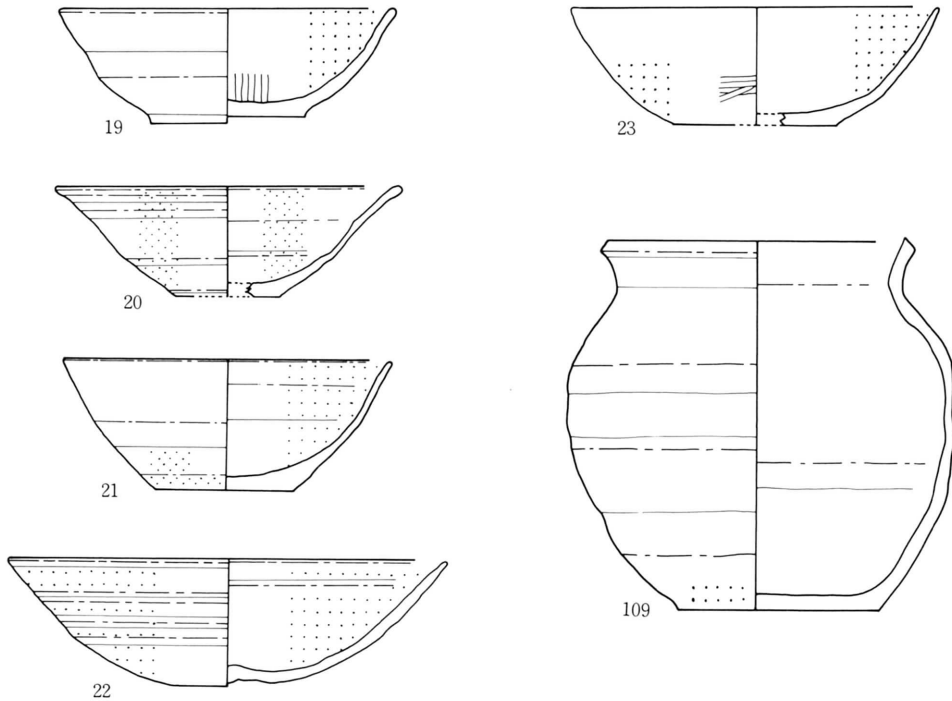
〔床面〕 基本層II・明黄褐色粘土層を掘り込み、床面として平坦に構築している。また床面全体が暗赤褐色を呈して確認された。

〔カマド施設〕 東壁北寄りに確認された。その燃焼部の規模は約30×35cm程で、床面を約8cm程掘り窪めている。また燃焼部の両側には、先端に礫を埋め込んで、それを粘土で被覆した袖が確認され、中央付近からは支脚用と思われる角礫を検出した。煙道は約20cm程度の長さ

をもち壁外へ延びるが、その先端は舌状に切れ煙出し部と思われる痕跡は見られなかった。

〔その他の施設〕 遺構内から検出したピットは1個（P<sub>1</sub>）だけであり、規模・位置・形状等からはば柱穴と考えられる。規模は約24×25cm×深さ約22cmを測る。

〔性格〕 床面から炭化材・焼土・炭化したカヤ等が数多く検出された。炭化材は、各々の壁際から床面中央部分にむかっているものが多く見られ、カヤ等においては、炭化材に見られる様な規則性は確認できなかった。これらのことから当住居跡は焼失家屋として考えられる。



図版5-2

出土遺物 第5-2図

(1) 坏型土器

本遺構内出土の遺物は焼失の際の過熱を受けたと思われる、黒色変化するなどして本来的な坏の様相とは異なったりしている場合が多い。実測可能な坏は、No.19（写真No.23）、No.20（写真No.96）、No.21（写真No.97）、No.22（写真No.98）、No.23の5点である。完形のものはなく、No.19を除いて何れも反転復元のものである。

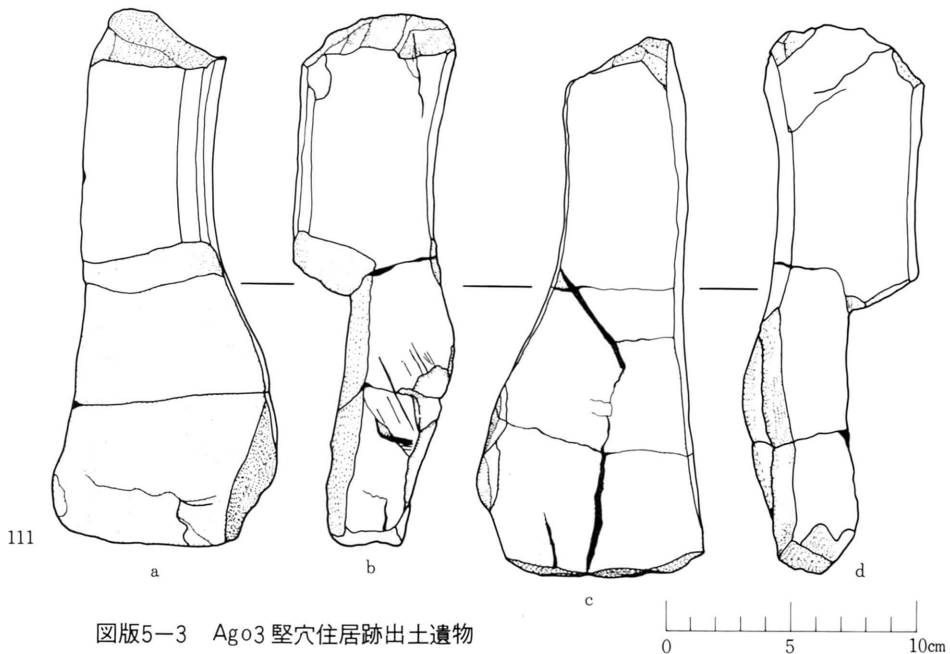
No.19はC類の坏で、床面からの出土。回転糸切無調整。体部外面に黒斑を有している。内面の篋みがきの単位は下方に残るが、上部は磨滅のため不明である。石英・細砂を含み、C類としては粗雑な胎土で、焼成も弱い。No.20は、内外面とも黒色変化しており、一見してC類の坏

と誤認されやすいが、みがきの痕跡はなく、また、内外面とも赤褐色を呈す色調の異なった破片が接合することなどから、本来的にはB類の範疇にある坏と思われる。体部のたちあがりはやや直線的で器肉は薄い。底部の切離しは欠失のため不明。胎土には石英粒を含む。焼成良好。No.21は、回転糸切無調整。前述のNo.20と同様の色調を呈す部分もあるが、この場合は内面に光沢があることから、C類の坏と思われる。内面の黒色処理の残り方は必ずしも良好ではないが焼失の際の過熱による変化を受けたものであろう。No.22は、埋土中からの出土。磨滅が激しくロクロ成形痕はまるでみられない。内外面とも黒色処理、篋みがき仕上げであると思われるがその単位は不明である。無段・丸底風でロクロ以前の土器とも思えるが、内面底部の突出部分のあり方から、ロクロ成形のC類とみても大過ないであろう。No.23は、カマド焚口部分からの出土。全体の $\frac{1}{3}$ 程度の破片による反転復元である。切離しは磨滅のため不明である。体部外面下方部分に小範囲の篋みがき痕が観察されることから、本来的には内外面全体に同様の調整が及んでいたものであろう。

以上6点について記したが、これらの坏は他の遺構出土の坏に比して器肉が薄く、しかも器形が多様であることを付記しておく。

## (2) 甕型土器

No. 109 (写真No.22) の小型甕が出土している。ロクロ成形によるものであり、底部に回転糸切痕を残す。体部は磨滅のためロクロ成形痕が消えて、巻上げの痕跡が露出している。磨滅の激しい所は、その分だけ器肉が薄くなっている。外面底部付近は黒色変化しており、一部には炭



図版5-3 Ago3 堅穴住居跡出土遺物

化物が付着している。胎土中には石英細粒・砂・小石等を含んでいるが、全体としてはそう悪くはない。焼成は、明黄橙色の色調からも察せられるように軟質である。

この他には、須恵器甕の体部細片が1点だけ埋土中から、また、土師器甕の体部片が床面から若干出土している。

(3) その他

No. 111 (写真No.24) の砥石が出土している。材質は凝灰岩で、縦21cm前後、横4～6cm、厚さ約4cm大である。一部剥落した部分があるが、その部分での厚さは、3cm前後になっている。剥落部分と両方の先端部分を除いた四面が使用されており、一部面には斜位の削痕が走る。また、各所にはひび割れの跡がみられ、保存状態は芳しくない。

4号竪穴住居跡 (Ah 18住) 第6-1図

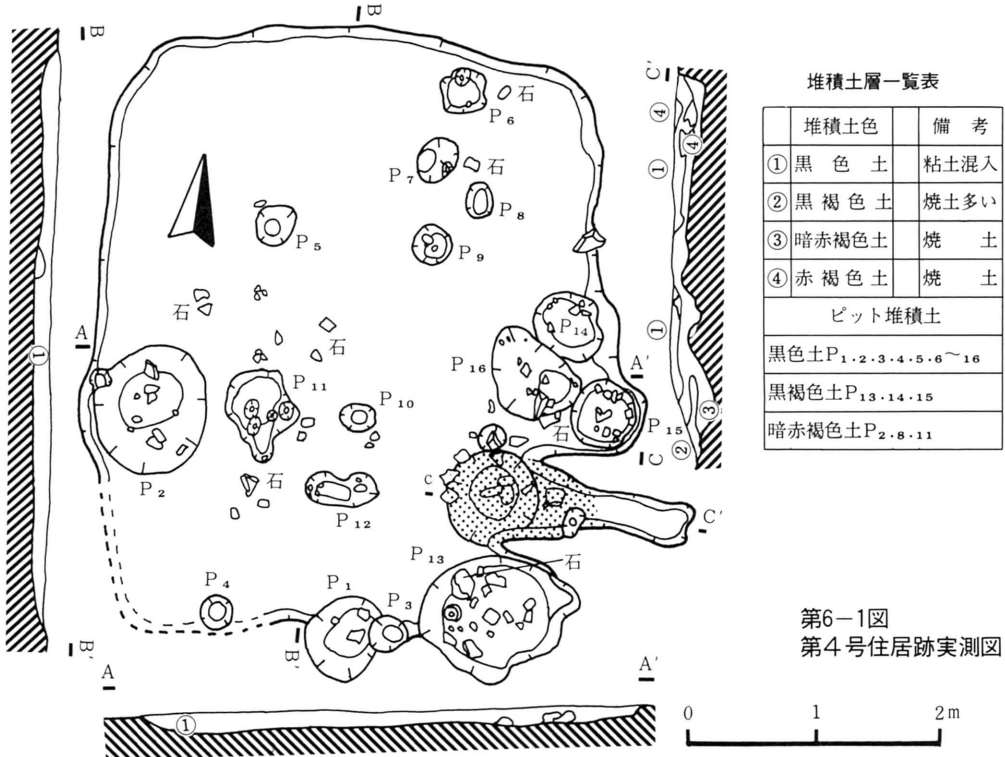
〔平面形〕 南壁と西壁の一部が削平のためはっきりせず、全容が明らかでないが、ほぼ隅丸の方形プランを示すものと推測される。

〔断面形〕 各壁の断面は、床面から緩い傾斜で立ち上がり、検出面に続く。

〔堆積土〕 粘土ブロックが混入する黒色土の単一層で構成される。

〔床面〕 基本層Ⅱ・明黄褐色粘土層を掘り込み、平坦に構築している。

〔カマド施設〕 東壁南寄りに確認した。焼成部の規模は約66×70cmで、その焼成の厚さは



約3～4cm程で赤く焼け固まっていた。またその両側には、粘土を主体として、先端に礫を埋め込み被覆した袖を確認した。煙道は壁に沿って緩やかに立ち上がった後、傾斜しながら煙出し部に続く。なお煙出し部は、煙道に直結されその区別がつかない。これらの規模は長さ約93cm・幅約25cm・深さ約8～10cmである。焼土は燃焼部から煙道先端部にまで及んで確認された。

〔その他の施設〕 遺構内から大小ピットを16個検出した。その中で規模・位置・形状等から柱穴と推察されるピットは5個（P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>）、同様に貯蔵穴様と推察されるピットは6個（P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>14</sub>・P<sub>15</sub>・P<sub>16</sub>）確認された。柱穴は、南壁に寄り、貯蔵用ピットはカマドを中心として左右に分かれるが、P<sub>2</sub>は西壁際に位置する。

第3表 住居跡内ピット計測値他一覧表

No.		径 (cm)	深さ(cm)	平面形	堆積土	No.		径 (cm)	深さ(cm)	平面形	堆積土
1	貯	57 × 65	13	楕円形	黒色土	9	柱	27 × 31	14	楕円形	黒色土
2	貯	84 × 92	21	楕円形	暗赤褐色焼土 黒色土	10	柱	24 × 20	8	楕円形	黒色土
3	柱	26 × 26	37	円形	黒色土	11	炉址?	55 × 70	10	不整形	暗赤褐色焼土 黒色土
4	柱	25 × 25	30	円形	黒色土	12		53 × 17	4	長楕円形	黒色土
5	柱	30 × 29	19	円形	黒色土	13	貯	110 × 95	24	楕円形	黒色土・黒褐色土
6		33 × 35	5	楕円形	黒色土	14	貯	62 × 52	14	楕円形	黒色土・黒褐色土
7		27 × 37	7	楕円形	黒色土	15	貯	50 × 55	9	楕円形	黒色土・黒褐色土
8		17 × 26	21	楕円形	暗赤褐色焼土 黒色土	16	貯	70 × 57	9	楕円形	黒色土

出土遺物 第6—2図

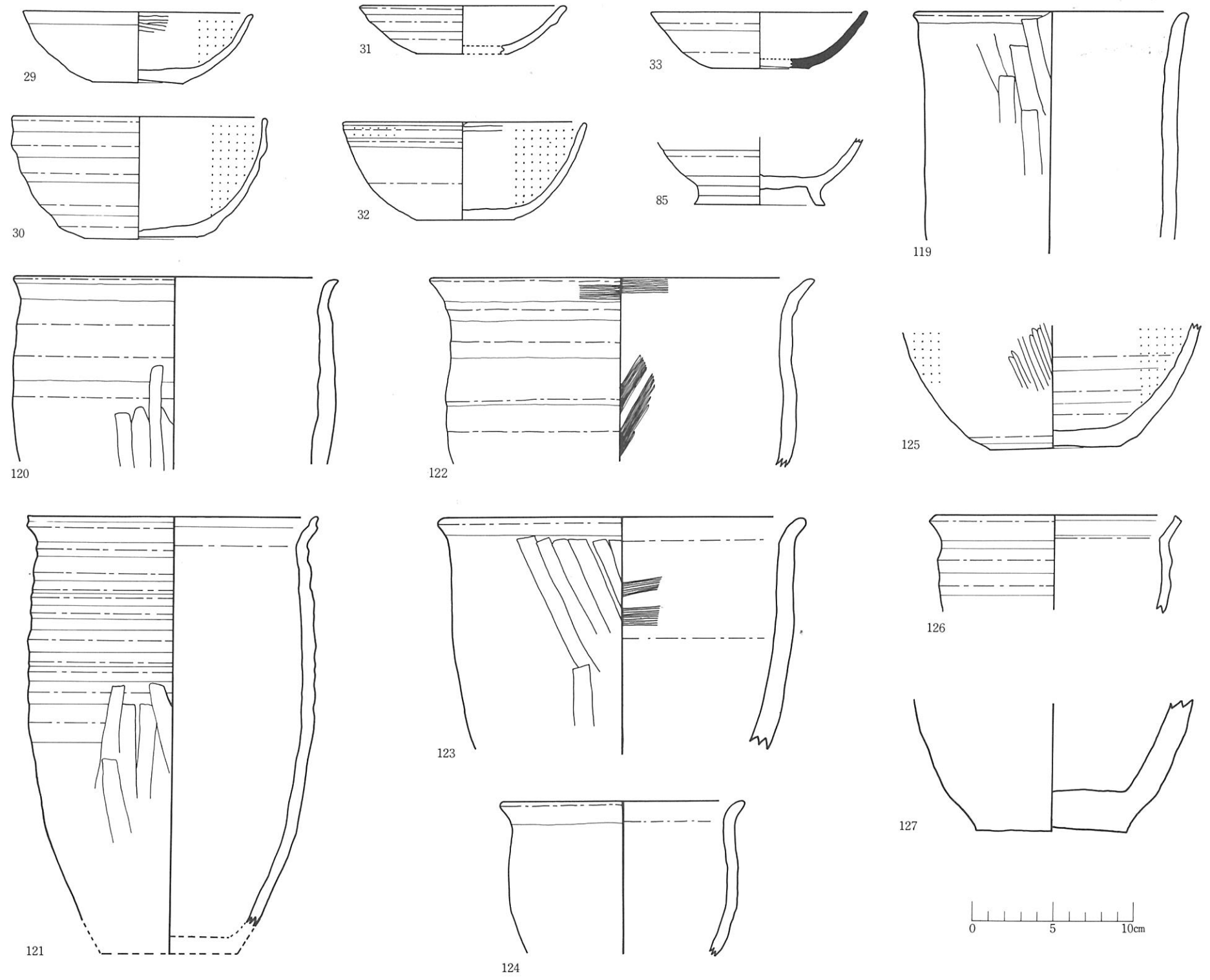
(1) 坏型土器

A類1点、B類1点、C類3点、他に高台付坏が1点、計6点の出土。

A類はNo.33で、全体の1/4程度の残存である。埋土中からの出土であり、切離しも不明である。器高の低い小型の坏で、胎土・焼成とも比較的良好である。

B類は、No.31（写真No.36）の1点が埋土中から出土している。底部が欠失しており、切離しは不明。推定器高は2.9cmと低く、器形的にはA類のNo.33と大差ない。しかし、胎土中には、石英細粒・細石が含まれ、やや粗雑で焼成も弱い。

C類は、No.29（写真No.34）、No.30（写真No.35）、No.32の3点である。No.29は、住居跡内ピットからの出土で、回転糸切によるものである。磨滅のため、再調整の有無については断定しかねる。外面には黒斑がみられ、内面の黒色処理が一部消しとんでいる。ここでは、体部の器肉に比し、底部のそれがかかなり厚目であることが、実測図より窺える。内面の篋みがきの単位は体部方向に若干確認されるが、全体としては不明な部分が多い。外面の色調はにぶい橙色を呈し、胎土・焼成とも比較的良好である。No.30は、貯蔵穴と推察されるピット内からの出土であり、本遺跡



図版6-2 Ah 竪穴住居跡出土遺物実側図

内では大きめのC類坏である。体部外面の凹凸は、上方が特に激しく、口縁は直口気味になる。この場合も磨滅が多く、切離し技法は不明である。また、内面の篋みがきの単位も確認できない。No.32は埋土中からの出土。全体の1/4程度の残存による反転復元図である。回転糸切無調整。全体として磨滅、ひび割れが多く、遺存状態は悪い。体部はふくらみをもってたちあがり、直口気味の口縁につながる。内面の篋みがき痕は、口縁付近で僅かに数条みられるだけである。胎土中には石英細粒・粗砂等を混入しており、焼成は軟質。

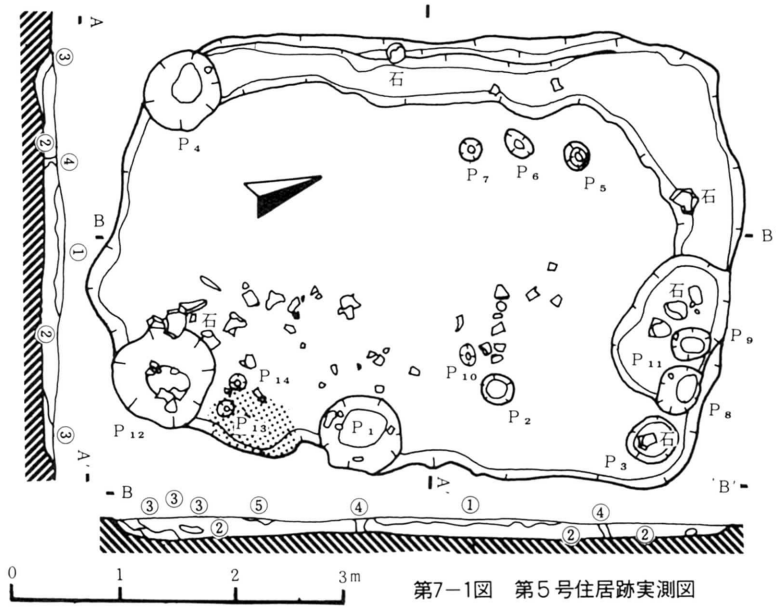
高台付坏は、No.85（写真No.37）の1点。体部下端から脚の部分の反転実測図である。底部の切離しは回転糸切によるもので、その後高台をとりつけている。粘土を盛り上げて接着しているのが察せられる。脚は主旨『八』の字状になっているが、場所によっては強く外反する部分もある。内面の器面調整は特にみられず、Ah06堅穴住居跡出土No.84の高台付坏と同様に、B類の範疇にも含まれる類いの坏である。

## （2）甕型土器

甕型土器は、No. 119（写真No.40）、No. 120（写真No.38）、No. 121（写真No.39）、No. 122、No. 123（写真No.41）、No. 124、No. 125（写真No.42）、No. 126、No. 127の9点である。全て土師器であり、ロクロ不使用の方が多い。また、完形のものはないが、No. 121が最も残りがいい。

No. 119は、ロクロ不成形の中型の甕である。肩部無段で頸部が胴部と直結する器形である。口縁直下より縦方向の篋削りが施されているが、全体として雑なつくりであることは否めない。また、内面の調整痕は特に観察されない。色調は明褐色を呈し、混入物の少ない胎土で、焼成も良好である。No. 120は貯蔵穴内出土の甕である。接合された破片によって色調が異なり、浅黄橙色～灰褐色を呈す。No. 121はカマド付近の出土、ロクロ成形によるものであるが、底部を欠失しており、切離しは不明。No. 122は住居跡内ピットからの出土、全体的に歪みがあり雑な作りである。赤褐色を呈す粗雑な胎土であるが、焼成は良好である。No. 123は、カマドとピットからの出土片を接合したものである。形態的にみてNo. 119的でもある。No. 124は、床面出土のロクロ不成形小型甕である。胎土焼成とも不良。No. 125は貯蔵穴内出土、内外面に黒色処理、ヘラミガキを施す特異な土師器である。内面に残る条痕が切れ目なく平行的に繞ることからロクロ成形によるものとも考えられるが断定できない。No. 126はカマド内からの出土。ロクロ成形によるものと思われ、体部の凹凸が顕著に残っている。橙～黄橙色を呈し、胎土焼成ともあまり良くない。No. 127は埋土内からの出土、厚手の甕の底部付近である。底部で2.5cm前後、体部下端で1.3cm前後の厚さである。外面には細石の移動痕が縦方向にみられ、本来的には篋削りを施したものであろうがその範囲は不明である。内部の仕上げについては、端的にいて不明であるが、底部周辺に同心円状のナデつけをした痕跡がある。混入物の多い粗雑な胎土であるが、焼成はやや良好である。





堆積土層一覧表

堆積土色		備 考	堆積土色	備 考
① 黒褐色土	10Y R 2/6	焼土・炭化物混入	④ 黒褐色土	10Y R 2/6 カクラン部分
② 黒色土	7.5Y R 3/6	粘土・炭化物・焼土混入	⑤ 明黄褐色粘土	10Y R 6/6 基本層IIに類似
③ 黒色土	10Y R 2/6	シルト・焼土粒混入	ピット堆積土	黒褐色土(10Y R 2/6)・黒色土(10Y R 2/6)

5号竪穴住居跡 (Ah 06住) 第7-1図

〔平面形〕 南北に長軸を持つ隅丸の長方形プランを呈す。

〔断面形〕 東西壁が緩やかな立ち上がりを示すのに対し、南北のそれはやや急である。

〔堆積土〕 黒褐色土・黒色土で構成され、下層の黒色土は混入物の相違から2分される。

〔床 面〕 基本層IIの明黄褐色粘土層を掘り込み、平坦ではあるが若干の傾斜を持つ。また床面上には、III層のシルト質土が混じっている部分もみられる。

〔カマド〕 検出・確認されない。

その他、貯蔵穴・柱穴と推察されるピットがある。規模等については下表に一覧する。

第4表 住居跡内ピット計測値他一覧表

No.		径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆 積 土	No.		径 (cm)	深さ (cm)	平面形	堆 積 土
1	貯	56 × 70	20	楕円形	黒色土・黒褐色土	8		42 × 35	7	楕円形	黒色土
2	柱	24 × 28	11	楕円形	黒色土	9		27 × 33	3	楕円形	黒色土
3		42 × 43	8	円形	黒色土	10	攪乱	16 × 12	7	楕円形	黒褐色土
4		57 × 55	12	楕円形	黒色土	11		123 × 94	5	楕円形	黒色土
5	柱?	21 × 18	42	楕円形	黒色土	12	貯	75 × 75	32	円形	黒色土
6	柱	24 × 23	30	楕円形	黒色土	13	攪乱	13 × 15	7	楕円形	黒褐色土
7	攪乱	16 × 15	10	楕円形	黒褐色土	14	攪乱	14 × 16	10	楕円形	黒褐色土

出土遺物 第7—2図

(1) 坏型土器

A類1点、B類3点、C類1点、高台付坏1点、計6点の出土。何れも反転復元による実測図であり、口径は推定計測値である。

A類は、No.25（写真No.26）の1点である。一部にB類的な色調を呈する部分もあるが、全体として灰白色が強い。切離しは回転糸切によるもので、再調整はない。内面に比して外面体部の凹凸が目立つ。混入物が少なく、胎土・焼成とも良質である。

B類は、No.26（写真No.27）、No.27（写真No.28）、No.28（写真No.29）の3点である。全て回転糸切無調整の坏で、口縁が外反する器形である。

No.26は、住居跡内ピットからの出土。内外面にひび割れの痕跡が多くあるが、切離し痕は明瞭に残る。明黄橙色を呈し、混入物の多い粗雑な胎土であり、焼成は弱い。No.27は、床面出土。歪んだ器形で雑なつくりである。他のB類に比して体部のたちあがり急であり、体部下端の一部に筥による削痕がみられる。赤褐色を呈し、胎土・焼成ともあまりよくない。No.28は、住居跡内ピットからの出土。口縁の外反度合いが強く、体部の凹凸もさほど顕著でない。底部面だけが黒色変化している。また、内面については底部近くに段差があり、朱色を呈する部分もみられる。が、人為的なものかどうかについては明言できない。にぶい褐色を呈し、B類としては胎土も良質な方である。焼成は良くしまっている。

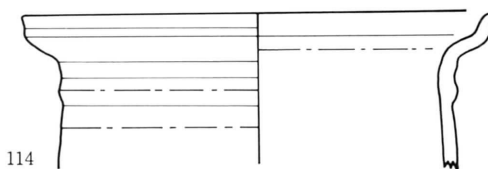
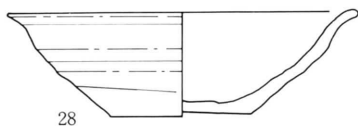
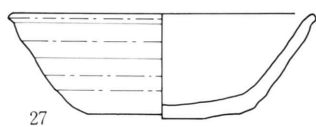
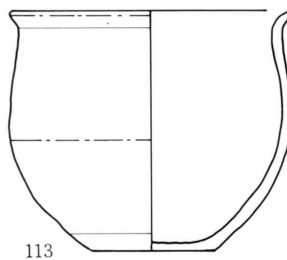
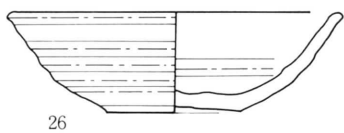
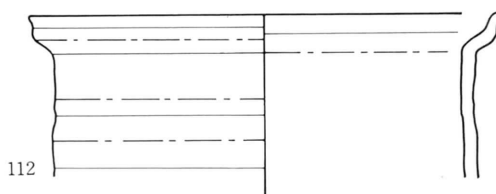
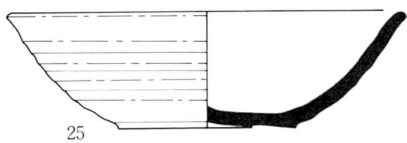
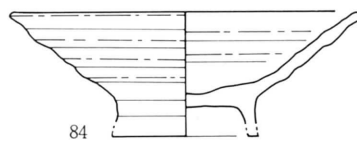
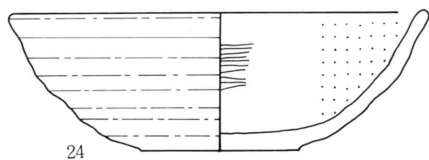
C類は、No.24の1点である。住居跡内ピットからの出土。磨滅のためロクロナデ痕は消え去っているが、底部には回転糸切の技法が残り、再調整もみられない。内面の筥みがきの単位は一部分に僅かに観察されるが、全体として光沢がなくみがきの方が確定しない部分が多い。胎土・焼成とも良質である。

No.84（写真No.30）は、住居跡内ピットからの出土。内外面の調整は一切みられず、また、一部には黒色付着物の痕跡がみられるが、全体として暗褐色を呈す。B類の範疇の土器類にも比定されるべきものでもある。底部の切離しは回転糸切によるものと思われ、底部と高台との境界には亀裂が入る。

(2) 甕型土器

大型のものから小型のものまで7点の実測であるが、完形品はない。何れも反転復元による実測図である。ロクロ成形の土師器のみである。

No.112（写真No.31）は、口縁から体部にかけての破片である。口唇部に窪みを有す。推定口径約19cm位で、本遺跡内では中型の大きさである。小石を混入する粗雑な胎土であり、焼成は比較的良好。No.113（写真No.32）は、小型甕で底部に回転糸切痕を残す。内外面とも磨滅が激しく、ロクロナデの痕跡は消え去っている。胎土中には粗砂・雲母等を含み、焼成は良好である。



図版7-2 Aho6 堅穴住居跡出土遺物